

徒鎮撫の功を奏せざりしヘンガルの知事を死刑に處した。一二八六年バルバンが死し其の繼嗣カイコバッド(Kaikobad)は毒殺せられ、一二九〇年奴隸王朝は遂に亡びたのである。

奴隸朝の世系(一二〇六—一二九〇年)

1. クツブ・ウッヂン・アイバク(Kutub ud-din Ibak) …………… 一二〇六	6. モイズ・ウッヂン・バールラム・シアー(Moiz ud-din Bahram Shah) …………… 一二四〇
2. アラム・シアー(Aram Shah) …… 一二一〇	7. アラ・ウッヂン・マスド・シアー (Ala ud-din Masud Shah) …………… 一二四二
3. シュムス・ウッヂン・アルタムシ(Shams ud-din Altamsh) …………… 一二二〇	8. ナシル・ウッヂン・マームード・シアー (Nasir ud-din Mahmud Shah) …… 一二四六
4. ロックン・ウッヂン・ファイルズ・シアー (Rokun ud-din Firuz Shah) …… 一二三六	9. ギヤス・ウッヂン・バルバン (Ghiyas ud-din Balban) …………… 一二六七
5. ラジヤ・ベガム(Raziya Begam) 一二三六	10. カイコバッド(Kaikobad) …………… 一二八六

キルジ朝 一二九〇年奴隸王朝の亡ぶるやキルジ(Kilji)家のジャラル・ウッヂン(Jalal ud-din)が立つてデリーの王位を継ぎ、其の版圖を擴張してデッカ(Dacca)に達せしめ、尙ほマルワの頑強なる

印度人と争ひ、其の甥にしてカルラ(Karra)の知事たるアラ・ウッヂン(Ala ud-din)は騎兵を率ゐてヴィンヂヤ山を踰えてビルサ(Bilisa)の佛教寺院を掠め、ブンデルカンド(Bundelkand)を荒らし、デッカン侵入の大企圖を立て森林及び山地を通過して忽然デオギリ(Degiri)市に現はれて之を掠奪し、印度軍を破り多額の償金を得て歸つた。アラ・ウッヂンは性勇敢なりしも暴逆にして遂に其の叔父ジャラル・ウッヂンを殺し、一二九五年代はりて王位に即いたのである。時にグジュラトの印度人は一時其の獨立を恢復したるも、一二九七年其の王カルン・ライ(Karun Rai)はアラ・ウッヂンの軍隊の爲めに破られて遁れ、美貌を以て有名なる其の妻カマラ・デヴィ(Kamala Devi)はアラ・ウッヂンに奪はれ、アンハルワラ(Ahhalwara)は占領せられ、カムメイ(Camlay)は掠められ、グジュラト全部は再び征服せらるゝに至つた。此の頃また蒙古人が侵入したるもアラ・ウッヂンはラホール及びデリー城門の下に之を撃退し、次で一二三〇五年また之を撃破して其の捕虜を虐殺した。是より先き一二三〇〇年アラ・ウッヂンはジャイプル・ラジプト(Jaipur Rajput)族を伐つてリンチンブル(Rintimbur)を略し、一二三〇三年チトル(Chitore)の城寨を抜きてセンヂア・ラジプト(Sesodia Rajput)族の一部を服し、また其の部將はマルワ王を撃破しウジャイン(Ujain)、マンド(Mandu)、ダール(Dhar)、チャンデリ(Chanderi)等を服したのである。かくてアラ・ウッヂンは既にヴィンヂヤ山以北の印度人を降したから更に南印度の征服を企圖し、一二三〇三年

其の部將マリク・カフル (Malik Kafur) をして兵を率ゐてベンガルを通過し、テリಂಗアナ (Telangana) の首府ワランガル (Warangal) に進軍し、三年の後マルワを通過して、マールタ (Maratha) に侵入し、デオギリ (Deogiri) を占領して其の王ラム・デオ (Ram Deo) を降し、更にカルナチック (Karnatic) に侵入して印度極南の地にイスラム教の禮拜堂を建立した。然しながらアラ・ウッチンの全印度平定の企圖は遂に成功するに至らず、グジラトが先づ叛旗を翻し、ラジプト族はチトル (Chitora) を恢復しラム・デオの子ハルバル・デオ (Harpal Deo) はデッカンを煽動して兵を挙げしめ、イスラム教の守備兵を驅逐するに至つたから、アラ・ウッチンは憤悶の餘り一三二五年に死んだのである。是に於て其の子シハブ・ウッチン (Shahab ud-din) 及びムバラク (Mubarek) が相次で立ちたるも、キルジ朝末路の五年間に其の實權はクスル汗 (Kusulkan) に歸し、功臣マリク・カフルは其の殺す所となり、ムバラクもまた弑せられ、クスル汗が遂に王位を篡つた。然るにクスル汗もまた一三二〇年遂に其の兵士の殺す所となり、キルジ朝は茲に亡びたのである。

キルジ朝の世系(一二九〇—一三二〇年)

- | | |
|--|--|
| 1. ジャラル・ウッチン・フィルズ・シアー (Jalal ud-din Firuz Shah) …………… 一二九〇 | 4. シハブ・ウッチン・オーマル・シアー (Shahab ud-din Omar Shah) …… 一三二六 |
|--|--|

- | | |
|--|--|
| 2. ロクン・ウッチン・イブラヒム・シアー (Rokun ud-din Ibrahim Shah) …… 一二九五 | 5. クツブ・ウッチン・ムバラク・シアー (Kutub ud-din Mubarek Shah) 一三二七 |
| 3. アラ・ウッチン・ムハマッド・シアー (Ala ud-din Muhammad Shah) …………… 一二九六 | 6. ナシル・ウッチン・クスル・シアー (Nasir ud-din Kusur Shah) …………… 一三二〇 |

ツグラク朝 キルジ朝の篡奪者クスル汗を殺せる軍隊の首領はギヤス・ウッチン・ツグラク (Ghiyas

ud-din Tughlak) といひ、土耳其人にして奴隷より起り後バンジブ國境の知事となつたが、是に至り自立してツグラク (Tughlak) 朝を創め、都をデリーの東約二里の地に遷してツグラカバッド (Tughlakabad) と名づけた。次で其の子ジュナ汗 (Juna Khan) が兵を率ゐてワランガルを征服し、カカチア・ラジプト (Kakatia Rajput) 王朝を滅ぼしたのである。ギヤス・ウッチンは一三二五年死しジュナ汗が立つてムハマッドと稱した、彼は學問を好み兵に長じ且つ克己心に富み、また星學を修め詩を能くし論理及び希臘哲學に通じたが、性残忍刻薄にして無謀なる行爲多く、遂に功名心に驅られて波斯を伐たんとし、また支那に遠征軍を發したるも、波斯に發せる軍隊は給與の不足なる爲め自國を劫掠し、支那に送れる遠征軍はヒマラヤ (Himalaya) 山中に於て殆ど全滅したのである。ムハマッドはまた

南印度を征服せんとし二回デリーの人民を率ゐてヴィンヂヤ山を横ぎりデオギリに至つたが、糧食が
 缺乏したる爲め功を奏さなかつた。かくてムハマッドは其の財庫を蕩盡するに及び、已むを得ずして
 銅貨を發行し強ひて銀と同貨ならしめんとせるに、外國の商人が其の授受を拒み之れが爲めに貿易が
 中絶するに至つたから、納税の際回収して遂に之れを廢止したといふことである。此の間其の羈絆を
 脱せんとするもの諸方に起り、ベンガルが先づ叛旗を翻して一三四〇年イスラム教の獨立王國とな
 り、カルナチックの印度王ブカ・ライ (Bukka Rai) は新都をヴィジヤナガル (Vijayanagar) に建て、
 一三四四年ヴィジヤナガル王國を建設し、ハッサン・ガング (Hassan Gangu) は一三四七年イスラム教
 の獨立王國をデッカに建設した、之をバーマニ (Bahmani) 王朝といふのである。ムハマッドは是等の
 叛徒を討たんとして南に向つたが、既にしてグジュラト、マルワ、信度に反亂が起つたから軍を旋し
 て之に向ひ、一三五一年遂に印度河畔の陣中に死んだ。是に於て其の子フィルズ・シアー (Firuz Shah)
 が立ち、頗る仁政を布きてベンガル及びデッカの諸王國の獨立を承認したが、ツグラク王朝は後幾
 許もなくしてイスラム教徒の騷亂及び印度人の叛亂の爲めに瓦解したのである。其の後ツグラク王朝
 最後の王マームードの時に至り、一三九八年帖木兒が印度に侵入してデリーを陥れ、市民を虐殺し戦利
 品を満載してミールト (Mirat) 及びハルドワル (Hardwar) を經て同年中央亞細亞に退軍した。帖木

兒の去るやマームードはグジュラトの隱栖より出でて一四一二年に至るまでデリーに君臨したが、有
 名無實にして其の死後一四一四年に至りツグラク王朝は遂に滅亡したのである。

ツグラク朝の世系(一三二二—一四一四年)

1. ギヤス・ウッヂン・ツグラク・シアー (Ghiyas ud-din Tughlak Shah)..... 一三二二—	6. ムハマッド・シアー・ツグラク二世..... 一三八九—
2. ムハマッド・シアー・ツグラク (Muhammad Shah Tughlak)..... 一三二五—	7. シカンドル・シアー (Sikandar Shah)..... 一三九四—
3. フィルズ・シアー・ツグラク (Firuz Shah Tughlak)..... 一三五二—	8. マームード・シアー (Mamud Shah)..... 一三九五—
4. ギヤス・ウッヂン・ツグラク・シアー二世..... 一三八八—	9. ナスラト・シアー (Nasrat Shah) 一三九五—
5. アブベクル・シアー (Abubekr Shah)..... 一三八九—	10. ダウラト・ハン・ロヂ (Daulat Khan Lodhi)..... 一四一四—

文學及び科學の勃興 古代印度の歴史は第八世紀を以て終を告げたのであつて爾後二百年間は方に

印度の暗黒時代といふべく、此の間には大王朝起らず、大文學者出でず、大建築成らず、歴史は唯此の暗黒時代を沈黙するのみであつたが、第十一世紀に至りてイスラム教徒の侵入し來るに及び、從來互に相攻伐せる諸王國は外來の侵略者に對抗せんが爲め一大聯合を形成するに至り、之が爲め國民思想旺盛に赴きて文學及び科學が再び勃興し、宗教及び言語にも變化を及ぼすに至つたのである。然るに印度の諸王國は遂にイスラム教徒の征服する所となつたが、然かも其の諸王朝の統治は印度人の思想、宗教、文學、農業、商業及び諸種の産業に對して重要な影響を及ぼさなかつたやうである。故に當時に於ける印度の歴史は絶えず戦争及び虐政の荒らす所となれる一國の歴史ではなく、其の統治者の下に農業を勵み、商業及び製造を盛にし、詩歌藝術を修め、自己の爲めに考へ併せて宗教上の改革の爲めに争ひたる一國民の歴史といふことを得るのである。かくて其の文學には詩人マガ(Maghi)が第十一世紀にマルワのボーシヤ(Bhoja)王朝にありてシスバラ・ヘダ(Sispara Boda)の詩を作つた、此の詩はマハ・バーラタ(Maha Bharata)中の一挿話を取れるものであつてクリシナ(Krishna)のシスバラを殺せることを述べて居るのである。ヒナレス(Benares)またはベンガルのスリ・ハルシヤ(Sri Hansha)は第十二世紀に出で、またマハ・バーラタの挿話を基礎としてナイシヤダ(Naispada)の詩を作つた。またムドラ・ラクシヤサ(Mudra Raksasa)及びヴェニ・サンハラ(Veni Sanhara)の二大戯曲は此

の時代に成つたものであつて今尙は聲價を維持して居る。迦濕彌羅(Kashmir)のソマデヴァ(Somadava)は古代の諸記録を涉獵して有名なる物語集カタ・サリト・サガラ(Katha Sarit Sagara)を編纂した。また古バンチャタントラ(Panchatantra)より編纂せるヒトパテシヤ(Hitopadesya)の訓話がある。最も後れて第十二世紀にベンガルのジヤデヴァ(Jayadeva)は有名なるギタ・ゴヴンダ(Gita Govinda)の詩を作りてクリシナとラダ(Rada)との愛を歌つて居る。此の詩はサンスクリット(Sanskrit)語の琴歌中聲調の最も佳なるものであつて全篇が生物の神に對する愛を描いたものである。科學者には第十二世紀に有名なるバスカラ・アチャリア(Bhaskara Acharya)が出て一五〇年に天文學上の大著述シッドハント・シロマニ(Siddhanta Siromani)を著はした、其の中には數學及び代數學を詳説して居るのである。また南印度には有名なるサンスクリット學者及び註釋家が出て居る、ヴィジャヤナガル(Vijayanagar)印度教王國に仕へたるサヤナ(Sayana)またはマダヴァ(Madhava)は第十四世紀の中頃に吠陀(Veda)及び其の他の神聖なる著述の有名なる註釋を編纂した、而して此の註釋は過去傳説の解釋を近代に傳ふる有数の著述であつて今尙は全印度に於て有力なる典據とされて居るのである。其の後今日に至るまで出でたる著述にして近代の印度人に其の祖先の古文學を傳ふるものは、サヤナの註釋の如き有力なるものがない、故に南印度は近代宗教の改革及び近代文學の産出に於て先頭に立つが

如く、古神聖文學の保存及び解釋に於てもまた其の先頭に立つものといふべきである。

言語及び文學の變化　サンスクリット語は前第九世紀以後普通に行はれず主として經典及び文學上の用語となり、次で佛教の用語にはパーリ(Pali)語が行はれたが、第五六世の交に至り印度教の新に興るに及びパーリ語が廢れて普通人民の用語たるプラクリット(Prakrit)語が之に代はつた。然るにラジプト族の起れる第九第十兩世紀に於ける政治上及び種族上の大革命は更に印度の言語に變化を來し、プラクリット語が衰へて近代語が之に代はるに至つたのである。かくてヒンデ(Hindi)語は印度の言語となり、ベンガリ(Bengali)語は東印度に行はれ、マハラチ(Maharati)語は西印度に行はれ、南印度にはドラヴィダ(Dravid)語系のタミル(Tamil)語、テルグー(Telugu)語、カナレス(Kanares)語、マラーラム(Malayalam)語等の非アーリア(Arya)語が行はれた、就中其の古文學を以て最も有名なるものはタミル語である。佛教は南印度に於ては其の國語を以て説かれたから、第九世紀より第十世紀に至るタミル文學中には佛教及びジャイナ(Jaina)教の文學が現存して居る、また一萬五千行より成る作者不詳の傳奇的叙事詩チンタマニ(Chintamani)がある。次で印度教が南印度に於て佛教に代はるに及び其の文學にも變化を來たし、一一〇〇年の頃にはラマヤナ(Kamayana)がタミル語に翻譯され、一二〇〇年代より一五〇〇年代に至る間には多數の溼婆(Siva)讚頌がタミル語を以て作ら

れ、四千頌より成るタミル語の毘溼拏(Vishnu)讚頌の一大篇もまた此の時代に製作されたのである。北印度の地方語ヒンデ語の文學は第十二世紀の詩人チャンド・バルダイ(Chand Bardai)の叙事詩ブリチーラージ・ラーサウ(Pritiraj Kasari)より端を發して居る、またラマナダ(Kamamanta)及びカピル(Kabir)の宗教上の運動は幾多の神聖なるヒンデ文學の形成を促して居る。またラジプタナには其の封建諸酋長の勇壯なる行爲を歌へる英雄的詩歌が出て居る、また第十三世紀以後に於けるデッカン最初期のマラータ詩人は皆宗教詩人であるが、明かに印度の全部を動かしたる宗教運動の刺激を受けて居るのである。ベンガル最初期の詩人はクリシナ(Krishna)と其の愛とに就て筆を執り、寓言を以て人格を有する神の生物に對する愛を表現せるものが多い、而してジャヤデヴァが第十二世紀に其の不朽のギタ・ゴヴィンダを作りて例を示せる後第十四世紀に至り、ベハルのビヂャバチ(Bidyapati)及びベンガルのチャンデダス(Chandidas)が之に倣うて今尙ほ盛に歌はるゝものを作つて居るが、其の異なる點は神に對する生物の愛及び信仰が婦女子の情人に對する愛となつて居ることである。次で第十五世紀に至りてサンスクリット語の叙事詩マハ・バーラタ及びラマヤナ(Ramayana)のベンガリ譯が成つた、而してベンガリ文學の發達に一層の刺激を與へたるものは、毘溼拏の信仰を説きたるカイタニア(Kaitania)であつて第十六世紀に出たのである。

宗教の變遷 印度教の弘布するや溼婆及び毘溼拏二神の崇拜が盛になつたが、後更に其の一神のみを崇拜するものが漸く増加し、文學建築彫刻にも其の崇拜の流行を現はすものがあるに至つた。是に於てマハ・バーラタの勇士アルジュナ (Arjuna)、ラマヤナの英雄ラマ (Rama)、佛教の開祖釋迦は皆毘溼拏の化身と信せられ、一般人民の心は漸く毘溼拏崇拜に集中したが、後またクリシナを毘溼拏の化身として崇拜するに至つたのである。當時印度の人民はウパニシアド (Upanishad) の哲學または佛教の教義を知らなかつたから、クリシナを以て唯一の神として之を崇拜するに至り、また多數の神及び女神を信せざるにあらざりしも、是等の諸神はすべて唯一勢力であつて此の勢力は悪人を懲らし正義を樹立せんが爲め、クリシナとして地上に出現せるものと漠然信じ居たのである。かくて第十二世紀に出でたる大宗教家ラマヌージア (Ramanuja) の如き一般の唯一神教の爲めに蹶起したるものがあつたから、一般印度人民の宗教心は外來宗教の刺激を受くるも變ずることなく、イスラム教徒の永き統治の下にありて尙ほクリシナの信仰を持續して居たのである。

第一篇 明時代

第十二章 明の太祖の一統

太祖の一統と外征其の一 明の太祖朱元璋は字を國瑞といひ、濠州鍾離の人であつて父の名は世珍、母は陳氏であつて四子を生んだ、太祖は實に其の季子であつた、十七歳の時父母及び三兄を失ひて僧となつたが、二十五歳の時郭子興に隨ひて興り、漸次に東南を平定し遂に師を移して北伐し元を滅ぼして帝業を成し金陵(今の南京)に都した、兵を起してより十五年の後である。帝の即位の初めには元の順帝が尙ほ上都にありて帝號を有し、擴郭帖木兒は大原に據りて山西陝西甘肅の兵を併せ機を見て大都を恢復せんとし、明玉珍の子明昇は四川に據りて夏帝と稱し、元の宗室梁王巴匝剌瓦爾密(Baqir aluarmi)は雲南に據つて居たから、支那は未だ統一しなかつた。既にして常遇春が進んで山西を取り、次で上都を陥れて順帝を應昌(内蒙古多倫諾爾)に奔らし(一三六八年)、徐達が兵を率ゐ西進して悉く陝西を平らげた(一三六九年)。然るに常遇春は軍中に於て死し李文忠が代はりて其の軍を領したが、此の時順帝は尙ほ應昌に留まり、擴郭帖木兒が兵を擁して西北邊を侵したから、帝は徐達、李文忠に

命じ道を分ちて北伐せしめたるに、一三七〇年順帝が死して太子愛猷識里達臘が嗣ぎ、擴郭帖木兒に命じて明軍に當らしめたのである。是に於て徐達は進んで沈兒峪に至り、擴郭帖木兒を擊破して之を和林に走らし、李文忠は應昌を衝き愛猷識里達臘を破りて之を漠北に走らし、其の後妃、嫡子等を捕へ諸寶物を獲た(一三七〇年)。帝は屢々書を贈りて擴郭帖木兒を招きたるも應せず、兵勢頗る盛にして頻に邊境に寇したが、一三七五年病んで和林の北なる哈拉那海の衝に於て死んだ。次で一三七八年愛猷識里達臘もまた死して其の子脫古思帖木兒 (Tugs Timur) が嗣ぎ、納哈出 (Nahaichu) をして吉林地方の蒙古諸族を召集して遼東を侵せしめたから、帝は一三八七年馮勝を征虜大將軍となし、傅友徳、藍玉を副帥となし、兵二十萬を率ゐて納哈出を征せしめ、金山(奉天府開原縣西北)に至り之を擊破して納哈出を降し、翌年藍玉が進んで蒙古に入り脫古思帖木兒を捕魚兒海(克什克騰の西北)に破り、皇子妃嬪等百餘人、官屬三千、男女七萬、馬牛駝羊十五萬を獲た。時に脫古思帖木兒は纔に身を以て遁れ太子天保奴(Tienpoulu)と奔つて和林に赴き丞相咬住(Guaichu)の許に投せんとし、圖拉(Tula)河に至るや其の臣也浹迭兒(Yesudai)の襲ふ所となりて衆散じ十六騎を餘すのみとなり、既にして咬住が來り迎へたるも會々大雪に遭うて發することができなかつた所へ、也速迭兒の兵が猝に至り遂に脫古思帖木兒は天保奴と共に殺された、時に一三八八年である。是に於て蒙古の部屬は悉く解散して漠南及び滿洲の地は明

の版圖に歸し、元は全く崩壞して國を成すことができなくなり、後五傳して坤帖木兒(Gua Timur)に至り鬼力赤(Kulich)の殺す所となりて遂に國を韃靼(Tartar)と稱するに至つたのである。

太祖の一統と外征其二 是より先き夏主明玉珍は既に死して其の子明昇が嗣ぎ、太祖は使を遣はして之を招諭したるも應じなかつたから、一三七一年湯和及び傅友徳を遣はして之を討たしめ、湯和は瞿塘より傅友徳は秦隴より進み連戰敵を破りて重慶に逼るに及び、明昇は遂に表を奉じて降り蜀の地が悉く平らいたのである。初め徐達が陝西を平らぐるや鄧愈は臨洮に克ち使を遣はして吐蕃の諸族を招諭したが、後吐蕃の所部には往々朝貢使を邀阻するものがあつたから、帝は一三七七年鄧愈に命じて之を討たしめ、兵を三道に分ち窮追して崑崙山に至り、兵を留め諸要害を戍らしめて還つた。時に元の宗室梁王把匝刺瓦爾密が雲南に據り其の地の險遠を恃んで明の招諭に従はず、遙に蒙古に應じて邊患をなしたから、帝は一三八一年傅友徳、藍玉、沐英を遣はし步騎三十萬を率ゐて之を征せしめた、把匝刺瓦爾密は大に敗れて遂に支ふる能はざるを度り走つて晉寧州の忽納砦に至り、妻子を驅りて滇池に赴かしめ尋で其の左右丞相と共に自殺したのである。是に於て藍玉及び沐英は更に進んで大理、金齒等雲南西部の諸蠻を降したから、支那は遂に明の一統に歸した、時に一三八二年である。此の間また南方の諸蠻が屢々叛きたるも、幾許もなく皆平定して悉く明の勢威に服したのであ

る。

明の太祖の治績 太祖は即位以來意を内治に注ぎ、律令を改削して大明律を制定し、郊社宗廟の禮を定め、胡俗を禁じて衣冠を唐代の舊に復し、郡縣に令して學校を建てしめ、科擧の法を復興し、學士を重んじ廉吏を尊び鈔法を立て、以て元代の弊制を矯め、また兵權を朝廷に收め、丞相專恣の源を塞がんに爲め吏、戶、禮、兵、刑、工の六部の尙書をして政務を分掌せしめ、地方には布政使、按察使を置き、知府、知州、知縣を其の下に直隸せしめ、租税を輕減して士民を撫し、更に遼東、大寧、大同、開平、甘州、貴州、洮州等邊要の地に行都指揮使司を置きて國防を嚴にした。また帝は前朝の失に鑒みて嚴に内官の朝政に關與するを禁じ、また后妃を誡めて政に預らしめず以て母后臨朝の弊を防ぎ、また宋元二朝が郡縣制を布きて帝室孤立の弊を招きたるに懲り、封建の制を布き諸子二十四人を名城大都に分封して藩屏となし、外は邊塞を守り内は夾輔に資せしめた、然かも之に領土を與へて人民に臨ましめず、唯秩祿を賜ひ護衛を附するのみであつた、故に周漢の制とは異なつて居たのである。然しながら帝は猜忌にして刑罰を嚴にし、屢々文字の獄を起して多く文臣を誅戮したが、また其の功臣が多くは武人であつて己の死後に變を作さんことを恐れ、先づ胡惟庸の獄を起し次で藍玉の獄を起し前後牽連して數萬人を戮し、悉く老臣宿將を除いたから、後年靖難の役が起るに及び一人のよ

く拒ぐものなきに至つたのである。

明初の封建 太祖は宋元の孤立して亡びたるに懲り、名城大都を擇びて豫め諸子を王となし其の壯なるを待つて藩に就かしめた。かくて一三七〇年には先づ諸子九人を封じて王となし、棧を秦王(西に都)に、桐を晉王(大原に都す)に、棣を燕王(北平に都す)に、櫛を周王(開封に都す)に、楨を楚王(武昌に都す)に、溥を齊王(青州に都す)に、梓を潭王(長沙に都す)に、檀を魯王(兗州に都す)に、從孫守謙(帝の長兄の子)を靖江王(桂林に都す)に封じ、次で一三七八年には椿を蜀王(成都に都す)に、柏を湘王(荊州に都す)に、桂を代王(大同に都す)に、漢を肅王(甘州に都す)に、植を遼王(廣寧に都す)に封じ、後また一三九一年に封じたるものが十人あつた、即ち慶王(寧夏に都す)、寧王(大寧に都す)、岷王(岷州に都す)、谷王(宣府に都す)、韓王(開原に都す)、藩王(路州に都す)、安王(平涼に都す)、唐王(南陽に都す)、郢王(安陸に都す)、伊王(洛陽に都す)の十王であつて前後すべて二十四王となるのである、而して此の外に趙王(杞があるも未だ其の封國に就かなかつたのである。其の制は各々祿を萬石となして相傳官屬を置き三千人以上一萬九千人以下の護衛兵を附し、冕服車旗邸第は天子より下ること一等となし、公侯大臣も伏して拜謁せしめた、唯其の爵を列しても民に臨まず藩を分ちても士を賜はざることが周漢の封國と異なる所であつた。然しながら燕晉二王の如きは北方の守禦となりて邊寇を防ぎ諸將を節制する權を與へられたから、隱然勢力を有して朝廷と對峙するに至り遂に禍亂の基をなしたのである。

明初封建表

1	秦王	棧	西安
2	晉王	桐	太原
3	燕王	棣	北平
4	周王	櫛	開封
5	楚王	楨	武昌
6	齊王	榑	青州
7	潭王	梓	長沙
8	魯王	檀	兗州
9	靜江王	守謙	桂林
10	蜀王	椿	成都
11	湘王	柏	荊州
12	代王	桂	大同
13	肅王	煥	甘肅
14	遼王	植	廣寧
15	慶王	櫛	寧夏
16	寧王	權	大寧
17	岷王	楨	岷州
18	谷王	穗	宣府
19	韓王	松	開原
20	藩王	模	潞州
21	安王	楹	平涼
22	唐王	桎	南陽
23	郢王	棟	安陸
24	伊王	櫛	洛陽

文字の獄 太祖は即位の後頗る文を重んじて武を抑へたから諸勳臣は大に不平であつた、是に於て帝は「世亂るれば武を用ひ世治まれば文を用ふ、偏するに非ず」といふや、諸臣は「但し文人は譏訕を善くす、張九四(張士誠の小子)は文儒を厚禮せるに、其の名を撰ばんことを請ふや名づけて士誠といへり、甚だ美名なるが如きも孟子に士誠小人也の句あり、彼安んぞ之を知らんや」といふたから、是より帝は天下の章奏を覽るに當り動もすれば疑忌を生じて文字の禍が起つた、其一二の例を擧ぐれば杭州の教

授徐一夔の賀表に光天之下、天生聖人、爲世作則等の語あるや、帝は之を覽て大に怒つて曰く「生は僧なり、我嘗て僧となれり、光は即ち剃髮なり、則の字は音賊に近し」是れ我を侮辱するものなりと、遂に之を斬つた、また僧來復の謝恩の詩に殊域及自慚、無德頌陶唐の句があつたから、帝は「汝が殊字を用ひたるは我を歹(殘骨の義)朱といへるなり、また無德頌陶唐といへるは是れ我を無德といふなり、陶唐を以て我を頌せんと欲すと雖も能はざるなり」といひて遂に之を誅した、其の他之に類するものが夥しかつた。また帝は元末の縱弛なりしに懲り特に刑罰を嚴にして下を馭したから、稍々觸犯する所あるも誅殺せらるゝもの多く、京官の旦に入朝するものは必ず妻子と訣別し、暮に無事にして家に歸れば相慶してまた一日活きたりとなした、故に士民皆震恐して敢て縱肆なるものがなかつた。

胡惟庸の獄 太祖は性殘忍にして猜忌する所多く、功臣の終を全ふするもの少なかつたが、尙ほ己の死後に諸功臣の專恣ならんを恐れ、胡惟庸の獄と藍玉の獄との二大獄を起して老臣宿將を誅戮した、之は胡藍の獄である。胡惟庸はもと寧國の令で李善長の政を執る時之に賂ひ、遂に召されて太常卿となり累遷して右丞相となり政を摠ぶるに及び、生殺黜陟を專にして威福を恣にし賄賂を貪り權を弄して畏忌する所なく遂に異謀を企つるに至つた。會々吉安侯陸仲亨は陝西よりの歸途擅に傳に乘じ、平涼侯費聚は命を奉じ蒙古を招降したるも功なく、共に帝の切責する所となりて大に懼れて居たから、胡惟

庸は陰に權勢を以て之を脅誘し外にありて軍馬を收輯せしめ、又御史大夫陳寧と省中に坐し天下の軍馬の籍を閱して謀る所あり、都督毛驪をして衛士劉遇寶及び亡命者魏文進等を取らしめて心脅となし、又太僕寺丞李存義は太師李善長の弟であつて胡惟庸の女婿李佑の父であるから、陰に存義をして善長に説かしめしに、善長は唯驚悸して之を制することができなかつた。是に於て胡惟庸は指揮林賢を遣はして海に入つて倭人を招き期を以て會するを約さしめ、又元の遺臣封績を遣はして書を元に送り臣と稱して兵を請ひ共に外應をなさしむることとし、遂に一三八〇年(洪武十三年)正月御史大夫陳寧、中丞涂節等と事を起さんと謀つたが、既にして涂節は事の遂げざるを見て變を上つりて之を告げたから、帝は大に怒り群臣に命じて更に糺訊せしめ、また親ら臨問し兵を遣はして胡惟庸、陳寧等を掩捕し涂節と並せて之を誅し、僚屬黨與の株連して殺さるゝもの一萬五千人の多きに及んだ。時に群臣は李善長及び陸仲亨等をも誅せんと請ひたるに、帝は其の勳舊を思うて之を宥したが、後十年を経て一三九〇年(洪武二十三年)に至り胡惟庸に關する獄がまた起り、遂に李善長に死を賜ひ其の家族七十餘人を並せ殺し、また陸仲亨、唐勝宗、費聚、趙庸、陸聚、黃彬、胡美、鄭遇春等も誅せられ、同時に胡惟庸の黨に坐して殺さるゝもの三萬餘人の多きに及び、帝は其の罪を條列して姦黨録を作り之を天下に布告した。

藍玉の獄 藍玉はもと開平王常遇春の婦弟である、長身楮面にして勇略あり、遇春に従つて戦ふ毎

に先登して陣を陥れ當る所敵なし、太祖もまた遇春の故を以て之を寵異して居た、胡惟庸の獄起るや藍玉もまた其の謀に與かると稱するものありたるも、帝は其の功の大なるを思ひ宥して問はなかつたのである。後諸老將の多く死するに及び藍玉は遂に擢んでられて大將軍となり、北征して元主脫古思帖木兒を捕魚兒海に破り、次で西蕃を征服して歸り、涼國公に封せられ太子太傅に任せられた。然るに藍玉はもと不學にして性また很復なり、帝の之を待つこと厚きを見て自ら功伐を恃み專恣横暴を極むるに至り、其の西征より歸りて太子太傅を兼ねるや、馮勝及び傅友徳が共に太子太師であるから其の下に居ることを喜ばず、また其の奏事が多く聽かれなかつたから益々怏々として遂に反を謀るに至つたのである。かくて藍玉は一三九三年(洪武二十六年)二月密に鶴慶侯張翼、普定侯陳桓、景川侯曹震、舳艫侯朱壽、東筦伯何榮、都督黃恪、吏部尙書詹徽、侍郎傅友文及び諸武臣の嘗て其の部將たりしものを招き、晨夜私宅に會して謀議し士卒及び諸家奴を集めて甲を伏せ、將に帝の籍田に出づるを伺つて事を舉げんとし約束が既に定まつたが、錦衣衛指揮蔣臈の告ぐる所となりて謀露はれ、與黨は悉く捕へられて族誅せられ、列侯功臣文武の大官より偏裨將卒に至るまで黨に坐して夷滅するもの一萬五千人の多きに達し、明年に至り帝はまた穎國公傅友徳及び定遠侯王弼に死を賜はつた、是に於て元功宿將が相繼で盡き、後燕王の兵を擧ぐるに及び惠帝の爲めによく拒ぐものなきに至つたのである。

第十三章 成祖の遠略

靖難の役の原因 太祖は宋元が孤立して亡びたるに懲り、諸子二十四人を分封して外は邊塞を守り内は夾輔に資したるも、唯爵を列するのみにして民に臨ましめず、藩を分つも地を賜はらずして護衛を附するのみであつたが、蒙古の侵寇を守禦する爲めに、北邊の諸王には征伐の權を附與したから、燕晉二王の如きは隱然勢力を有するに至り、遂に禍亂を醸成したのである。一三九二年皇太子標が死し其の子允炆が幼弱であつたから、帝は群臣を召して「國に長君あるは社稷の福なり、朕の意燕王を立てんと欲す、何如」といひしに、學士劉三吾が進んで「皇孫年富み世嫡の子なり、子歿して孫嫡統を承くるは禮なり、燕王を立てれば秦晉二王を何地に置かんや」（燕王は第四子にして秦晉二王は其の兄なり故にいふ）といふたから、遂に孫を立てることに決し允炆を立て、皇太孫となしたのである。かくて太祖は在位三十一年七十一歳にして一三九八年死し皇太孫が立つた、之が惠帝である（後に清の高宗が惠帝と謚したのである）、建文と改元したからまた建文帝ともいふのである。時に北邊諸王の勢が頗る盛であつて殊に燕王棣は英資にして威望があつた、而して惠帝は既に皇太孫たりし時より諸王抑制の主義を取り之を黃子澄に問ふや、子澄は答ふるに漢の七國を平らげたることを以てし、齊秦もまた之を贊したから、位に即くに及び帝は二人を擧

げて政を委ね、竊に諸藩を削奪せんことを謀つたのである。會々燕、周、齊、湘、代、岷の諸王が互に相煽動して不穩の形勢あるや、齊秦は先づ「燕を削るべし」といひ、黃子澄は「燕は卒に圖り難し宜しく先づ周を取りて其の手足を剪るべし」といひ、遂に黃子澄の謀に決し周王灞を執へて庶人となし雲南に遷したから、燕王が大に疑懼して壯士を擇びて護衛となし、竊に僧道衍と逆を謀るに至つた。既にして湘王柏を執へんとせしに自ら焚死し、尋で齊王榑、代王桂、岷王楸を廢して庶人となし、榑を京師に錮し桂を大同に幽し楸を漳州に徙したから、是に至りて燕王が遂に兵を擧げて反し齊秦、黃子澄を誅するを以て名となし、其の軍を靖難の師と稱した、時に一三九九年である。

靖難の役 燕王の既に反するや惠帝は耿炳文を將となし大軍を率ゐて北伐せしめたるに、炳文は燕王と滹沱河に戦つて大敗したから更に李景隆を遣はした、景隆は德州に至りて炳文の將卒を收集し、また諸路の兵五十萬を率ゐて河間に營し進んで北平を圖つた。初め帝は寧王權が燕と合せんことを慮かり之を召したるも到らなかつたから、其の護衛を削りたるに燕王は之を聞いて大に喜び、自ら大寧に赴きて寧王を執へ其の軍を併せて還り、李景隆を北平の城下に夾撃して大に之を破つたから、景隆は退いて德州に駐まつた。是に於て燕王は上書して齊秦、黃子澄を誅せんことを請ふたから、帝は陽に二人を斥け陰に其の謀を用ひたのである。既にして李景隆がまた兵六十萬を率ゐて白溝河に次し、燕

王と戦ひ敗れて済南に走り、燕王は德州に入り済南を圍みたるに、城將鐵鉉が固守して下らなかつたから、燕王は圍を解いて北平に歸り鐵鉉等は德州を復して勢頗る盛になつた。尋で燕王がまた來りて鐵鉉と東昌に戦ひ大敗して北平に還つたから、帝は齊泰、黃子澄の官を復した、時に一四〇〇年である。然るに燕王がまた南侵し盛庸の軍を破りて大名に次するに及び、帝はまた齊泰、黃子澄を貶竄し方孝孺の言によりて燕王の罪を赦し兵を罷めしめんとしたるも、燕王は詔を奉せずして専ら南下の策を劃した。是より先き太祖は歷代宦官の弊に懲り嚴に其の政に關與するを禁じたが、惠帝に至りて之を御することが甚だ嚴酷であつたから、宦官は皆怨望して遂に燕王を戴かんと謀り、密に人を燕に遣はし金陵が空虚であるから疾進して取るべしと告げたのである。燕王は兵を起してより既に三年を経過して戦死するもの甚だ多く、然かも陥るゝ所の城邑は兵が去ればまた朝廷の爲めに守るといふ風であつたから、意を決して南下しなかつたが宦官の報を得て大に喜び、遂に大舉して南下し諸軍を破りて泗州、肝胎を下し揚州を陥れたから、帝は方孝孺の言によりて使を遣はし地を割きて和を求め、間を得て勤王の兵を徵さんとしたるも燕王は從はず、江を渡つて京師を犯した。時に群臣は帝に難を避け浙に幸して興復を圖らんことを勧めたが、獨り方孝孺が京城を堅守して四方の援兵を待たんことを請ひ遂に守城に決したのである。既にして燕兵が城下に逼るるに及び李景隆等が出で降つたから城

が遂に陥り、また宮中に火が起つて帝の終る所が知れなかつた。是に於て燕王は皇后の屍を火中より出し詭つて帝の屍と稱して之を葬つたといふことであるが、然かも其の葬地の所在が知られて居らぬ。此の時帝は地道より遁れ出でゝ國外に去つたともいはれ、また其の後僧となりて雲南、四川の地方を往來した形跡があるとも傳へられて居るのである。是に於て燕王が遂に帝位に即いた、之が成祖である、時に一四〇二年六月である。

成祖の篡立 成祖は帝位に即き方孝孺に命じて即位の詔を草せしめんとしたるも從はなかつたから、孝孺及び其の三族を殺し門生數百人にまで及んだ。帝はまた鐵鉉、齊泰、黃子澄等を殺し其の兄弟族人に至るまで少長となく皆之を斬つた。是に於て永樂と改元し、大に功臣を封じ、周齊代岷の四王を復して國に就かしめ、長子高熾を皇太子となし、次子高煦を漢王となし、三子高燾を趙王となし、北平を改めて北京となして之を順天府といひ、後一四二一年に至り都を之に遷した。帝は既に内難を定めて大に意を治道に注ぎ、其の諸政は多く太祖の遺制に従ひ、租税を輕減し儒學を獎勵し冗官を淘汰したから内治がよく整ふに至り、また頻に兵を外に用ひて威を四方に輝かした、故に明の國勢は是より隆々として盛になつたのである。

安南の征服 初め安南は陳吟の子陳煊、孫陳裔が賢明にして國內はよく治まつたが、陳裔の子陳暉に

至り暗愚にして元室の傾くに及び陳友諒と結び後には明に通じた。陳暉の後二傳して其の弟陳暉に至り親ら占城を討つて敗死し、其の子陳暉が立つや占城軍が來り侵して國都を陥れたが、將軍黎季犛が之を擊退して功あり、是より勢を得て政權を握り遂に陳暉を廢して其の姪陳顥を擁立し、己の女を納れて皇后となし其の勢漸く王室を凌ぐに至り、また陳顥に逼まつて位を其の子陳煚に譲らしめ、自ら欽徳興烈大王と稱し、尋で陳煚を廢し一四〇一年自立して國を大虞と號し、一四〇二年位を其の子漢蒼に傳へて自ら太上皇と稱し、成祖の時明に上表して陳氏の後が絶えたりといひ、安南國王の封冊を受けたのである。後幾許もなく安南の舊臣裴伯耆が明に入りて國難を告げ、老耄ラオス（ Laos ）に遁れたる陳暉の孫天平もまた老耄王の援助により金陵に赴きて哀訴したから、成祖は使を遣はし黎季犛を諭して天平を國に納れしめた。黎季犛は伴つて之を諾し天平が明兵と共に芹站（安南諒山府 雞陵關南）に至るや、兵を伏せて天平を邀殺したから成祖は大に怒り、一四〇六年成國公朱能を征夷大將軍となし沐晟、張輔を之に副たらしめ、十八將軍を帥めて廣西、雲南の二道より之を討たしめた。既にして朱能は途中に死し張輔は廣西より進み沐晟は雲南より進んで安南に入り、翌年占城の應援を得て安南軍を富浪江に破り、黎季犛父子を奇羅海口（安南又安 府東南）に窮追し之を擒にして京師に檻送した。是に於て成祖は陳氏の後を求めて立てんとしたるも得なかつたから交趾布政司を置き、交州、北江、諒江、諒山、新安、建昌、奉化、建

平、鎮蠻、三江、宣化、太原、清化、又安、新平、順化、升華の十七府及び廣威、宣化、嘉興、濱州の五直隸布政司州を設け、要害の地に十二衛を設けて之を控制したのである。然るに陳氏の故官簡定が叛き僭號して大越と稱し、自ら上皇といひ陳季犛を立て、帝となした、季犛はもこの陳氏の後ではないが陳氏の亡びたるを忍ぶ能はざるものは相率めて之に屬したから勢頗る猖獗となつた。成祖は沐晟に命じ兵四萬を以て之を討たしめ生厥江（安南交 州府西）に敗績したが、一四〇九年張輔が遂に簡定を美良山中（安南廣威 州東南）に擒にして京師に送つた。時に陳季犛は遁れ去り後沐晟の爲めに靈長海口（安南又 安府東）に破られて降り、成祖の命を以て交趾布政使となされたが受けずして去り、依然として剽掠を止めなかつたから、成祖はまた張輔を征虜將軍となし沐晟と會して之を討たしめ、月常江（安南清 化府東）及び愛子江（安南順 州東北）に連破し陳季犛を迫うて老耄に入り、其の三關を破つて遂に陳季犛及び其の妻孥を縛し京師に送つて之を斬るに及んで安南が悉く平定し全く明の領土となつた、時に一四一四年である。

安南の王系（陳氏十四代百九十年）

- 1 太祖陳暉
- 2 聖宗暉
- 3 仁宗吟
- 4 英宗煊
- 5 明宗頤

一 恭徳大王 日禮

成祖の招諭に應せざるのみならずまた其の使者を殺したから、成祖は邱福を征虜大將軍となし精騎十萬を率ゐて之を討たしめたるも、克たずして臚胸河に敗死し全軍悉く没するに至つた、時に一四〇九年である。是に於て成祖は一四一〇年親ら兵五十萬を率ゐて北征するや、本雅失里は大軍の至るを開き懼れて阿魯台と共に西に奔らんさせるに、阿魯台が従はず部衆は潰散したから本雅失里は西に奔り阿魯台は東に走つた。成祖は本雅失里を追うて斡難(Oqon)河に及び奮撃して大に之を破り、本雅失里は輜重牲畜を棄て七騎を以て遁れたから、更に師を移して阿魯台を撃破し之を追ふこと百餘里にして還つたが、既にして阿魯台は使を遣はし來りて馬を貢したから成祖は之を納れて其の罪を赦したのである。時に瓦刺の部長瑪哈木が此の機に乗じて本雅失里を殺し、其の子答里巴(Dalba)を擁立して勢を振ふたから、阿魯台は使を明に遣はして兵を發して之を討たんことを請ひ、其の所部を率ゐて先鋒たらんと願ふや成祖は之を封じて和寧王となし、次で瑪哈木が衆を悉くして南犯し阿魯台を襲はんと揚言するに及び、成祖は一四一四年親征して忽蘭忽失温(和林の東)に至り大に瓦刺の兵を破り、瑪哈木を追うて圖拉(Tula)河に至り師を班した。然るに其の後阿魯台が漸く勢を得て生聚蕃富なるに及んで明の命に従はず屢々塞下を犯したから、成祖は一四二二年親征して沙狐原(興和の北)に至りたるに阿魯台は大に懼れて悉く輜重を庫倫海の側に棄て、遁れ去つた。是に於て成祖は更に兵を進めて兀良哈

(Uriang Khai)に向ひ、其の衆を屈裂兒河に破りて部長數十人を斬り、別に兵を送り河西を徇へしめて還つた。然るに明年阿魯台がまた南侵したから成祖はまた親征して上莊堡(直隸省宣化府萬全縣北)に至り、阿魯台が瓦刺に破られて其の部落が潰散せるを聞きて師を駐め、韃靼の王子也先土干(Yessun Toghan)が來り降れるを納れて還り、翌一四二四年また親征して答蘭納木兒河(和林の東北)に至りたるも敵を見ず、糧食が盡きたから引き還り途に病を獲て開平の西北なる榆木川に至りて死んだ、位にあること二十二年である。

第十四章 高麗朝鮮の興亡 元末明初の倭寇

高麗の衰微 高麗は恭愍王の時に至りて漸く元の專制を脱することを得たるも、王は位にあること既に久しく世臣大家の盤根締結して互に相欺蔽するを患ひ、僧遍昭が微賤より出で聰慧辨給なるを悦び尊寵して師傅となし、之に國政を委ねて眞平侯に封じ、次で領都僉議司事となして鷲峰宮に封じた。是に於て遍昭は還俗して姓を辛と稱し名を暉と改め跋扈強梁殊に甚しく、王に勸めて酒色に沈湎せしめ勳舊名臣を讒害誅戮して凶横を極めたが、後王の其の好を覺らんことを恐れ密に弒逆を謀り露はれて遂に誅せられたのである。王は嗣子がなかつたら終に自ら子なきことを知り韓安、洪倫等の如き嬖幸の少年に命じ諸妃に通せしめて其の男子を得んことを冀ひ、益妃の妊むに及び倫等を殺して口を滅せんとし、之を宦者崔萬生に漏らし却て萬生及び倫等の爲めに弒せられた、時に一三七四年である。是より先き王は辛暉の子牟尼奴を取つて宮中に入れ、李仁任に囑して曰く「辛暉の家に至り其の婢を幸して生む所なり」と、之に名を禍と賜ひ江寧府院大君に封じたが、王の弒せらるゝに及び李仁任は群臣を會して先王の遺命と稱し遂に禍を立て、王となした。辛禍は初め頗る學問をなしたが長ずるに及んで専ら遊戯を事とし、人の妻を奪ひ出遊常なく敗獵に荒み狂惑日に甚しかつたのである。此の時に當

り高麗は内は饑饉が荐りに至り外は倭寇が猖獗を極めて國內は困弊し倉庫は空竭したから、豫め三年の貢物を收めたるも尙ほ足らずして別に徵歛を加ふるに至つた。初め李仁任の辛禍を擁立するや自ら相となり親黨を中外に布列して頗る威福を擅にしたから、崔瑩、李成桂等が之を憤り力を協せて遂に之を除いたが、既にして明との關係が起り辛氏は遂に黜けられて王氏がまた位に復したのである。

高麗と北元及明との關係 恭愍王の十七年即ち一三六八年に支那は元の順帝が北走して上都に赴き、明の太祖が帝位に即き使を高麗に遣はして來り告げしむるや、恭愍王は元の年號を停め次で一三七二年に洪師範、成均、鄭夢周等を明に遣はして登極を賀し、且つ子弟の入學を請はしめ、其の正朔を奉じて服色を易へ三年一聘の約に従ふことゝした。後恭愍王が弒せられて辛禍が立ち李仁任の權を專にするに及び明の詰責を受けんことを恐れ、金義をして當時の事情を知れる明使蔡斌を途に要殺せしめ、また使を元に遣はして先王の喪を告げしめた。是に於て順逆利害の論議が囂然として起り、元使の來るや李仁任、池滄等は之を迎へんとし、金九容、鄭道傳、鄭夢周等は之を争ひ、遂に其の使を慰還したのである。是より先き元は恭愍王が死して嗣なきを聞き、瀋王暉の孫脫不花(Tulata Bukha)を高麗王に封じて之を納れんとしたが、是に至りて使を遣はし辛禍の即位を許し之を冊して高麗王となしたから、是より後高麗はまた元の宣光の年號を用ふるに至つた。既にして高麗の國論がまた變じ

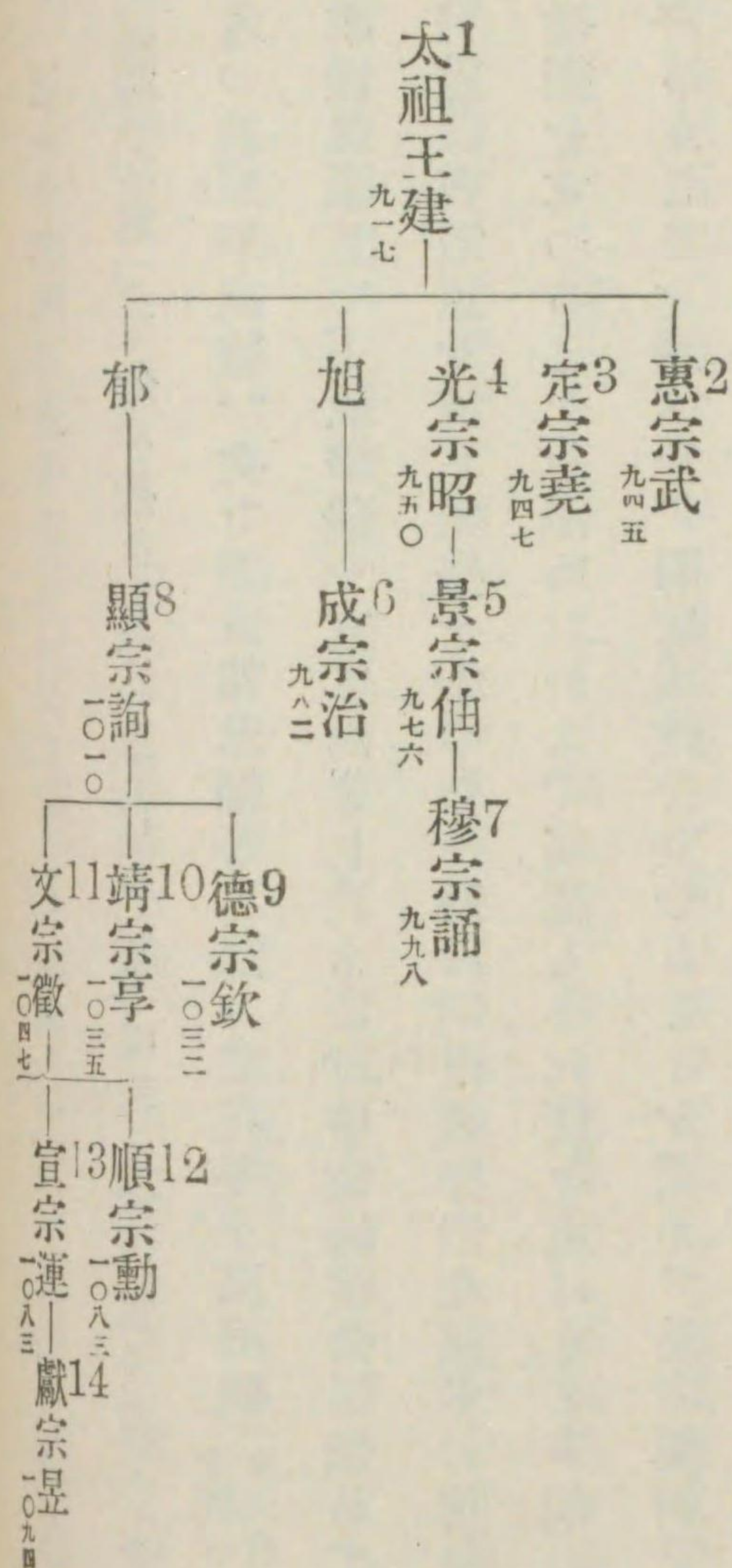
て使を明に遣はし喪を告げて先王の諡を請ひ、且つ使者を殺したるは高麗の知る所にあらざることを辯疏し、歳貢を進むること數次に及びたるも太祖は之を受けなかつたが、之を請ふこと益々切なるに及んで漸く之を許し、歳貢の數を増加して馬五千匹、金五百斤、銀五萬兩、布五萬疋となした。後太祖は高麗の元に通ずるを疑ひ兵を加へんとせるも其の口實の足らざるを苦しんで居たが、鄭夢周が使して辯明するに及んで意漸く解け、使を遣はし辛禩を冊して高麗王となし、先王に諡を賜うて恭愍といふた、時に一三八五年である。然るに辛禩は尙ほ元と通じたが既にして太祖は高麗に命じて鐵嶺以北がもと元に屬したる理由の下に之を遼東に歸屬せしむるや、禍は遂に崔瑩と議して五道の城を修め諸元帥を西北に遣はして不虞に備へ、使を明に遣はして鐵嶺以北公嶮嶺に至るまではも高麗の地なれば是を以て境界となさんことを請ふた。會々遼東から鐵嶺衛を立つることを告ぐるに及び、崔瑩が辛禩に勸めて遼東を攻めんとし李成桂が之を諫めたるも聽かず、禍は自ら出で、平壤に次し崔瑩に八道都統使を加へ、曹敏修を左軍の將となし李成桂を右軍の將となし、左右軍凡そ三萬八千人が平壤を發して遼東に向ひ、既に鴨綠江を渡りて威化島(鴨綠江中の島)に至つたが、士卒は戰を欲せずして逃亡するものが頗る多かつたから、李成桂は諸將に諭して「若し上國の境を犯さば罪を天子に得て宗社生民の禍直に至らん、予順逆の理を以て上書して師を還へさんことを請へども、王省みず瑩また老にして聽か

ず、如かず卿等と還りて王に見え親しく禍福を述べ、君側の姦を除き以て生靈を安んせんには」といひ、諸將が奮つて命を聽き誓をなすに及び李成桂は遂に軍を還へしたのである。是に於て辛禩は急に都に還つたが李成桂が次で至り郭忠輔等と謀りて崔瑩を高峰縣(京畿道交河府)に流し、禍を廢して江華島に放ち、李成桂は議して王氏の後を立てんとしたるに、曹敏修が命を矯めて禍の子昌を立てたから群臣が服せず、遂に曹敏修を流し崔瑩を斬つた。時に明は鐵嶺以北疆界の事は高麗の主張する所に理あるを以て鐵嶺衛を立つることを罷めたから、高麗もまた使を遣はして辛禩の遜位、崔瑩の流竄を告げ昌の親朝を許さんことを請ふや、明は異姓を立つることを責めて昌の親朝を許さなかつたが、會々禍が密に李成桂を殺さんと謀りて事露はるゝに及び、李成桂等は議して禍を江陵(江原道江陵府)に遷し昌を廢して江華島に放ち、神宗の遠孫定昌府君瑤を迎へ立てた、之が恭讓王である、既にして禍及び昌等は皆誅せられた、時に一三八八年である。

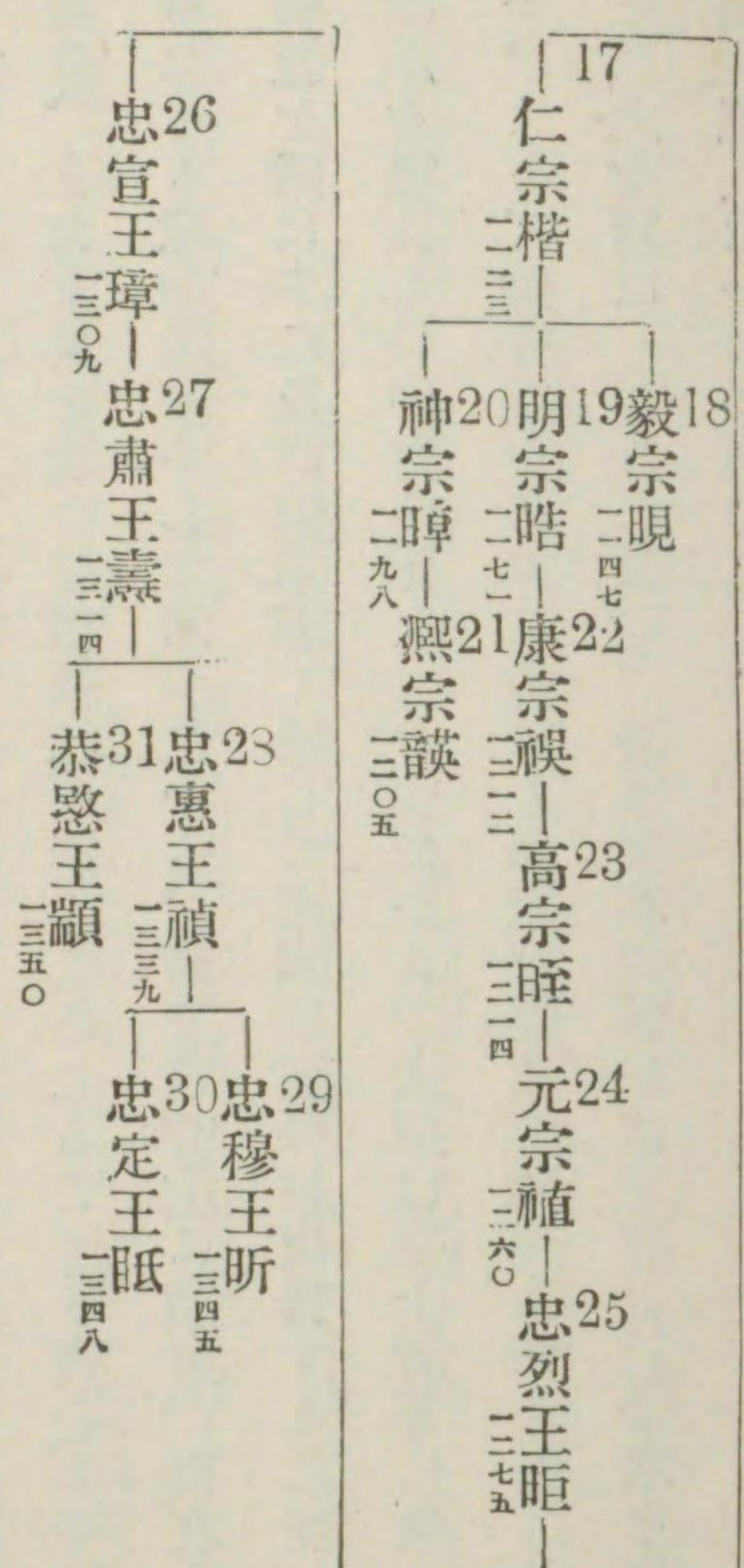
高麗の滅亡 是より後高麗は明に臣事して怠らなかつたが、恭讓王は性柔懦姑息にして唯佛に奉ずるを以て務となし、朝臣は互に黨を樹て、相争ひ、彈劾が頻に行はれ獄禍が蔓延して將相大臣の或は流され或は殺さるゝもの頗る多く國政が日に紊れた。時に李成桂は都總制使となりて文武の大權を握り威望日に盛にして鄭道傳、南閔、趙浚、尹紹宗が密に之を推戴するの意ありしも獨り鄭夢周が忠義

を以て自ら奮ひ、相となるに及び尹紹宗、南閭、鄭道傳を黜け李成桂を殺さんと謀つたが、李成桂の子芳遠が趙英珪をして途に鄭夢周を要殺せしめたから、李成桂は王に奏して鄭夢周の黨數十人を流し悉く王氏に忠を盡くすものを去つたのである。是に於て裴克廉等が王大妃の命を奉じ王を廢して原州(江原道)に放ち、李成桂が衆に推されて位に即き國を朝鮮と號した、之が朝鮮の太祖康獻王であつて時に一三九二年である。高麗は太祖の統一より是に至るまで王氏が三十二王四百四十二年、辛氏の世を合せて凡そ四百五十六年にして亡びたのである。

高麗の王系



15 肅宗顥 (1095)
 16 睿宗僖 (1106)



朝鮮の興起 朝鮮の太祖李成桂(後に名を且改む)は咸鏡道永興の人にして一三四一年に生まる、父を李子春といひ其の第二子であつた、子春は高麗に仕へて榮祿大夫判將作監事朔方道(鏡道)萬戶兼兵馬使に至つたのである。成桂は天資奇偉神采英發にして最も射術に長じ、數々大功を立て、勢望次第に著はれ遂に衆の推す所となり、王氏に代はりて位に即いた、實に一三九二年である。太祖は既に位に即きて

王氏が後患をなさんことを恐れ、鄭道傳の説によりて王氏の宗族を除かんとし、王康、王承寶、王承貴、王鬲を海島に徙すと稱し一大舶に載せて海に浮ばしめ、密に船底を鑿ちて沈ましめた、唯王蜩は其の女を太祖の第七子芳蕃に嫁したるを以て難を免かるゝことを得たといふことである。かくて先づ趙胖を明に遣はして即位を告げしめ、また韓尙質を遣はして國號を改めて朝鮮若しくは和寧(太祖の出生地永興名)となさんことを請ふや、明の太祖は舊號によりて朝鮮と稱せしめ、また印信を改めしめた、是より高麗を改めて朝鮮と稱するに至つたのである。既にして明は朝鮮が布帛金錢を以て遼東の邊將を誘ひ、また女眞を説いて鴨綠江を渡らしめたることを責むるや、王は數々使を遣はして之を辯明せしめたるも意を達せずして歸つたから、靖安君芳遠に趙胖、南在を附し金陵に至りて陳謝せしめ、次で權近を遣はすに及び情意漸く通じて兩國の關係が復舊するに至つたのである。是より先き倭寇の朝鮮沿岸を襲ふものが尙ほ絶えなかつたから、太祖は金士衡等に命じて壹岐對馬を攻めんとしたるも果さず、よりに僧覺鎚を日本に遣はし海寇を禁じて隣交を修めんことを請はしめ、次で朴敦之を遣はしてまた之を請はしむるに及び、將軍足利義滿が之を聽るし使者を優遇して歸らしめた、是より彼此の通問が絶えなかつたのである。

太祖及び太宗の治 太祖は即位の初め賢良遺逸を擧げしめ、科擧考課の法を定め、禮儀法度を新し、前代の弊制を革めて一に民心を得んことを力め、また都を漢城(今の京城)に遷さんとして都城を築き、宗廟社稷を建て五年にして功成り之に移つた。太祖には芳雨、芳果、芳毅、芳幹、芳遠、芳衍、芳蕃、芳碩の八子あり、初め芳碩を立て、世子となしたが、鄭道傳、南閔等が之に附き諸王子を忌みて殺さんとするや、芳遠が兵を率ゐて宮に入り道傳、閔等を殺し芳蕃、芳碩もまた害せられたから、太祖は遂に芳果を立て、位を傳へた、之が定宗泰靖王であつて時に一三九八年である。是に於て太祖を稱して上王といふたが後十年にして死し、明より諡を康獻と賜ひ是より後諡を賜ふことが常例となつた。

定宗即位の初め朴苞が芳幹に勸めて兵を擧げしめ芳遠を殺さんとするや、芳遠がまた兵を率ゐて之と戦ひ遂に芳幹を擒にして兎山(黃海道にあり)に流し、朴苞を清海(全羅道にあり)に竄し尋で之を殺した。定宗は人と爲り謹直仁儉であつたが芳遠の威望盛なるを知り、在位僅に二年にして位を芳遠に傳へた、之が太宗泰定王である。太宗は豪邁果敢にして初め太祖の業を輔けて功あり、次で鄭道傳及び朴苞の亂を鎮めて威望益々加はり遂に禪を受けて位に即いたが、時に國內稍々靜謐に赴いたから學問を獎勵して中東南西の四學を置き、銅製の活字數十萬を鑄て書籍を印行せしめ、また讖緯の書を焚き、奴婢解放の令を下し、外戚の封君を罷め敦寧府を設けて宗親の封君を得ざるもの及び外戚諸姓を置き、女服を革め、滯獄を戒め、武備を慎み、農業を勸め、佛教の禁を布き僅に禪教の二宗を許して他の五教を嚴禁した、

故に是に至りて朝鮮國初の政治は漸く整頓に赴いたのである。太宗は在位十八年にして位を第三子禔に譲つた、之が世宗莊獻王である、然かも太宗は尙ほ上王と稱し政に與かりて兵馬の權を握り、姜尙任、沈沆等の服せざるを疑ひて冤獄を起すなどの如き失政も少なくなかつたが、後幾許もなく死して世宗が政を親らするに及び國運是より漸く隆盛に赴いたのである。

高麗及び朝鮮の倭寇 元の東侵以後我が日本人の對外的精神は大に振興したが、其後國內は南北兩朝に分れて争亂相踵ぎ財用缺乏せる爲め、諸國の豪族中には元及び高麗に通商の利益を求めものが多かつた。既にして元室が衰へたる頃我が南朝もまた衰へたから、其の遺臣中には西陲の流民と共に海に入りて寇盜となり、高麗及び支那の沿海地を侵掠するものが相踵ぎ之を倭寇と稱した、就中高麗は日本に近かつたから其の被害が極めて甚かつたのである。高麗の倭寇は忠定王の二年即ち一三五〇年固城(慶尙道固城)、竹林(慶尙道巨濟縣にあり)に寇せるより始まり後屢々邊境を侵掠したから、恭愍王の初年に金暉南をして之を禦がしめたるも大に敗れ、都城は戒嚴し士民は荷擔して立つに至り是より連年其の禍を被ふらざることはなかつた。是に於て金逸等を日本に遣はし兵庫に至りて之を禁せんことを請ふや、將軍足利義詮が之を召見して辭するに當時南北兩立して紛亂止まざるが故に禁令を發するも到底行はれざるを以てした。辛禰の初年に至りまた羅興儒を日本に遣はして海寇を禁じ且つ隣交を修めん

ことを求むるや、將軍足利義満は其の陰謀あるを疑ひ之を獄に繋ぎたるに、會々高麗の僧良柔が歸化して日本にあり、其の牒者にあらざることを證明したから義満は之を放還したのである。是より先き藤原經光といふものが高麗に投歸して順天(全羅道順天)に居たが、全羅道元帥金光致が其の異志あるを疑ひて之を誘殺せんとするや、經光は之を探知し衆を率ゐて歸り憤怒して屢々入寇するに至つた。初め倭寇の州郡に入るものは唯奪掠を事として居民を殺さなかつたが、是より以後毎に城邑を屠り婦女孩嬰に至るまで遺すことなく、是が爲めに全羅楊廣の州郡は蕭然として空しくなつたのである。時に趙思敏、睦忠等の諸將が之を禦ぐと雖も、倭寇の勢猖獗にして其の毒を肆にすること日に甚しく、更に江都を掠むるに及び京城の士民は大に震恐して都を鐵原に遷さんと議するに至つた。是に於て安吉常を日本に遣はして寇賊を禁せんことを請ひたるも、其の使命を果さずして客死したから更に鄭夢周を遣はした、夢周は太宰府に至りて探題今川貞世に利害を説くや貞世は厚く之を待遇して其の俘虜を還し、また僧信弘を遣はして賊を捕へしめたるも力足らずして、之を制することができなかつた。然るに當時高麗が倭寇の侵掠を被ふる所は大抵西南境であつて東北境は被害が少なかつたが、後西路の防備が稍々嚴なるに及んで倭寇は江陝、江川(江原道江川)、淮陽(江原道淮陽)等を侵し、進んで咸州、洪原(咸鏡道洪原)、北青(咸鏡道北青)等を屠るに至り、高麗の諸將は之と戦つて皆敗れたるも李成桂が之を擊破するに及び、其

の勢が漸く衰へたのである。然かも其の後尙ほ、慶尙、全羅等を侵して己まなかつたから、鄭地が上書して「連年日本の兵邊を犯すは蓋し其の國民壹岐對馬に分據し出て、侵掠を恣にするによる、今若し兵を遣はして其の巢窟を覆さば、一舉して二島を滅ばし永く邊患を除くべし」といふたが、後恭讓王の即位の年に朴葳をして兵船百艘を率ゐて對馬に寇せしめたのは、蓋し鄭地の策を行つたのであらう。既にして高麗が亡びて朝鮮が起りたるも倭寇の侵掠は尙ほ絶えなかつたから、太祖は金士衡等に命じ舟師を率ゐてまた壹岐對馬を攻めしめたるも果さずして歸つた。是に於て僧覺鎚を日本に遣はし國書を齎らして海寇を禁じ隣交を修めんことを請はしむるや、將軍足利義滿は之に答書して修交を却け唯海寇を禁すべきことを約したが、次で朴敦之を遣はして前議を申ねしむるに及び、義滿は遂に之を聽るし使者を優遇して歸した、是より彼此の通問が絶ゆることなく倭寇が始めて緩んだのである。後世宗に至り尙ほ侵掠の絶えざることを怒り、前後二回對馬を襲うて其の患を絶たんとしたるも成らず、遂に宗氏と和親を結び且つ足利將軍及び西國の豪族にも通じ、消極的方法によりて漸く倭寇を止めることができたのである。

明初の倭寇 元の世祖が日本に寇してから我が國と支那との國交は全く絶え、唯商賈及び僧侶の私に來往するものあるのみであつたが、後元室の衰ふるや我が南朝の遺臣中には餘憤を海外に漏さんし

して海に入り、寇盜と合して支那の沿海を剽掠するものがあつた。次で明の初めに至り元末の諸雄張士誠、方國珍等の殘黨もまた我が寇民と結びて海上に出沒し、北は遼東、山東より南は浙江、福建に至るまで歳として其の害を被^蒙らざることなく、明人は之を倭寇と稱して虎の如く恐れたといふことである。是に於て明の太祖は即位の三年即ち一三七〇年に萊州同知趙秩を征西將軍懷良親王の許に遣はして倭寇を禁せんことを請はしめたから、翌年親王は僧祖朝を明に遣はして通聘し、また明州臺州の被掠民七十餘人を送還したが倭寇の侵掠を止めることはできなかつた。後丞相胡惟庸の叛を謀るや倭人がまた之と通じて事を舉げんとしたるも成らず、次で頻に浙東に寇し寧海を掠め廣東を犯すに至つたから、太祖は西浙に防倭衛所を設け沿海の要害に城を築きて其の寇盜に備へ、また諸將に命じ海上に出で、之を剽討せしめたるも遂に無効に終はつたのである。太祖の末年に我が國は南北一統に歸し、次で成祖の時に至り將軍足利義滿が使を明に遣はして隣交を修めたから、成祖が之を日本國王に冊封するや義滿は令を九州に下して海賊の明を侵すものを捕へしめ、また諸國の守護に命じ商賈をして其の産物を以て明に貿易せしむるに至り、是より兩國の通商が大に興つた。是に於て成祖はまた命じて沿海の防備を嚴にし頻に海寇を剽討せしめたから、是より以後倭寇の侵掠が漸く稀になつたが然かも之を絶滅することはできなかつたのである。

第十五章 帖木兒朝の盛衰

帖木兒の興起 帖木兒は本名をクツブ・ウツヂン・アミル・帖木兒(Kutub ud-din Amir Timur)といひ、元の太祖成吉思汗の曾祖父哈不勒(Kabul)汗の兄哈出刺(Kalehula)の曾孫にして察合台の宰相たりし哈刺沙兒諾顔(Karashar Noyan)の五世の孫と稱し、一三三六年渴石(Kesh)即ち撒麻耳干(Samar-Kand)の南五十英里なる今のシール・シャブズ(Shahr Shabuz)に生まれ、バルラス(Barlas)部の酋長ツルガイ(Turghay)の子であつてハジ・バルラス(Haji Barlas)の姪であつた。ツルガイは其の父ブルクル(Bukul)の後を襲ぎて渴石の領主となり、始めてイスラム教を奉じ敬虔にして學藝を好んだ、故に帖木兒もまた父の薰洵を受けて幼より文學及び宗教を習ひ、二十歳の頃既にイスラム教の經典コーラン(Koran)に精通し、また戸外の遊戯にも長じたといふことである。是より先き察合台汗國の衰ふるや遂に東西の二部に分裂し、東部はジェター(Jetah)即ちモグリスタン(Moghulistan)を領し、西部はマヴァル・ウン・ナール(Mavar un-Nahr 河間の地の義)即ちトランス・オクサナ(Trans Oxana)を領したが、一三三二年カザン汗(Kazan Khan)が西部の君となりて暴虐苛酷であつたから、一三四五年其の宰相アミル・カズガン(Amir Kazghan)が遂に兵を擧げて叛き、翌年カザン汗を逐ひ有名無實の汗

を擁立して自ら實權を握つた。然るに一三五八年アミル・カズガンが死し其の子アブヅラ(Abdula)が嗣ぎて宰相となり廢立を行ふや、大臣バヤン・セルヅズ(Bayan Seljuz)及び渴石のハジ・バルラスと共に兵を起してアブヅラを逐ふたが、既にして内亂がまた起りマヴァル・ウン・ナールは幾多の小國に分裂したのである。是に於て東部の主トグルク・チムル(Toghuk Timur)汗が此の機に乗じて之を併合せんと欲し、一三六〇年兵を率ゐてシール河を渡り到る處を降して遂にマヴァル・ウン・ナールを略取したから、ハジ・バルラスは呼羅珊に通れたが後反者の殺す所となつた。帖木兒は曩に父を喪ひ今やまた叔父が遁れ去りて頓に勢を失つたから、トグルク・チムルに降り戦功を立て、頗る其の信任を得たのである。會々ジェターに叛亂が起つたからトグルク・チムルは東に歸るに及び其の子イリアス・ホーシア・オグラン(Hias Khoja Ogllan)を留めてマヴァル・ウン・ナールを治めしめ、帖木兒及びアミル・ベルグジット(Amir Bergit)をして之を輔佐せしめた。然るに帖木兒はイリアス・ホーシア及び其の麾下の月祖別(Uzbeg)人と協はず、遁れて花刺子模に赴き次で呼羅珊に轉じて兵を募り、カズガンの孫アミル・フッサイン(Amir Hussain)と力を協せて一三六三年イリアス・ホーシアと戦つて勝つたが、次で敗れて亡命し一三六五年また還りてイリアス・ホーシアの軍を破つた。會々此の年トグルク・チムルが死してイリアス・ホーシアが東に歸るに及び、帖木兒は遂にマヴァル・ウン・ナールを占領した

が、既にしてアミル・フサインと隙を生じ遂に之を擒殺して獨り權力を握るに至つた、此の時帖木兒は三十四歳であつて實に一三六九年である。此の間帖木兒は戰陣に傷を負うて跛者となりチムル・イ・レング (Timur i Leng) 即ち跛者帖木兒と稱せられたから、歐羅巴人は之を訛まり傳へてタメルラン (Tamerlan) と稱するに至つたのである。然しながら帖木兒はもと成吉思汗の裔孫にあらざるを以て敢て汗位に登らず、カピル・シア・オグラン (Kabul Shah Ogllan) を擁立して察合台汗となし都を撒麻耳干に奠め、自ら宰相帖木兒 (Amir Timur) と稱して實權を握り、後イリアス・ホージアの弟哈實^ガ哈兒汗 (Kashgar Khan) 黑的兒火者 (Khizir Khaja) の女を娶るに及び、宰相帖木兒^ガ曲烈干 (Amir Timur Kurlan) と稱した、曲烈干は漢語の駙馬と同じ義である、故に帖木兒の帝國には國號若しくは朝名がなく、史家は唯之を帖木兒朝といふのである。

中西亞細亞及び伊兒汗國の征服 帖木兒は深く成吉思汗の偉圖を慕ひて世界一統の壮志を懷き、一三六九年以後屢々東の方葱嶺を踰えてモグリスタンの篡立者カマル・ウッヂン (Kamar ud-din) を剿討し、イリアス・ホージアの弟なる哈實哈兒汗黑的兒火者を降して其の女を娶り、一三八〇年悉く察合台汗の舊領土を一統した。また帖木兒は西に向つて花刺子模の領主ユズフ・ベグ (Yusuf Beg) を討つて之を平らげ、一三七六年欽察汗國の内亂に干渉して白帳汗ウルス (Urta) を逐ひ、哥里米 (Krim)

部のトクタミシ (Toktamish) を助けて白帳汗となしたのである。是より先き伊兒汗國は不賽因 (Abu Said) が嗣なくして死し、阿里不哥の遠孫アババクン (Arbakun) が立ちたるも、呼羅珊、シリアは獨立の有様となつて國內殆ど分崩せんとし、次で旭烈兀の遠孫アウイス (Auis) が八吉打に據りて呼羅珊を恢復したるも、其の子アームド (Ahmed) が暴虐にして民心を失つたから、帖木兒は此の機に乗じて先づセルベタリド・アリ・ムアガッド (Serbelarid Ali Mhagadd) を降して呼羅珊を取り、次で哈烈 (Herat) を攻めてギアス・ウッヂン・ビル・アリ (Ghias ud-din Pir Ali) を降し、阿富汗 (Afghan) 人を窘め、更にマザンデラン (Mazanderan)、アゼルバイジャン (Azarbaijan)、ファルス (Fars) を略し、一三八〇年より一三八八年に至る間に波斯の全土を平定したのである。

欽察汗國征服及び露西亞侵入 欽察汗國は第十四世紀の中頃に金帳汗の血統が絶えて白帳、喀山 (Kazan)、哥里米の三汗が金帳の汗位を紹がんとして相攻伐したが、既にして哥里米部のトクタミシが白帳汗ウルスの逐ふ所となり、走つて帖木兒に投じたから帖木兒は之を納れて厚遇優待し、兵を送りてウルスを逐ひトクタミシを納れて白帳汗となしたるに、一三八〇年トクタミシは遂に金帳汗ムハメッド・ブラク (Muhammed Bulak) を襲殺し、自立して金帳汗となつたのである。是より先き露西亞の諸侯は毎年薩來に入朝して金帳汗に幣物を捧げ、また一旦緩急ある時は兵を發して汗の爲めに盡くす

義務があつたが、金帳の勢が衰へて内亂起るに及び是等の諸侯は互に獨立を謀りて約束を奉じなかつたから、トクタミシが金帳汗となるや一三八二年露西亞に侵入して是等の叛藩を征し、モスカウを下しウラヂミル、烈也贊^{リヤザン}(Ryazan)等を焼きて諸侯を威服し、勢に乗じ更に轉じて帖木兒の領土花刺子模に侵入した。時に帖木兒はファルスにありて此の報を得、トクタミシが恩義に背けるを怒り師を班して之を伐たんとするや、トクタミシは之を聞き掠奪を縦にして退去したから、一三九〇年帖木兒親ら兵四十萬を率ゐて撒麻耳干を發し、ウラル(Dural)河を渡りてトクタミシの軍をヴォルガ(Volga)河畔に擊破し、北ぐるを追うて露西亞に入り一三九一年六月十八日再びトクタミシをカンヅルチア(Kandur-poh)河に破り、ウルスの子コイリジャク(Koirijak)を金帳汗となして師を班した。次で帖木兒は一三九二年兵三十萬を率ゐて波斯に入り、進んで八吉打を略しアルメニア(Armenia)を経てグルジア(Georgia)に赴きたるに、會々トクタミシが再び薩來に歸りて兵を募りつゝあることを聞き、一三九四年鋒を轉じてデルベンド(Derbend)を越え、長驅して薩來を陥れヴォルガ河の右岸を溯り轉じてドン(Don)河に向ひ到る處を蹂躪したが、トクタミシの遠く遁れ去りたるを聞き、エレッツ(Elets)に至りて軍を旋し、是よりアゾフ(Azov)に赴き更にアストラカカン(Astrakhan)に向ひ、掠奪を縦にして一三九五年撒麻耳干に歸つたのである。

印度侵入 帖木兒はまた當時印度のツグラク(Traglak)王朝が衰へて内亂起れるを聞き、一三九八年三月親ら兵九萬二千を率ゐて撒麻耳干を發し印度に向つて軍を三道より進めた。かくて帖木兒は先づ阿富汗斯坦を掃蕩して印度に侵入し、其の孫ピル・モハマッド(Pir Mohammed)はカンダハル(Kandahar)を發し印度河を渡りてムルタン(Multan)を圍み、六ヶ月にして之を降し然る後帖木兒の軍に合した。是に於て帖木兒はツグラク朝の都デリー(Delhi)に向つて進み、到る處掠奪殺戮を恣にして一三九九年一月遂にデリーに達し、ツグラク王マームッド(Mahmud)の軍を其の城外に破り、城中に闖入して虐殺掠奪を行ふこと五日に及び其の市街は伏屍累々として通行することができなかつたが、此の間帖木兒は平然として酒宴を張り其の戦勝を祝したといふことである。既にして帖木兒はデリーを發し軍を進めてジウムナー(Jumna)河の流域を蹂躪し、然る後ガンガ(Ganges)河を渡りミールト(Mirat)に大虐殺を行ひてハルドワル(Hardwar)に進みたるに、會々西亞細亞のグルジア(Georgia)人が叛亂を起し、またオスマンリ土耳其(Osmali Turk)の算端(Sultan)バディシッド(Badhisid)一世が埃及と同盟して帖木兒の領土に侵入せんとする急報に接したから軍を班し、ヒマラヤ(Himalaya)山麓に沿うて西の方中央亞細亞に退き、一三九九年五月撒麻耳干に歸つたのである。

オスマンリ土耳其との衝突 初め成吉思汗の西征するや中央亞細亞の諸民族は或は降り或は遁る、

ものがあつて大に移動したが、メルヅ(Merz)附近に住める土耳其人の一部二三千人は一二二七年其の酋長スレイマン(Suleiman)に率ゐられて小亞細亞に通れ、^{ルム}蘆眉(Rum)のセルジューク(Seljuk)朝に依らんとしてコニア(Konia)に至りたるに、算端アラ・ウッチェン(Ala ud-din)の拒む所となりて引き還り、エウフラト河を渡る際スレイマンが溺死したから部衆は解散したが、餘衆は更にスレイマンの子エルトグルル(Ertoghrul)を奉じて再びコニアに赴き、遂にアラ・ウッチェンの容るゝ所となりてアンゴラ(Angora)の附近カラジヤ・ダハ(Karaja Dagh)の地に土着し、次で戦功によりスグト(Sugut)を領するに至つたのである。エルトグルルの子オスマン(Osman)もまたセルジューク朝を援けて伊兒汗合贊(Ghazan)の侵寇を防いだが、一二〇〇年セルジューク朝の瓦解するに及び其の地を經略して獨立し、茲に始めてオスマンリ土耳其帝國の基を啓いたのである。オスマンの子オルハン(Orkhan)に至りて悉く小亞細亞に於ける東羅馬領を略し、憲法を制定して國政を改め、捕虜とせる基督教徒の男兒を養育してヤニツアリ(Janizary)隊を組織し、また屯田兵を設けて國勢頗る盛となり、其の子ムラド(Murad)一世はトラキア(Thracia)を略し一二三六年アドリアノーブル(Adrianople)を陥れて都を茲に遷し、セルヴァア(Sorvia)、ブルガリア(Bulgaria)を略して將にコンスタンチノーブル(Constantinople)に迫らんとしたが、一二八九年コソヴヅオ・ポリエ(Kosovo Polje)の役に陣没し、其の子バチヤムッド(Badjasid)

一世が嗣いで立つた。時にオスマンリ土耳其の勢が益々盛であつてボスニア(Bosnia)、マケドニア(Macedonia)、希臘を侵略し、將に東歐羅巴を併呑せんとする勢があつたから、東羅馬帝及び匈牙利王は檄を歐羅巴諸國に飛ばして援を乞ひ、羅馬法王もまた十字軍を起さんとするに至つたのである。是に於て一三九六年匈牙利、獨逸、佛蘭西等の精騎十萬餘は匈牙利王シギスムント(Sigismund)の麾下に屬し、バチヤシッドの軍とブルガリアのニコポリス(Nicopolis)に戦つて大に敗れ、コンスタンチノーブルは土耳其軍の圍む所となりて落城旦夕に逼まつたが、重幣を贈りて漸く圍を解くことができたのである。既にしてバチヤシッドは其の將チムル・タシ(Timur Tash)を亞細亞に遣はして版圖を擴張せしめ、また埃及の算端と通じて帖木兒の領土を侵さんと圖るに及び遂に大衝突を惹起すに至つた。時に帖木兒は印度より還り一四〇一年また兵を率ゐて小亞細亞に入り、シヴァス(Sivas)を取り南下してアレppo(Aleppo)、^{ダマスス}的迷失吉(Damascus)を略し八吉打を陥れ次でタブリーズに進んで兵を休めたが、會々東羅馬帝マヌエル・バラエオロゴス(Manuel Palaeologos)が使を遣はし歲幣を約して來援を請ふや、帖木兒はまた南下してシリアに入り埃及軍を破り次で西進して小亞細亞に入つた。是に於てバチヤシッドは兵を率ゐて亞細亞に來り、一四〇二年アンゴラ(Angora)小亞細亞の一市にして古はアンキラ Ancyraといひ今はエングリエー Engrieh と云ふ、コンスタンチノーブルの東南東約二百二十英里にあり)の

野に帖木兒と激戦して大に敗れ、遂に擒にせられたからオスマンリ土耳其帝國は一時瓦解した。かくて帖木兒は悉く小亞細亞を略定し次でグルジアを攻掠して師を班し、一四〇三年七月撒麻耳干に歸つたのである。

支那遠征 初め帖木兒は明の太祖と使聘を通じたが宗國元朝の覆されたるを以て不快に感じ、印度侵伐以前既に東征の志を懷いて居たから、今や西方諸國を屈服して威を亞細亞及び歐羅巴に振ふに至り、宗國の恢復とイスラム教の傳播とを口實として士氣を鼓舞し、東征の師を起し進んでツングス(Tungus 土耳其語の豚にして明帝に對する惡口なり)を滅ぼして祖宗の大業を克復せんと決した。かくて帖木兒は一四〇四年諸地方の酋長、諸將、摺紳を撒麻耳干に會してフリルタイを聞き、イスラム教傳播の爲め支那に向つて神聖戰爭を起さんとするの意を演べて協贊を得、十二月令を四方に宣布して步騎二十萬を塔失干(Tashkent)に集め、一四〇五年一月八日大旗を翻して撒麻耳干を發し、烈寒積雪を冒して軍を進めシル河(Silur Daria)を氷渡して二月二十七日訛答刺(Orta)に達し、速に支那に向つて進軍せんとし令を諸兵に傳へたが、偶々熱病に罹り數日にして死んだ、年は七十歳であつて實に一四〇五年四月一日のことである。時に支那は明の成祖が位にあつて帖木兒の東侵を聞き、甘肅總兵官宋晟に命じて甘肅方面を警備せしめたが、帖木兒が遂に死んだから遂に衝突するに至らなかつた。思ふに成祖の雄略

を以て若し帖木兒と決戦したならば、勝敗の孰れに歸するに拘はらず世界史上に一大壯觀を遺したであらうが、其の事のなかつたのは惜しむべきことである。

帖木兒の治績 帖木兒は性明敏にして果敢なり、初めイリアス・ホージャを擯斥するや士民喜んで可汗の尊號を奉つりたるものありと雖も敢て之に當らず、殊に自ら成吉思汗の正統裔孫にあらざるを以て新に禍亂を招かんことを憂ひ自ら警めて汗位を望まず、フリルタイを開いて成吉思汗の末裔を擁立し自ら宰相(Amir)となりて實權を握つたから、其の行爲を怪しむものなく遂に宿志を達することを得たのである。帖木兒はまた意を内政に注ぎ親しく人材を選び各部の政務を掌どらしめて自ら萬機を總攬し、博識多才の士は之を擧げて己れの輔弼に任じ、忠直なるものは之を取つて州郡の施政官となし、人民及び軍隊の動靜其の他百般の要報を申告せしめ、且つ監察官を派して民情風俗を察し吏民の非違を糾弾せしめ、また租税を徵集するに當り體刑を用ふることを禁じた。帖木兒はもと宗教に冷淡であつたが國家統一の必要上イスラム教を尊崇して僧官を任じ、特に檢察官を置きて僧侶の所有財産及び寺院の監督に當らしめ、都市には寺院、學校、病院養育院等を建設し、道路には驛傳を設け河川には橋梁を架して交通の利便を圖り、また深く學藝を愛護し常に學者を會して古今の史實を談じ英君明主の事蹟を語らしめ、是を取り非を捨て力めて過失を寡くせんことを求めたといふことであるが、ま

た深く士民の疾苦を察して新に法律を制定し、刑罪を寛にして名望を博せんと力め、殊に將士を愛撫して勳勞あるものは之を賞し、降者と雖も喜んで之を登庸した。帖木兒はまた商業貿易を奨励して支那及び歐羅巴諸國と使聘を通じ、小亞細亞を略定してブルサ(Bursa)、ニカエア(Nicaea)、スミルナ(Smyrna)の諸港を取るや、書を英吉利王ヘンリ(Henry)四世に送りて其の臣民の爲めに交通貿易を求め、また西班牙のカスチリア(Castile)王エンリック(Enrique)三世は一四〇三年クラヴィホー(Ruy Gonzalez di Clavijo)を遣はして帖木兒を撒麻耳干に聘問せしめた。是より先きエンリックは既にペラエ・デ・セントマール(Pelayo de Sotomayor)及びヘルマン・サンチエゴ・デ・バラズエロス(Herman Sanchez de Palozuelos)を使節として帖木兒に聘せしめ、アングラの戦の時帖木兒の陣中にあつた、蓋しエンリックの目的はオスマンリ土耳其及び近隣のイスラム教徒に對して帖木兒と同盟せんと欲し、また其の國威を東方に耀かし且つ其の形勢を探知せんとするにあつたやうである。

帖木兒朝の分裂と沙哈魯の一統 初め帖木兒は長子ジャハンギル(Jalangiir)の子ビル・モハメッド(Pir Mohammed)を立て、嗣となしたが、帖木兒の訃報撒麻耳干に達せる時ビル・モハメッドは出で、カンダハル(Kandahar)にあつたから、其の従弟哈里(Khalil 帖木兒の第三子ミラン・シアー Miran Shah)の子が貴族及び軍隊の推す所となつて撒麻耳干に據 算端(Sultan)と稱した。時に哈烈(Herat)

に鎮せる帖木兒の第四子沙哈魯(Shah Rukh)もまた撒麻耳干に歸つて立たんとしたるも、哈里が既に立てるを聞きて哈烈に退き呼羅珊及びマザンデランを取つて機を覘つて居たのである。然るに哈里は驕奢に耽りて遂に士民の心を失ひ、一四〇九年叛者の爲めに廢せらるゝや、沙哈魯は之に乗じ兵を擧げてマザル・ウン・ナールを取り、次で哈烈に還りて茲に都を奠め其の子兀魯伯(Ulughbeg)を撒麻耳干に駐めて鎮せしめた。是より先き欽察、アルメニア、シリア、小亞細亞、オスマンリ土耳其、印度等の大部分は帖木兒の死せると共に離叛したから、沙哈魯の君臨する所は唯西土耳其斯坦、波斯及びバクシャブの一部に過ぎなかつたが、沙哈魯は賢明にして學藝を好み學者を朝廷に聘して之を優待し、また父の政策を踏襲して心を民治に傾けたから、國內は太平無事にして文學科學が鬱然として興隆するに至つたのである。沙哈魯はまた好を外國に通じて使聘の往來が絶えなかつた、かくて一四一九年には親書を齎らして使節を明の成祖に送り、一四四二年にはアブズル・ラザック(Abdur Razzak)に命じ、印度に赴きて古里(Calicut)のサムリ(Samuri)を聘問せしめた、サムリは古里王の稱號であつて歐羅巴人の所謂ザモリン(Zamorin)である、もとサンスクリット語のサムンドリ(Samundri)より轉訛せるマラヤラム(Malayalam)語であつて海王の義である。時にカラ・クニル(Kara Kayulu^{黒羊の義})土耳其の會長カラ・ユズフ(Kara Yusuf)がアゼルバイジャンを取りメンボタミア(Mesopotamia)及び八吉打を

併せて波斯を侵したから、沙哈魯は三たび伐つて之を破り、後カラ・ユズフの死するに及び一四二〇年其の子イस्कンダル(Iskandar)を降してアゼルバイジャンを奪ひ、次で一四三二年ケルバン(Kerman)を討つて其の主オロイス(Oroays)を服した。是に於て其の威令の及ぶ所は東は葱嶺より西はアストラバッド(Astrabad)、亦思法杭(Ispahan)及びシウステル(Shuster)の遠きに及んだのである。

兀魯伯とト撒因 沙哈魯は一四四七年に死して其の子兀魯伯が嗣いだ、兀魯伯は父の治世中より撒麻耳干に治すること三十八年、大に科學及び文藝を好み殊に天文數學に長じて有名なる天體表

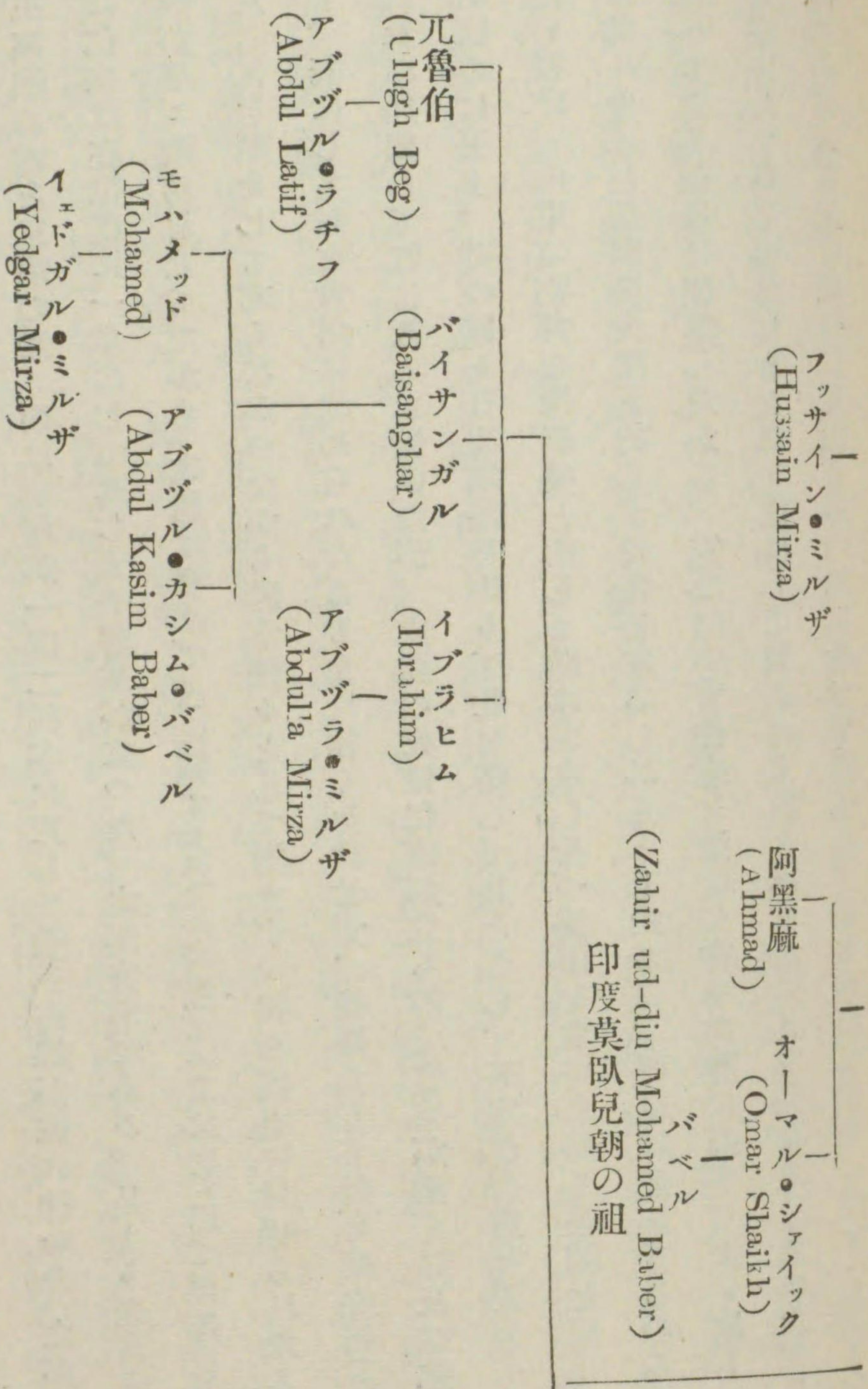
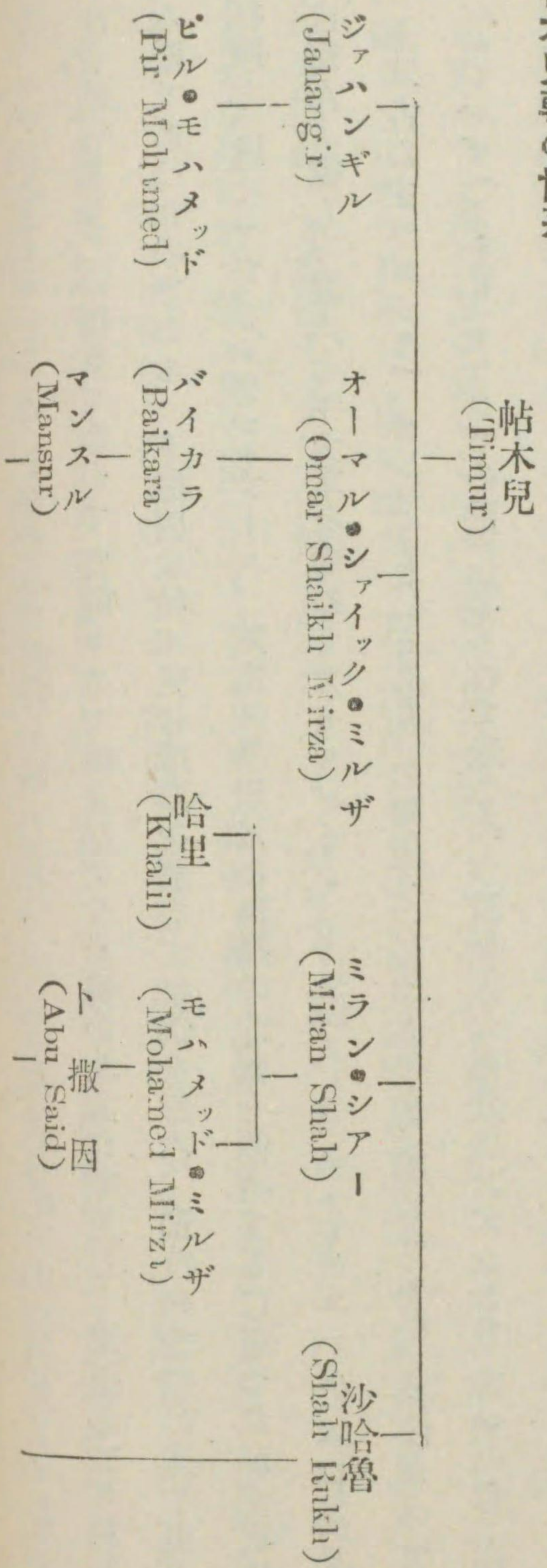
(Astronomical Tables)を作り、シツカン・イル曆(Sikhkan Il 鼠兒曆の義)を編成し、また宮殿學校天文臺を造營した、故に其の治世は中央亞細亞及び波斯の黄金時代であつたが、文弱に流れたる結果國內大に亂るゝに至つたから、機に乗じて土耳其曼(Turkoman)人は哈烈を劫掠し月祖伯(Uzbeg)人は撒麻耳干を陥れ、兀魯伯もまた一四四九年其の子アブヅル・ラチフ(Abdul Latif)の爲めに弑せられたのである、是に於て帖木兒の第三子ミラン・シアアの孫ト撒因(Abu Said)が兵を擧げ、撒麻耳干を攻めてアブヅル・ラチフの破る所となつたが、幾許もなくしてアブヅル・ラチフが暗殺せられ、沙哈魯の孫アブヅル・カシム・バムル(Abdul Kasim Babar)が立つに及び、ト撒因はまた之と争を起し一四五七年遂にバベルを廢して自立し、次で月祖伯汗アブル・カイル(Abul Khair)の援助により再從弟アブ

ヅラ・ミルザ(Abdulla Mirza)を擊殺して國難を靖んじた、時に一四五九年である。アブル・カイルは青帳汗昔班(Shiban)の後裔であつて當時カスピ海及びアラル海の北方に蟠居し、東征して瓦刺を破り勢頗る盛であつたのである。ト撒因は帖木兒の事業を慕うて征伐を好み、即位の後頻に兵を出して四方を征服し、遂にマヴァル・ウン・ナール、阿富汗斯坦及び波斯の北部を領有するに至つたが、更に地を西方に得んと欲し一四六七年大軍を率ゐてアゼルバイジャンに侵入し、アク・クユンル(Ak Kuyunlu 白羊)土耳其の主ウズン・ハッサン(Uzun Hassan)の擊破する所となりて擒にせられ、沙哈魯の曾孫イドガル・ミルザ(Yedgar Mirza)の許に送られて殺され、波斯の大部分はウズン・ハッサンの奪ふ所となつたのである。

帖木兒朝の末路 ト撒因の敗死するや其の領土は忽ち四分五裂し、ト撒因の長子阿黑麻(Ahmad)は撒麻耳干を保ち、其の弟オーマル・シャイク(Omar Shaikh)は费尔干那(Fergana)を領し、帖木兒の第二子オーマル・シャイク・ミルザ(Omar Shaikh Mirza)の四世の孫フッサイン・ミルザ(Hussain Mirza)は呼羅珊に據り、其の他にも一方に割據するものが多かつた。就中フッサインは一四八七年より一五〇六年まで哈烈に都し、賢明にして文學を好み、詩人ジャミ(Jami)、史家ミルコンド(Mirkond)及び畫家ヘーザド(Belzad)等を愛護したといふことである。是より先き月祖伯汗アブル・カイルが死し

て其の子モハメッド・シャイバニ (Mohamed Shaibani) が立ち、帖木兒朝の分裂に乗じ頻に南伐して花刺子模を略し、次で一五〇〇年撒麻耳干を陥れたが、一五〇七年に至り遂に呼羅珊に侵入して哈烈を陥れ、後またオーマル・シャイックの子バベル (Zahir ud-din Mohamed Baber) を逐ひ、不花刺に入りて不花刺汗國を建設しシャヒ・ベグ汗 (Shahi Beg Khan) と稱して勢威を中央亞細亞に振つたから、是に至りて帖木兒帝國は遂に亡びたのである。後バベルは中央亞細亞を恢復せんと圖りたるも成らず、遂に印度に入りて莫臥兒 (Moghul) 朝の祖となつたことは後章に於て詳説する。

帖木兒朝の世系



第十六章 宣宗孝宗の治 瓦剌韃靼の入寇

漢王高煦の叛と宣宗の治 明は成祖が一四二四年に死して太子高熾が位に即いた、之が仁宗である、然るに仁宗は在位僅に一年にして死し太子瞻基が立つた、之が宣宗である。是より先き成祖の次子漢王高煦が屢々戦功を立てたから、成祖は喜んで己に頼すとなし高煦もまた之を以て自負し、よりて太子たらんことを期せしも成らなかつたから居常快々として樂まず、初め雲南に封ぜられたるも行く肯んぜず、既にして封を青州に改められたるもまた往くを欲せず、後罪ありて封を樂安州(山東省武定府)に移さるゝに及び怨望して既に叛志を懷いたが、成祖の死後仁宗が立ち尋で宣宗が嗣ぐに及び遂に意を決して叛を謀るに至り、其の黨と日夜軍器を作り丁壯を籍して兵となし、五軍都督府を置きて部下の諸將に官爵を授け、山東の都督指揮蘄榮と約して助けとなし先づ濟南を取つて然る後闕を犯さんと期し、使を京師に遣はし英國公張輔と約して内應をなさしめんとしたるに、張輔は聽かざるのみならず其の使を執へて之を朝廷に聞奏したから、宣宗は中官侯泰を遣はし書を高煦に賜うて之を諭したが、高煦は兵を盛にして泰を引見しまた使を遣はして朝臣の多數を誅せんことを索むるに至つた。是に於て帝は一四二六年八月遂に楊榮、夏原吉等の説に従つて親征し、兵を率ゐて樂安の城下に至り書を贈りて

高煦を諭し、且つ城中の人を招いたから往々高煦を執へんとするものあるに至り、高煦は恐れて遂に降を請ふたから帝は高煦父子を京師に械送したのである。時に群臣中にはまた其の弟趙王高燧を執へて朝廷の憂を絶たんと請ふものがあつたから、帝は楊子奇の言により其の上疏を封じて趙王に贈るや、趙王は大に喜び上表して之を謝し其の護衛を獻するに至つた。是に於て帝は京師に還りて悉く漢王の黨與を誅し、高煦を廢して庶人となしたが後數年を経て遂に之を殺したのである。帝は次で北邊を巡りて兀良哈(ウリヤンハイ)の兵を破り後また安南を伐つて失敗したが、仁賢にして夏原吉、楊榮、楊溥、楊士奇等の名臣に任じ精を勵まして治を圖つたから、吏は其の職に稱ひ政は其の平を得、綱紀修明にして閭閻業を樂むに至つた、故に之を宣徳の治といひ明室の極盛時代であつたのである。

王振の專恣 宣宗は一四三五年に死して太子祁鎮が位に即いた、之が英宗であつて幼年であつたから太皇太后張氏が朝に臨み、楊士奇、楊榮、楊溥の三楊が之を輔けて政がよく治まつた。然るに宦者王振は狡黠にして智略あり、仁宗の東宮にある時から事へて宣宗の幼時に寢々事を用ひ、帝の太子となるや朝夕左右に侍し位に即くに及んで司禮監を掌どり、寵任を得て遂に政に與かるに至つたのである。既にして楊榮が先づ死し楊士奇は事を以て退き、楊溥は年老い孤立して勢が衰へたから政權は皆王振に歸した。會々翰林院侍講劉球が詔に應じて事を言ふや王振が怒つて之を殺したから、是より其

の威に恐れて事を言ふものなく、王振は益々權を專にして生殺與奪を恣にし、廷臣は皆彼を翁父と稱して跪禮を行ふに至り、後楊士奇及び楊溥が相次で死するに及び王振は忌憚する所なくして益々跋扈したから、明の政は漸く亂るゝに至つたのである。王振はまた頻に武威を外に耀かさんと欲し、大兵を發して麓川(雲南の西南部)の蠻を撃破し、また兀良哈を征したるも功なく唯北人の怨を深くして遂に瓦刺の入寇を招くに至つた。

瓦刺の入寇と土木の變 初め成祖が北征せる結果韃靼瓦刺の二部は遂に仇敵となり、韃靼の部長阿魯台が勢を得るに及び一時瓦刺を壓迫したが、既にして馬哈木が死して其の子脫歡(Toghon)が部長となるや頻に韃靼を破り、一四三四年遂に阿魯台を襲殺して自ら可汗とならんとしたるも部衆が附從しなかつたから、脫古思帖木兒の曾孫脫脫不花(Tukhta Bukha)を立て、韃靼可汗となし、自ら丞相となり太師と稱して實權を握るに至り、阿魯台の部下は東の方輿安嶺の麓に移つて科爾沁(Korchin)部を建てたが、他の韃靼諸部は悉く脫歡に降つたのである。脫歡は一四四三年に死して其の子也先(Yesen)が嗣でまた太師となり、勇略に富みて諸部を威壓したから脫脫不花は徒に可汗の空名を有するのみであつて之を制することができず、瓦刺の勢が頗る強大になつたのである。是より先々瓦刺が屢々使を遣はして明に入貢するや、王振は太平を藻飾するを以て名となし之に金帛を賞賛すること夥

しく、すべて其の請ふ所は與へざることなき有様であつたが、既にして也先が使者二千人を發して馬を買し詐つて三千人と號するや、王振は其の詐を怒りて馬價を減去し且つ其の請ふ所のものに對して僅に五分の一を與ふるに過ぎなかつたから、也先は大に憤り一四四九年諸部を誘ひ大舉して入寇するに至つた。時に脫脫不花は之を止めたるも也先は聽かずして遂に道を分ちて進み、脫脫不花をして兀良哈より遼東を侵さしめ、阿刺智院(Alak Chingsang)をして宣府に寇し赤城を圍ましめ、また別將を遣はして甘肅に寇せしめ、也先は親ら衆を擁して大同より入り到る處の城堡を陥れたから、明の諸邊將は皆逃れて匿るゝに至つたのである。是に於て邊警頻々として京師に至るもの日に數十度に上つたから王振は英宗に親征を勧め、帝は皇弟郕王祁鈺に命じて京師を居守せしめ、群臣の諫を聽かずして親ら五十餘萬の大軍を率ゐて居庸關より出で、宣府に至つた。時に群臣は茲に留まらんことを請へるも王振が肯せざる爲め帝は進んで大同に至り、王振は尙ほ北行せんとしたるも郭敬の言によりて遂に師を班し、地先に軍後を襲はれて亡失する所甚だ多く、次で土木堡(直隸省宣化府懷來縣西)に至るや也先の兵が來り侵して明軍大に敗れ、將士等は怒つて王振を殺せるもまた如何ともすること能はず、死傷數十萬に及びて英國公張輔等五十餘人は皆死し、帝は遂に擒にせられて伯顏帖木兒(Bayan Timur)の營に送られた、之を土木の變といふのであつて實に一四四九年八月のことである。既にして敗報が京師に達

し群臣は戰守を議したるも、京師は疲卒羸馬十萬に滿たず人心洶々たる有様であつたから、敵の鋒を避けて南京に遷らんことをいふものがあつたが、侍郎于謙、大監金英等の言によりて固守に決し、太子見深は尙ほ幼少であつたから皇弟郟王（景帝）を擁立し、遙に英宗を尊んで上皇となし、王振の家を籍没して其の族を誅夷し、兵を徴し糧を聚めて居庸關を嚴守した。是より先き皇太后孫氏は使を虜營に遣はして駕を贖はんとせるも行はれず、既にして也先は上皇を擁して大同に至り紫荆關を破つて京師に迫まつたから京中騷擾したが、于謙は自ら各營の軍馬を督し諸王に入營を促し宣府遼東の總兵官及び山東、山西、河南、陝西の巡撫をして皆入援せしめた、故に也先が來りて京師を犯すや城兵固守して下らず四方の兵また來り援ふたから、也先は氣大に沮喪し遂に夜中營を抜いて北に去り京師は漸く戒嚴を解いたのである。會々瓦刺には脱脫不花及び阿刺智院と也先との間に隙を生じ君臣鼎立して合はず、脱脫不花は遂に使を明に遣はして好を通するに至り、也先はまた屢々入寇して敗れたから氣大に阻み、使を明に遣はして上皇を還へし和を講せんことを議するに至つた。是に於て明の群臣は皆之を許さんとせるも景帝は之を悦ばなかつたが、于謙が「大位既に定まれり唯迎還して邊患を弭めんのみ」といふに及んで帝の意始めて釋け、右都御史楊善等を遣はして上皇を迎へしめたから、也先は遂に阿刺智院に命じ五百騎を以て上皇を京師に護送した。時に上皇は先づ使を遣はして登極は予の

願ふ所にあらずといはしめたから、帝は上皇を迎拜し送つて南宮に至り、朝見の禮を行ひ天下に大赦した、時に一四五〇年である。

英宗の復位 初め景帝の位に即くや英宗の子見深は依然として太子であつたが、後帝は之を廢して沂王となし己の子見濟を立て、太子となした、然るに幾許もなくして見濟が死し、帝もまた病むに及び、朝臣は儲位未だ定まらざるを以て萬一を慮かり太子を立てんことを請ふた。是に於て武清侯石亨は帝の遂に起きざるを知り副都御史徐有貞、大監曹吉祥等と謀りて上皇を位に復さしめんとし、群從子弟及び家兵を率ひ夜半南宮の城門を毀ちて入り上皇を掖して出たのである。時に朝臣は早く入朝して儲貳のことを議したるに忽ち變を聞いて色を失つたが、徐有貞が出で、衆に向ひ「太上皇帝位に復せり」と告げたから、朝臣は入りて賀し百官皆震駭して入謁し、遂に帝を廢して郟王となし西内に遷したが幾許もなくして死んだのである。是に於て英宗が位に復して天下に大赦し、次で迎復の功を論じて石亨、徐有貞等の官爵を進めて内閣に列し、于謙等を殺し、再び沂王見深を立て、皇太子とした、時に一四五七年一月である。既にして石亨、曹吉祥等は徐有貞が帝に寵あるを嫉み、共に謀つて金齒に流竄したが、石亨は擁立の功を恃んで驕恣貪暴であつたから帝は漸く之を疎するに至れるに、會々石亨は韃靼の入寇を拒いで功なくまた其の姪石彪が罪を犯して獄に下さるゝに及び、遂に怨

望して反を謀り事露はれて誅せられたから曹吉祥も自ら安んずる能はず、後幾許もなくしてまた其の養子欽と不軌を謀り遂に誅せられたのである。英宗は位に復してより八年にして死し太子見深が立つた、之が憲宗であつて時に一四六四年である。

汪直の専横 初め成祖は東廠を置き宦官をして逆謀大好を訪緝せしめ其の權勢を錦衣衛と均しくしたが、憲宗の時に至り一四七七年更に西廠を設けて大監汪直に命じ之を督して外事を調刺せしめ、其の領する所の提騎は東廠に倍したから其の權勢は遙に錦衣衛の上に出づるに至つた。是より汪直は暴威を振ひ屢々大獄を起し冤死するもの多くして人心が安んじなつたから、大學士商輅が上疏して汪直の横恣を劾し且つ西廠を罷めんことを請ひ、兵部尙書項忠もまた汪直を劾奏するに及び帝は已むを得ずして西廠を罷めたから中外大に悦んだが、既にして御史戴縉が帝の意を迎へ災異を假りて建言し汪直の功德を頌するに及び、遂に詔してまた西廠を開いたから、是より汪直の勢が愈々熾になり項忠を構へて獄に下し、商輅を譖して職を罷めしめ、大臣の相次で陳免せらるゝもの數十人の多き上り、士大夫は皆首を俛して汪直に事ふるに至つたのである。一四七八年海西の散出哈(Sarchukha)が遼西の諸營の兵を連ねて入寇するや、帝は汪直に命じ出で東邊を巡視せしめ、次で撫寧侯朱永を總兵となし遼東巡撫陳鉞を提督軍務となし汪直を監軍となして海西を討たしめた。汪直は遼東に至り塞を出

で、敵の不備を襲ひ其の廬帳を焚いて還り大捷を以て聞奏したから、功を論じて汪直の歲祿を加へ十二團營を監督せしめたが、既にして海西の諸部が復仇を以て辭さなし深く雲陽清河等の堡に入りて男女を殺掠するに及び、一四八〇年また汪直等に命じて塞を出で敵を威寧海子に襲うて之を破つた。明年韃靼の亦思馬因(Ismail)が大同に寇したから、王越を征西將軍となして守禦せしめ汪直はまた其の軍を監して勢威が益々熾になつたのである。既にして大監尙銘が皇城の西内に入りたる賊を東廠の校尉が捕獲したることを奏聞するや、帝は大に喜びて厚く尙銘に賞賜せるに汪直が之を聞いて其の擅功を怒つたから、尙銘は懼れて汪直が禍亂を構ふることを奏したが、此の間李孜省が稍々事を用ひて汪直と善からず、また西廠の苛察を論ずるものが多かつたから、一四八一年帝は遂に汪直を黜けて南京の御馬監に降しまた其の黨與を貶し、遂に西廠を罷むるに至り中外大に欣んだといふことである。然るに是より李孜省が勢を得て權を專にし、帝もまた大に佛寺を建て、僧繼曉を尊重したから、李孜省は繼曉と共に搢紳の進退を自由にして姦をなし朝政頗る紊亂するに至つたが、帝は之を制する能はずして一四八七年死し太子祐楹が立つて孝宗となるや、李孜省を誅し繼曉を殺して悉く前朝妖佞の臣を除いたのである。

哈密の興復 哈密(Hami)はもと漢の伊吾廬の地であつて唐の世に伊州といひ安史の亂に吐蕃に没

したが、元末に至り其の宗族威武王納忽里(Nagim)を封じて之を鎮せしめ、其の死後弟安克帖木兒(Argu Timur)が嗣いで立つた、會々明の成祖が位に即き使を遣はして招諭するや一四〇四年入貢したから、成祖は之を封じて忠順王となし其の地に即きて哈密衛を置いたが、後瓦剌の勢が強盛に赴いて屢々哈密を侵すに及び、恐れて兩端を持し明の命に従はなくなつたのである。安克帖木兒から再傳して孛羅帖木兒(Polo Timur)に至り嗣子なくして弒せられ、王母が國事を主どり韃靼の部會訛加思蘭(Kakastan)の侵掠を避けて赤斤苦峪城(陝西省西安府涇陽縣東南)に移つたから、憲宗の時把塔木兒(Patanur)を都督となして國王の事を攝行せしめた、把塔木兒はもと畏兀兒(Dighe)人であつて孛羅帖木兒の外孫である。既にして把塔木兒が死し其の子罕慎(Hassan)が嗣ぎて都督に任せられたるも、時に土魯番(Turfan)の勢が強盛に赴き其の酋阿力(Ali)は雄黠にして自ら速檀(Sulttan)と稱し、機を窺ひ襲うて哈密城を破り王母及び金印を奪ふに至り、罕慎は遁れて苦峪城に移つたから其の衆遂に散じ、或は罕慎に歸附して肅州に居るものがあり或は土魯番に隨つて去るものがあつた。後阿力が死して其の子阿黑麻(Ahmad)が立つや、明は之に乗じてまた罕慎を哈密に納れ、次で之を忠順王に封じたから阿黑麻は怒つて遂に罕慎を誘殺し、哈密に據り使を明に遣はして西域の職貢を代領せんと請ふた、時に一四八八年であつて孝宗の宏治元年である。既にして阿黑麻は明を侮りて與みし易しとなし益々桀傲

なるを以て帝は其の使臣を拘留し貢物を却けて其の罪を責めたから、阿黑麻は懼れて使を遣はし哈密城及び金印を返還した。是に於て一四九二年故の忠順王脫脫(Tukha)の從孫陝巴(Shanpa)を封じて忠順王となしたるに、明年阿黑麻がまた其の城を襲ひ陝巴を執へたから、兵部侍郎張海等に命じて經理せしめたるも功なくして歸り、阿黑麻は益々驕横にして遂にまた哈密に據り可汗と稱して邊境を侵掠するに至り、一四九五年帝は遂に甘肅の巡撫許進等に命じ兵を發して阿黑麻の兵を破り哈密を恢復せしむるや、阿黑麻は大に懼れて陝巴を送還したから一四九八年再び陝巴を封じて哈密を鎮めしめたのである。後武宗の時に至り陝巴が死して其の子拜牙即(Payachi)が嗣いで忠順王に封せられたが、淫虐にして政事を親られせず、遂に阿黑麻の子滿速兒(Mansul)の爲めに其の國を奪はれたから、一五一年右都御史彭澤を遣はして哈密を經理せしめたるも功なく、次で滿速兒がまた瓦剌を誘うて連年河西に入寇したから、世宗の時に至り遂に議して哈密を棄つるに決した、時に一五二八年である。

瓦剌の衰亡 瓦剌の也先は明と和したる後脫脫不花が明と通じて己を害せんとするを疑ひ、一四五一年遂に之を攻殺し更に兵力を以て諸部を追脅して東は兀良哈に至り西は哈密に及び、一四五三年遂に自立して大元田盛可汗と稱し其の次子を以て太師となした。兀良哈はもと滿洲吉林地方の通古斯(Tungus)族にして女眞の一部であるが、曩に明の成祖を助けて靖難の役に功があつたから大寧(山西省臨

州大)附近の地を得て勢強盛になつたが、是に至りて瓦剌に降つたのである。然るに也先は強を恃み日に益々驕恣となりて酒色に荒み、阿剌智院が太帥たらんことを請へるを許さず且つ其の二子を殺したから、阿剌智院は大に怒り一四五四年兵を率ゐて也先を攻殺し代はりて其の衆を領したが、後幾許もななく韃靼部長孛來(Boilai)がまた阿剌智院を殺して也先の母竝に其の玉璽を奪ひ、脱脫不花の子麻兒可兒(Malkol)を求めて小王子と號した、是より後元の後裔は皆小王子と稱したのである。是に於て瓦剌は遽に衰へて部衆が分散し、孛來は其の屬毛里孩(Molikhai)、阿羅出(Olochu)等の諸酋と共に部中に雄視して韃靼の勢がまた熾になつた、而して瓦剌は也先の死後數傳して孛汗(Boikhan)の子烏林台(Urlintai)に至り、遂に其の部落を統べて準噶爾(Jungar)部の祖となつたのである。

蒙古の分裂 小王子麻兒可兒の死するや部衆は共に其の從兄脫思(Taisi)を立て、馬古可兒吉思可汗(Maku Colgis Kakhan)と號したるも、韃靼の酋長が益々專横を極めて小王子の廢立を恣にしたから、其の勢は微弱であつて殆ど君臣の別なく、小王子の世次は間々考へ難きものがあるに至つた。かくて明の憲宗の初年に小王子は部酋孛來、毛孩等と共に河套を占領して之に據つたが、既にして部衆が大に亂れ孛羅忽(Boilho)は毛里孩に結び、阿羅出は亂加思蘭(Kakaslun)に結び各々黨を樹て、攻伐するに及び、孛來が爭亂に乗じて小王子を弑したから毛里孩は孛來を擊殺して更に可汗を立てたが、尋でまた之を弑して阿羅出を驅逐するに及び、孛羅忽は阿羅出と連合して毛里孩に對抗した。後幾許もなく亂加思蘭が阿羅出を殺し孛羅忽と共に河套に據りて邊患をなしたから、明は屢々兵を發して之を征討したるも遂に功を奏さなかつた、然るに其の後毛里孩の部屬が衰ふるに及び元の後裔滿魯都(Manlu)が河套に入りて亂加思蘭を以て太師となし、一四七三年大舉して韋州に入寇したるも王越に破られて遁れ去つた。初め亂加思蘭は其の女を滿魯都に妻はし已れが代はつて可汗とならんとせしも、部衆の服せざるを恐れ謀つて滿魯都を殺し阿赤來(Orchi)を立て、可汗となさんとし、滿魯都を攻めて之を逐ひ孛羅忽の衆を併有したるに、滿魯都の部酋亦思馬因(Isimain)及び脫羅干(Talagai)等が滿魯都を助けて亂加思蘭を攻殺し、亦思馬因が自ら太帥となつた、而して滿魯都の死後また分裂して衰微したが明に侵寇するものは尙ほ小王子と稱したのである。

達延の入寇 一四七〇年脱古思帖木兒六世の孫達延汗(Dayan Khan)が立つて小王子となり、脱羅干の子火篩(Khoelai)と賀蘭山に據つて自ら大元大可汗と稱し明に入貢したが、是より伯顏猛可(Bayan Mangū)王等と屢々入貢すると同時に套中に往來して出沒侵掠をなし、次で韃靼北部の亦卜剌因(Ibrahim)王等が套中に入つて駐牧するや、小王子は之と相依つて數々邊患をなし、一四九五年には入つて涼州を犯し甘肅總兵官劉寧に破られて遁れ去つたが、後また諸虜と相倚つて勢日に強盛に

赴き遼東、宣府、大同、延綏、甘肅等を侵掠したから、一四九八年孝宗は王越に命じ三邊の軍務を總制して之を伐たしめ、遂に小王子を賀蘭山に破り追うて柳溝（甘肅省寧夏府平羅縣西北）に至り、駝馬牛羊器仗千數を捕獲した。既にして小王子はまた火節と共に河套に居り、兵を連ねて東の方遼東に寇し尋で西に歸りて固原、寧夏の境に入り殺掠を恣にして引き還つた、時に一五〇一年である。

孝宗の治 孝宗は恭儉にして政を勤め民を愛し賢を用ひ能に任じ、明室中興の賢主と稱せられて居る、かくて即位の初めには李孜省、僧繼曉等の如き前朝妖佞の臣を誅し、大監梁芳、外戚萬喜等を貶謫して朝政を刷新し、次で天下に命じ預備倉を設けて糧を積ましめ、中鹽法を更めて民の利便を圖り、榜示して中外の奢靡制に踰ゆるものを禁じ、哈密の復興を謀りまた韃靼の入寇を斥けた。是に於て天下善く治まり國威外に振ひ文物また燦然として興つた、實に明代の明君と稱すべきである。帝は在位十八年にして一五〇五年に死んだが、終に臨み大學士劉健、李東陽、謝遷を召して「卿の輩輔導良く苦めるは朕備さ之を知る、東宮年幼にして逸樂を好む、卿の輩常に之に讀書を教へて輔導し以て徳を成さしむべし」といひ、翌日太子を召して諭すに祖に法り賢を用ふるを以てして遂に死んだのである。是に於て太子が立つた、之が武宗であつて是より明は漸く衰へたのである。

第十七章 朝政の紊亂 蒙古の侵寇

劉瑾の跋扈 初め武宗の東宮にあるや俳弄を以て寵を得たるものに劉瑾、馬永成、高鳳、羅祥、魏彬、丘聚、谷大周、張永の八人あり、時人は之を八黨といひ、また八虎とも稱した、就中劉瑾が最も狡獪にして頗る古今に通じ常に王振の人と爲りを慕つて居た。帝は既に位に即き尙ほ八人と日に遊戯を事として政を怠つたから、大學士李東陽が上疏して八人を誅せんことを請ひたるも許されず、尋で戸部尙書韓文が諸大臣と共に八人の罪を論じて之を誅せんことを請ふに及び、帝は已むを得ずして劉瑾を捕へんとしたが、之を劉瑾に告ぐるものがあつたから劉瑾は馬永成等を率ゐる夜中帝の前に伏して陳辯するや、帝は其の言に惑ひて之を宥し且つ劉瑾に命じて司禮監を掌ごらしめ、馬永成、谷大用に東西廠を用ひ權を專にして忠良を疎害し、遂に劉健、李夢陽、韓文、王守仁等五十三人を姦黨となして朝堂に榜示し、朝官五品以下三百餘人を執へて獄に下し、東西廠の外に内廠を立て微法を以て人を罰し、暴虐横恣日に甚しくして人心洶々たる有様であつた。是に於て湖廣江西四川に盜起り、次で安化王寘鐫もまた兵を擧げて反するに至つたのである。

安化王寘鐸の叛

安化(甘肅省慶陽府安化縣)

王寘鐸は太祖の子慶靖王梅の曾孫であるが、狂誕にして術者の言

を信じ遂に非分を覬望して其の黨周昂等と潛に逆謀を蓄へ、事に依りて將士を激し一五一〇年檄を遠近に傳へ劉瑾を誅するを名となして兵を擧げたのである。是に於て朝廷は右都御史楊一清に命じ軍務を總制して之を討たしめ、太監張永を以て監軍となした。是より先き遊擊將軍仇鉞は邊警を以て玉泉營(甘肅省寧夏府西南)に駐屯したるに、寘鐸が之を招いたから詐つて之に應じ、兵を賊營に隸し疾と稱して出でず陰に壯士に結んで間を伺つて居た。かくて楊一清の將に至らんとするに及び寘鐸が人をして計を仇鉞に問はしむるや、仇鉞は猝に起つて之を斬り壯士を率ゐて寘鐸の第に至り之を捕縛したから、其の衆は皆潰散した、寘鐸は叛きてより僅に十八日にして敗れ賊が遂に平らいたから、寘鐸を京師に檻送して死を賜ひ黨與は皆誅に伏し張永等は師を班したのである。時に張永は劉瑾と隙あり、楊一清がまた劉瑾を誅せんことを勸むるに及び遂に決意する所あり、既にして張永等は京師に還りて俘を獻じ帝は之を東華門に迎へて宴を賜ひ、夜に及んで劉瑾先づ退くや張永は懷中の疏を出して劉瑾が安化の變を激し自ら安んぜずして不軌を謀れることを奏したから、帝は遂に之を悟りて劉瑾を誅し其の黨與を斥けた。此の時帝は親ら劉瑾の家を籍して金銀數百萬、珠玉寶玩無數、袞衣、玉帶、甲仗弓弩等を得たといふことである。

江彬の專恣 劉瑾は既に誅死せるも地方の流賊は尙ほ平らがず、江西四川の盜賊は頻に州縣を攻破して官民を劫掠し、劉六劉七等の盜賊がまた畿甸を横行した。既にして劉六等は分かれて河南山東の州縣に寇し、明廷は兵を出して之を征討すること三年に及び遂に之を平らげたが、然かも内には官豎佞倖が尙ほ權を弄して朝政を紊したのである。初め宣府の江彬といへるもの驍勇にして狡險なり、大同の副總兵張俊に従ひて賊を山東に討ち、還りて京師に入り帝に見えて寵幸を得、更に邊兵を籍りて自ら固くせんを欲し盛に邊軍の驍悍にして京軍に勝ることを稱し、遼東宣府大同延綏四鎮の兵を調し、京師に入りて操練した。是より江彬の寵幸は最も盛であつて屢々帝を導き宮を出で、近郊に遊戲し、帝は遂に微行して居庸關を出で宣府に赴くに及び、江彬は帝の爲めに府第を營み珍玩美女を進めたから、帝は樂んで歸るを忘れ遂に大同に幸し陽和の北に獵して還り、是より數々宣府に幸するに至つたのである。江彬はまた帝を導いて大同より黄河を渡りて榆林に次し綏德州に至り西安より還つて偏頭關を歴て太原に抵つたが、既にして帝はまた南巡して泰山に登り徐揚を歴て南京に至り蘇浙に臨み漢江に浮び遍く中原を巡遊せんとするや、時に寧王宸濠が久しく異謀を蓄へて居たから上疏して留まらんことを請ふものが多かつたが、帝は大に怒つて之を獄に下したるも尙ほ上疏して極諫するものがあつたから、遂に留まつて出なかつたのである。

寧王宸濠の叛 寧王宸濠は太祖の子寧獻王權の五世の孫であるが、性貪殘にして志望涯りなく、然かも文行を以て自ら飾り曩には劉瑾等に賄うて護衛を復し次で江彬に結びて驕横甚だしく、帝が儲嗣なくして遊幸時ならず人情危懼するを見て遂に日夕覬覦するに至つたが、會々其の反謀が露はれて朝廷は太監頼義、駙馬都尉崔元、都御史顏頤壽等に命じ來りて之を諭し、其の護衛を收めんとするを聞き遂に意を決して反し、南昌(江西省南昌府)に據り檄を遠近に傳へて乘輿を指斥し左右丞相大元帥等の官を置いた、時に一五一九年六月である。既にして宸濠は兵を遣はして九江、南康を攻略し、次で親ら兵を率ゐる江に浮びて東に下り將に南京を衝かんとして安慶を攻めたるも克たなかつた。時に王守仁は巡撫南贛都御史であつて命を奉じて福建の叛軍を戡定したが、途に宸濠の叛を聞いて兵を起し南昌の兵少なきを知り攻めて之を陥れたから、宸濠は安慶の圍を解き南康、九江の兵を併せて還りて南昌を救はんとし、樵舍(南昌府新建縣西北)に大敗して擒にせられ南康、九江も相次で降り亂が遂に平らいだ、兵が興つてから凡そ三十五日である。是より先き江彬は帝に親征を勧め帝もまた親征に假りて南遊せんとし、楊廷和等の諫を聽かず駕を發して涿州に次するや王守仁の捷奏至り、回鑾を乞ふものありたるも帝は聽かずして遂に南京に至つた。時に王守仁は行在に入朝して俘を獻せんことを請ひたるも江彬が之を遮つて果さなかつたが、會々帝は王守仁に命じて江西を巡撫せしめられたから京口より去つて南昌に還つた

のである。江彬はまた帝を導いて蘇州に幸し浙江を下り湖湘に抵らんとしたが、諸臣が極諫し其の黨もまた阻んだから之を止め、帝は次で南京を發して京都に還つた。是より江彬は益々驕横となりて諸政を專にしたが既にして帝は病に罹りて死し、皇太后張氏が楊廷和等と議を定め遺詔を奉じて憲宗の第四子興獻王祐枕の長子厚熜を迎へ入れて帝位を嗣がしめた、之が世宗であつて時に一五二一年である。是に於て楊廷和は張永と謀り皇太后に白して江彬及び其の黨與を執へて獄に下し、尋で之を市に磔した、時に江彬の家を籍没したるに黄金七十櫃、白金二千二百櫃、他の珍寶また數ふるに勝へざるほどあつたといふことである。

大禮の議 世宗は既に位に即きて其の生父興獻王を追崇せんとするに及び廷臣中に紛議を惹起すに至つた、之を大禮の議といふのである。時に禮部尙書毛澄は大學士楊廷和の意を受け漢の定陶王、宋の濮王の故事を引いて帝の伯父孝宗を皇考といひ、興獻王を皇叔父といひ、興獻王の妃を皇叔母といひ、帝自ら姪皇帝と稱せんことを請ひたるに帝は怒つて聽かず、議は三たび上つりて皆却けられた。然るに觀政進士張璁が獨り上疏して別に聖考廟を京師に建て聖母は父と尊稱を同じくすべしといふや、帝は大に喜びて生父を興獻皇帝、生母を興獻皇后となさんとしたから、楊廷和等は其の不可なるを奏したるも聽かれず、廷臣は已むを得ずして孝宗を尊んで皇考となし、興獻王を本生皇考興獻帝となし、

興國大妃を本生皇太后となさんと請ふに至つた。既にして南京刑部主事桂萇が上疏して孝宗を皇伯考、興獻王を皇考となし、別に廟を大内に立て興國太后の禮を正うし定めて聖母と稱すべしといひ、張璠もまた上疏して之に繼ぎ本生の稱を去るべしといふや、帝は之を是としたから廷臣二百餘人が闕に伏し號哭して之を争ひ、帝の怒に觸れて或は獄に下され或は謫せられ或は杖せられて死するものが十人に及んだ。かくて論争が三年の久しきに亘つて決しなかつたが、遂に席書が禮部尙書となるに及び其の議によりて孝宗を皇伯考と稱し、其の皇后を皇嫂と稱することに決定し、詔して之を天下に告げ尊稱が遂に定まつた、時に一五二四年四月である。此の論争の是非に就ては清の趙翼の二十二史劄記に「究而論之、廷和等援引漢哀宋英二案、固本先儒成說、然世宗之立、與漢哀宋英二君預立爲儲君者不同、第以倫序當立、奉祖訓兄終弟及之文、入繼大統、若謂繼統必繼嗣、則宜稱武宗爲父矣、以下武宗從兄上可稱父、遂欲抹煞武宗一代、而使下之者未嘗爲父之孝宗、其理本窒碍而不通、故璠論一出、楊一清即謂此論不可易也、明史於毛澄等傳贊謂、諸臣徒見先儒成說可據、而忘乎世宗之與漢哀宋英不同、争之愈力、失之愈深、真屬平允至當之論、可爲萬世之法、矣」と論せるものが大に見るに足るのである。之を要するに此の論争はもと禮官の誤から起つたの

であつて張璠桂萇等は世宗の意を迎へたる佞臣ではあるが其の主張は正當である。世宗は武宗の後を繼いだのであつて孝宗の養子ではないのに、伯父を父といひ生父を叔父と稱せんことは古より例のないことである。古から支那人は典禮名分に拘泥し生死を顧みずして争論する風があり、殊に明代の學者に此の弊が最も多くして一小瑣事にも論争を惹起して數々朝廷を騒がし、遂に國政の頹廢を來たすに至つたのは眞に惜しむべきことである。

嚴嵩の專横 世宗の世に至りて明は北に俺答(Altan)の侵寇があり、東南に倭寇の難があり、また南は安南の分裂を抑制する能はずして國威が頗る衰へたが、帝もまた連年政を視ずして道教を崇び道士を信じて日に齋醮を事とし工作を務め、加ふるに嚴嵩が寵を得て専ら事を用ひ賄賂を貪り姦佞を親しみ諸弊を疏言するものを斥けたから、朝政が遂に紊るゝに至つたのである。嚴嵩は初め南京吏部尙書より入りて部禮尙書となり頻に帝に媚びて寵信を得、次で一五四二年武英殿大學士となりて内閣に入るや、益々威福を弄して大學士翟鑾を斥け山東巡案使葉經を杖殺したから、是より中外益々目を側て、嚴嵩を畏れた(一五四三年)。尋で吏部尙書許讚、禮部尙書張璧が文淵閣大學士となりて内閣に入りたるも、共に票擬に與かるを得ずして事は皆嚴嵩の獨斷によつたのである(一五四四年)。既にして許讚が罷めて去り嚴嵩が獨り相となるや帝微しく嚴嵩の貪横を覺り、また夏言を召し武英殿大學士に復

して内閣に入れた（一五四五年）。是より夏言が獨り機務を執つて嚴嵩を顧みざる爲め互に軋轢したが、後都御史曾銑が河套を復するを議し嚴嵩の爲めに譖せられて殺され、夏言がまた之に坐して罷められ尋で斬らるゝに及び、大權悉く嚴嵩に歸するに至つたのである（一五四八年）。時に嚴嵩の子世蕃もまた太常寺卿となりて權を專にしたが、會一五五〇年俺答が入寇して京師を犯し殺掠を恣にして去るや、廷臣に詔して敵を制する策を陳せしめたるに、刑部郎中徐學詩が「大奸國柄を乘るは亂の本なり、亂本除かずして能く外患を攘ふを得べけんや」といひ、上疏して嚴嵩を劾したるも帝は之を用ひずして却て徐學詩の籍を削り、次で御史王宗茂は嚴嵩が國に負ける大罪を論じて謫せられ（一五五二年）、後兵部員外郎楊繼盛もまた上疏して嚴嵩の十大罪五奸を論じ、嚴嵩の構ふる所となつて殺された（一五五五年）。かくて嚴嵩は益々專横を極めたから帝も漸く之を疑ひて大學士徐階を親任し、次で其の勸めによりて禮部尙書袁煒を戸部尙書武英殿大學士となし機務に與からしめたが、既にして御史鄒應龍が上疏して嚴嵩父子の不法を極論するに及び、帝は遂に嚴嵩を致仕せしめ世蕃を獄に下して其の黨與を黜謫した、時に一五六二年である。後三年世蕃が棄市せらるゝや嵩及び諸孫は皆民に下され、嵩は遂に故舊の家に寄食して死んだといはれて居る。嚴嵩の死後幾許もなく帝もまた在位四十五年にして死し、皇子載厚が位に即いた、之が穆宗つであつて時に一五六六年である。

俺答の入寇

是より先き蒙古は達延汗が再び諸部を統一して沙漠の南北を定め、其の勢甚だ盛にし

て屢々明の邊境を寇掠したるも後稍々兵を厭ふに至り、一五三三年幕を東方に移して土蠻即ち土默特（Tumet）と稱し、第三子札賚爾（Jalair）に漠北を與へ「之が今の喀爾喀（Kalka）部長の祖である」、第二子巴爾色（Paldi）に漠南の西半を與へ右翼の吉囊（Jimong）となして河套に居らしめた、吉囊は蒙古の最高爵であつて副王である。達延汗は在位七十四年にして一五四三年に死し、長子阿爾倫（Hohun）の子ト赤（Eodi）が嗣ぎて可汗となり、亦克罕（Alak Khan）と稱して漠南の東半を領し、其の子打來孫（Daraisun）に至りて宣府の北に移り、世々汗位を嗣ぎて其の部落を察哈爾（Olahur）といふたのである。かくて巴爾色には究弼里克（Gauplik）の俺答（Alban）の二子があり、究弼里克は嗣で吉囊となり河套に居りて鄂爾多斯（Ordos）部の祖となり、俺答は其の北に據りて諸部を併せたが、共に雄黠にして兵を好み相率ゐて明の諸邊を蹂躪したから、世宗は一五三六年劉天和を兵部侍郎となして三邊を總制せしむるに至り、劉天和は戦具を修め城堡を増築して邊備を固め屢々究弼里克を破つた。後究弼里克の死するや諸子相和せず河西に散處して其の勢大に衰へたが、俺答の勢が獨り盛にして屢々邊塞を犯し、一五四二年遂に大舉して朔州に入り廣武に至り大原より南下して到る處人畜を殺掠し、轉じて定襄、廣昌を掠め雁門の故道より陽和塞を出で、去つたのである。是に於て明は一

五四六年兵部侍郎曾銑をして陝西三邊の軍務を總督せしめたるに、此の秋俺答が十萬騎を率ゐて延安慶陽に侵入したから、曾銑は自ら兵數千を率ゐて塞門砦(陝西省延安府安塞縣北)に駐屯し、參將李珍をして馬梁山(陝西省榆林府北)の敵軍を擣かしむるや俺答は遂に引き還つた。曾銑乃ち河套を復さんことを建言し、明年塞を出で、套部を襲ふたから敵は敢て塞に近づかなかつたが、既にして俺答が將に套中に入り延寧を犯さんすと傳ふるものあるに及び、世宗は遂に嚴嵩の讒を信じ妄りに邊釁を啓きたる罪を以て曾銑を斬り、大學士夏言もまた之に坐して斬られたのである。一五四九年俺答は宣府に入寇して大同の總兵官周尙文の爲めに擊破されたが、翌一五五〇年春威寧海子に移駐して先づ大同を犯し、次で箭を諸部に傳へて八月に至り大舉して潮河川に循ひ南下して古北口に至るや、都御史王汝孝が薊鎮の兵を率ゐて之を禦いだから、俺答は別に精騎を遣はして間道より其の背後に出でしめ夾撃して大に之を破り、更に懷柔を掠め順義を圍み長驅して通州に至り白河の東に營し、兵を分ち四出して屋舎を焚毀し財寶を掠奪せしめたから近畿が大に震撼した。是に於て世宗は急に諸鎮の兵を集めて京師を守り、大同の總兵官仇鸞を大將軍に拜して諸路の兵馬を節制せしめたが、既にして敵兵が京師に薄まるや明の諸將は皆怯懦にして出で、戰ふものなく城を閉ちて固守したから、敵兵は焚掠すること三日に亘り大に金帛子女を掠めて白羊口(直隸省順天府昌平州西)に向つて去つた。仇鸞乃ち諸鎮の兵を率ゐて敵を尾し昌平に至りて敵の

東に返るに遇ひ其の兵潰亂するや、俺答は騎を放ちて之を蹂躪し遂に古北口より塞を出で、歸つた。次で仇鸞は密に使を遣はし貨幣を齎らして俺答の義子脱脫(Tukhta)に結び、俺答に勸めて貢馬互市を明に請はしめたから、明廷は之を許して一五五一年馬市を大同、宣府に開きたるに、俺答は羸馬を以て厚價を要求し與へざれば乃ち寇をなしたから翌年遂に馬市を罷めたのである。此の間仇鸞は寇を逐うて敗れ還り疽を病んで戰を督する能はず、大將軍の印綬を收めらるゝに及び憤恚して死んだが、時に仇鸞は敵に通じて國を破るものであると奏するものがあつたから、世宗は大に怒つて其の屍を戮し父母妻子を斬り其の家を籍沒した、俺答は之を聞いて引き去り是よりまた連りに大同、宣府、雁門等に入寇するに至つたのである。

俺答の歸服 俺答は穆宗の初年に至り其の孫把漢那吉(Bagamachi)の爲めに妻を娶り、次で之を奪つて他に嫁せしめたから把漢那吉が大に怒り、一五七〇年其の屬を率ゐ來りて内附するに及び、大同の總督王崇古が之を容れ上奏して安邊の策をなさんことを請ひ、廷議其の策を非とするものありしも高拱、張居正等が力めて王崇古の議を主張し、帝もまた義を慕うて來れるものなれば宜しく優撫を加ふべしといひ、遂に詔して把漢那吉を指揮使となし衣一襲を賜ふた。時に俺答は西の方西藏を掠めたが之を聞いて急に引き還り、諸部を給いて入寇したるも王崇古が諸道に檄し兵備を嚴にして之を禦い

だから遂に利を得ず、また俺答の妻イックカツレ一克哈屯(Yik Khatun)が中國の其の孫を殺さんことを恐れて日夜俺答を怨んだから、俺答は遂に悔ひ衆十萬を擁して邊境に至るや、王崇古が使を遣はして之を招諭し中國の叛人を縛して信を示さんことを要求するに及び、俺答は其の孫の全きを聞いて感激し使を遣はして封貢互市を請ひ、また趙全等五人の叛者を執へて來り獻するに至り、帝は王崇古に命じて把漢那吉を還さしめたから、俺答は大に喜び使を遣はして報謝して再び入寇せざることを誓つたのである。是に於て王崇古が上言して俺答を冊封せんことを請ふたから、一五七二年俺答を順義王に封じ其の居る所を名づけて歸化城といふた。次で俺答は西進して瓦刺を破り西藏の地を取るに及び、是より漸く喇嘛教を信じ喇嘛を招致して寺院を建立し、遂に殺を厭うて明に抗せざるに至つたが、一五八一年俺答が死して其の子ケシキヤチ黃台吉(Khung Tachi)が嗣ぎ、また喇嘛教を信じたる結果明に入寇することが稀になつたのである。

韃靼(北元) 汗世系

1 惠宗(元の順帝).....	一三六八
2 昭宗(愛猷識里達臘).....	一三六九
3 後主(脫古思帖木兒).....	一三七八
4 也速迭兒.....	一三八八
5 坤帖木兒.....	一三九三
6 鬼力赤可汗.....	一四〇二

7 本雅失里可汗.....	一四〇五
8 答里巴可汗(和寧王).....	一四一二
9 脫歡可汗(順寧王).....	一四一七
10 脫脫不花可汗.....	一四三九
11 田盛可汗(也先大師).....	一四五二
12 麻兒可兒可汗.....	一四五四
13 滿兒都可汗.....	一四六二
14 大元大可汗(達延).....	一四七〇
15 卜赤可汗.....	一五四三
16 打賚孫可汗.....	一五四八
17 長禿可汗.....	一五五七
18 徹辰可汗.....	一五九二
19 林丹可汗.....	一六〇四
20 孔果爾可汗.....	一六三四
順義王	
1 俺答可汗.....	一五七一
2 乞慶哈可汗(黃台吉).....	一五八一
3 褚力克可汗.....	一五八七
4 卜失兔河汗.....	一六一三

第十八章 交趾の叛服 倭寇の盛衰

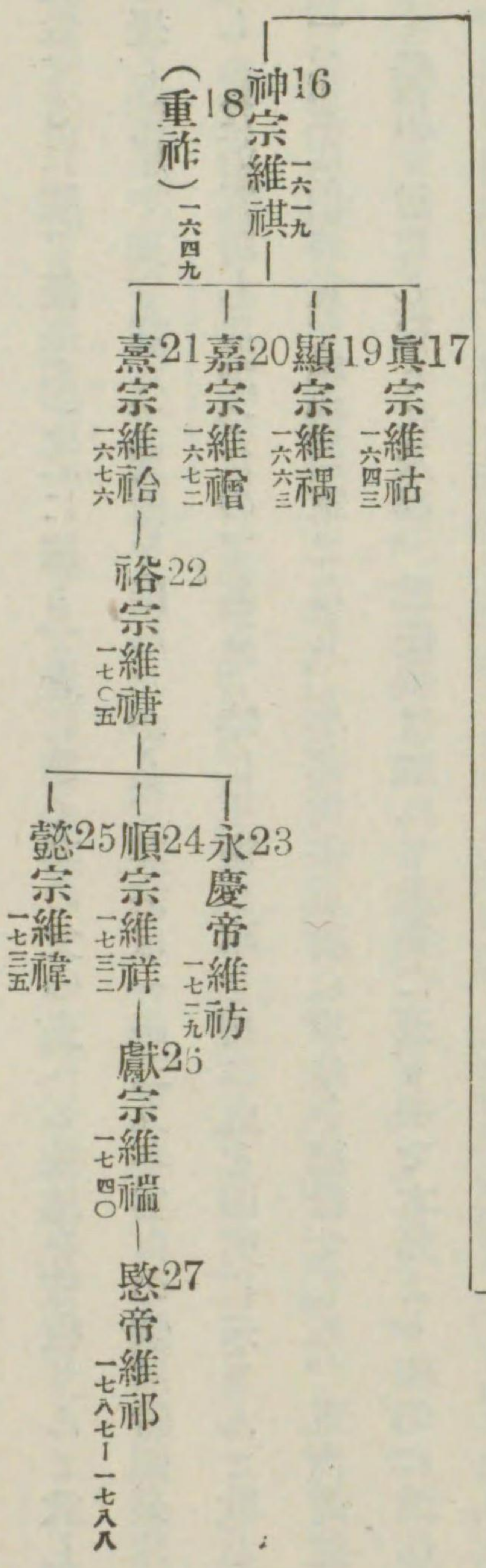
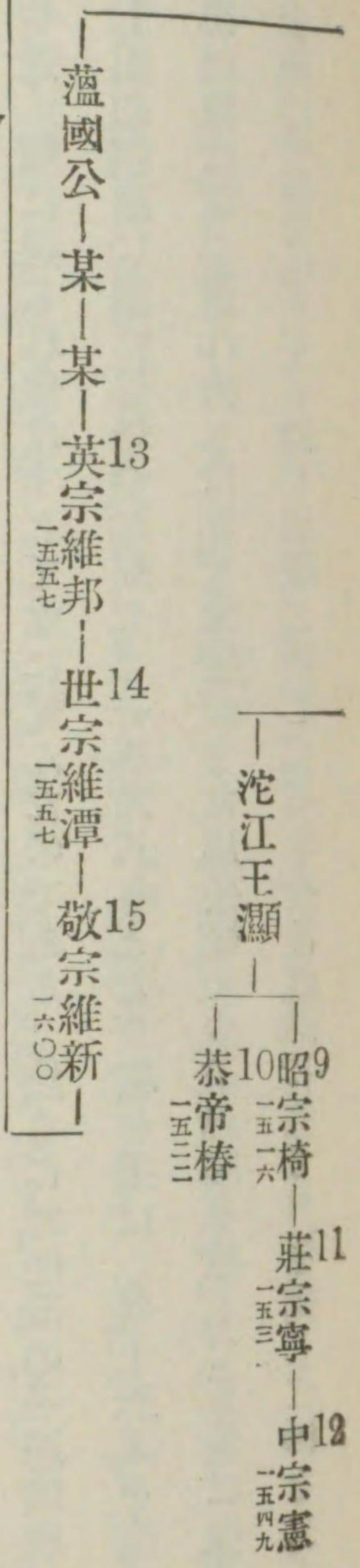
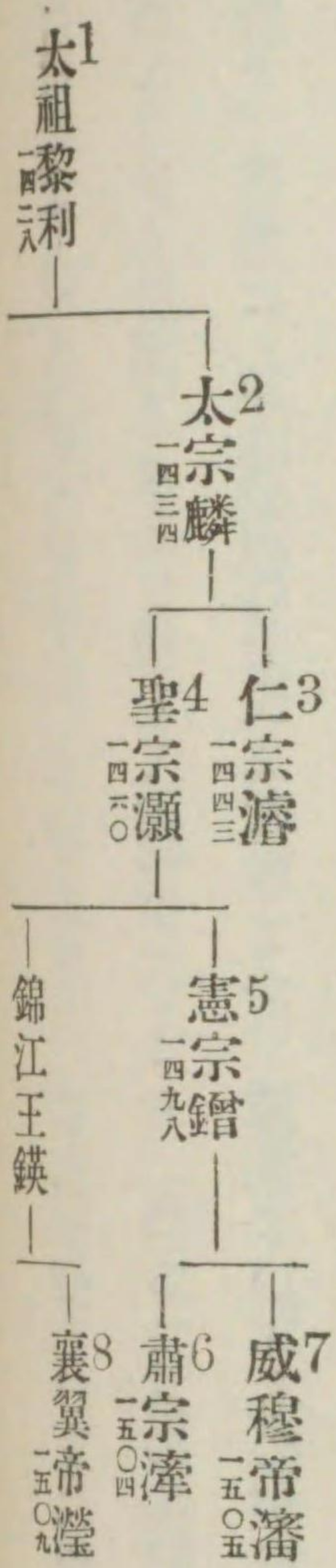
大越の盛衰 初め明の成祖は英國公張輔等を遣はし安南を征服して交趾布政司を置き、また陳氏の後を立てず令して其の國俗を改めさせたから、張輔等の歸るに及んで安南人が往々叛を謀るものあり、一四一八年俄樂(清化府 俄樂縣)の巡檢黎利もまた衆を煽動して亂を作し、鎮將李彬に破られて老ラオス（Lao）に竄匿したが、一四二四年また安南に還りて明軍を破つた。是に於て宣宗は一四二六年成山侯王通を遣はして之を伐たしめ、黎利と應平(交州府 應平縣)に戰つて敗れたから、更に安遠侯柳升を遣はして之を征せしめ、また黔國侯沐晟に命じ雲南より兵を引いて之に會せしめたが、柳升は倒馬坡(關南)に至り伏に遇ひ戰死して諸軍盡く没し、王通が黎利に通じ勸めて陳氏の裔陳暲を立てんことを明に請はしむるに及び、宣宗は遂に征伐の師を召還したのである。既にして黎利は陳暲が死し、陳氏の後は絶えたりと稱し、自ら之に代はらんことを請ふたから宣宗は已むを得ずして之を許し、命じて假りに安南の國事を署せしめたが、黎利は陽に明に服事して自ら皇帝と稱し國を大越と號し交都に都した、時に一四三一年である。黎利が死して其の子黎麟が立ち、一四三六年明の英宗の封冊を得て安南國王となり、後二傳して一四〇六年其の子黎灝が立ち聰明にして武略あり、内は制度を定め文教を布き賢臣を登庸し、

外は親征して古城を滅ぼし、老ラオスを降し、雲南を侵し、また緬甸を伐つて大に國威を揚げ中興の業を建てたから、國人は之を稱して聖宗といふた。然るに其の後國勢が漸く衰へ四傳して黎灝(一名暲)に至り、昏愚にして政紊れ士民また服さず、陳暲といふものが反を謀り詐つて陳氏の後と稱し遂に王を殺して自立したが、將軍莫登庸が大臣阮宏祐等と兵を起して陳暲を擊殺し、故王の姪黎椅(一名諱)を擁立して自ら兵柄を握り遂に異志を蓄ふるに至り、大臣鄭綏が別に故王の族子黎榜を立て、之を討ちたるも、莫登庸は鄭綏を破りて黎榜を捕殺し益々功を恃んで驕恣を極め、遂に王を逐うて其の弟黎椿(一名廣)を立てたが、次で一五二八年また之を殺して王位を篡ひ、幾許もなくして位を其の子莫登瀛に譲つたのである。

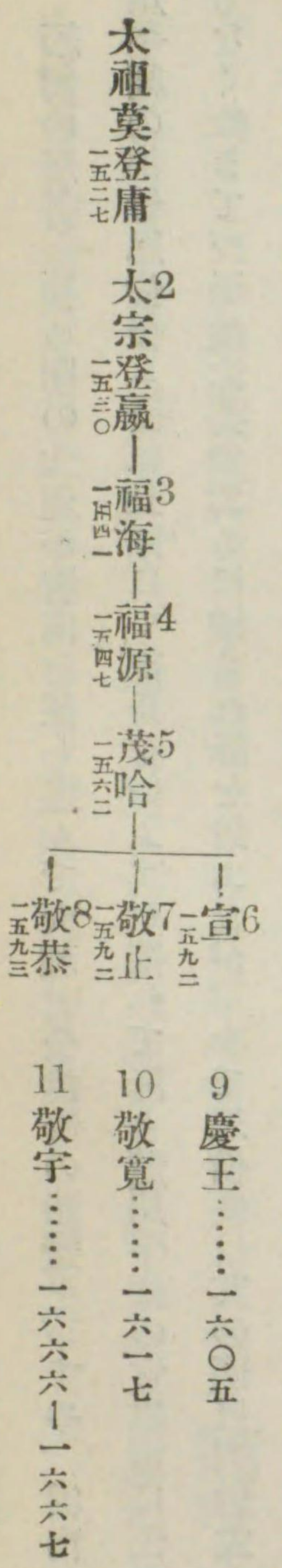
莫氏の篡立と安南の分裂 曩に黎椅が莫登庸の爲めに逐はるゝや清華に奔りて鄭綏に依つたが、後莫登庸は清華を攻めて鄭綏を奔らし黎椅を殺した。既にして阮宏祐の子阮淦が黎椅の子黎寧を奉じて清華に據り、老ラオスの後援を得て莫氏に對抗し、使を明に遣はして國難を告げ問罪の師を興さんことを請ふた。是に於て世宗は一五三七年右都御史毛伯温を遣はして莫氏を討たしめたるに、毛伯温が廣西に至るや莫登庸は之を聞き其の子弟及び諸部の頭目を率ゐて鎮南關(廣西省太平府 憑祥州西南)に入り、土地軍民の籍を上つり正朔を奉じて永く藩臣たらんと請ひ、毛伯温は之を朝廷に報じたから帝は大に喜び詔して

安南國を改めて安南都統使司となし、莫登庸の孫莫福海に安南都統使を授けて世襲を許し黎寧に清華等の四府を授けた、時に一五四一年である。是より安南は全く分裂して二部となり、莫氏は交都に據りて北方に君臨し、黎氏は清華に都して南方に王號を稱し、相攻伐すること六十餘年に及んだが、一五九二年黎氏の將鄭松(阮滄の女婿鄭檢の子)が兵を率ゐて莫登庸の玄孫莫茂哈を伐つて交都を陥れ、一五九五年遂に之を捕殺するに及んで莫氏は殆ど亡び、黎氏が再び安南を一統するに至つた。是に於て明の神宗は黎維潭に安南都統使を授けたが、鄭松は功を恃んで權勢を專にしたから阮滄の子阮潢が之を惡み、一六〇〇年其の封邑順化(Hue)に據りて占城の舊地を併せ國を廣南と號して鄭松に當り、鄭松は黎氏を擁して交都に據り尙ほ國を大越と號して之に對抗した、是に至りて安南は再び分裂して大越、廣南の二部となつたのである。

大越の王系(黎氏二十七王、三百六十年)



莫氏の世系(十一代、百四十一年)



第三期 第十八章 交趾の叛服 倭寇の盛衰

緬甸の形勢 初め明の太祖が雲南を征し進んで大理、金齒等の諸蠻を下すや、雲南の西南部なる麓川平緬の部酋思倫發（發は蠻語にて部長をいふ）が懼れて降り麓川平緬の宣慰司に任せられ、後幾許もなく叛きて西平侯沐英の爲めに破られ降を請ふたが、次で思倫發は其の頭目刀幹孟の爲めに逐はれて京師に赴き陳訴したから、太祖は兵を發し之を送還して麓川に居らしめ、また思倫發を宣慰司となした。既にして思倫發が死して其の子思任發が襲ぎ、傑黠にして兵を喜び、會々孟養木邦の二部が相仇殺するに乘じ侵略して之に據り、遂に悉く其の父の失へる故地を恢復せんと欲し、兵を率ゐて南甸を擾し千崖を突き進んで騰衝を陥れたから、英宗は一四三九年雲南の鎮將黔國公沐晟に命じて之を討たしめたが成功しなかつたのである。時に王振が事を用ひ威を四夷に示さんと欲し、帝に勸めて一四四一年定西伯蔣貴を平蠻將軍となし、兵部尙書王驥に軍務を總督せしめ、東南諸道の兵十五萬人を發して麓川を討たしむるに及び、思任發は敗れて孟養に至り次で木邦より緬甸に遁れたが緬人に執へられ、一四四五年遂に明に送られ食はずして途に死んだのである。然るに思任發の子思機發が孟養に竄匿して亂を作し明の招諭に應じなかつたから、一四四八年また王驥を遣はし兵十五萬を率ゐて之を討たしめ、翌年思機發は遂に遁れ去りたるも諸蠻がまた思任發の少子思陸を擁して孟養に據るに及び、王驥は遂に之を滅ばす能はざるを知り思陸と約して石を金沙江畔に立て界を劃して師を班した。後世

宗の時に至り孟養の部酋思陸の子思倫は曩に緬甸が明に通じて思任發を執へたるを怨み、木邦及び孟密の二部を糾合して緬甸に侵入し、其の國都阿瓦（Ava）を陥れて宣慰司莽紀歲を殺し其の地に分據したのである。緬甸は第十六世紀の初め強盛になりて阿瓦、阿羅漢（Arakan）を併せ、東は大越に通じ東北は明と相應じて邊境の諸部を併略したが、是に至り孟養部の破る所となりて國亡ぶるや、莽紀歲の子莽瑞體（Mou Taya Shweti）は遁れて南の方洞吾（Toungoo, Toung-gu）に至り、母家に投じて其の部酋に養はれ一五三〇年嗣立して其の地を有つに至つた。莽瑞體は英略あり南の方古喇（Kola）を侵略して之を併せ、當時印度及び馬來半島に來れる佛郎機即ち葡萄牙（Portugal）人を備ひ親兵となして四方を經略し、一五四〇年白古（Pegu）を併呑し、次で緬甸に侵入して阿瓦を恢復し、一五四四年全緬甸王の位に即きて莽噠喇弄（Mentara）王と稱し、一五四六年阿羅漢を討ち、また金沙江上流の地を平定して孟養、孟密、木邦、蠻莫等雲南の諸部を徇へ、更に東に轉じて老撾を略し暹羅を破つたのである。然るに莽瑞體は一五五〇年故の白古王の遺子に暗殺せられ、其の子莽應裏（Burankri Namchan）名 Bain Naung）が嗣々雄黠にして多智なり、一五八三年雲南に入寇して順寧（雲南省順寧府）を陥れたから、神宗は翌年劉綎を騰衝の遊撃となして之を討たしめ、大に緬甸軍を破り長驅して緬甸に入り阿瓦を陥るゝに及び、莽應裏は遁走し從父莽勺が出で、降つた。是に於て暹羅は明と約し緬甸の東邊を侵略

して舊怨に報ひ、是より緬甸の勢が衰ふるに至つたのである。後莽應裏が死して長子ナンダ・バイン(Nanda Bayin)が立ちしも、一五九九年其の弟ニャウン・メンダラー(Nyauung Nenda lah)が之を廢して自立し、一六〇一年再び阿瓦を恢復して都となし、また白古及び北方の諸部を征服した。次で一六三六年に至り白古がまた兵を擧げて叛き、遂に阿瓦に侵入して之を陥れ、是より後兩國は互に相攻伐するに至り、第十七世紀の後半には白古が緬甸を壓倒し、第十八世紀の前半には緬甸が白古を凌駕したのである。

暹羅の形勢 暹羅(Siam)は隋唐時代に眞臘の一部であつたが後分かれて暹(Shan)と羅斛(Lukok)との二國となつた、而して暹は北にありて土地瘠せて稼穡に宜しからず、羅斛は南にありて土地平衍にして耕作に適するのである。元の世に暹國は常に入貢したが後羅斛の勢強盛に赴き、暹を併せて暹羅斛と稱したが更に轉じて暹羅といふに至つた。國人はムアン・タイ(Muang-Thai)と稱して居る、タイ族の國の義であつて最近またムアン・サヤム(Muang Sayam)の古名を復するに至つた、即ちシヤム人の國の義である。かくて暹羅は一三四年羅摩直波智(Ramathibodi)一名プラ・ウトン(Phra-Ulong)王が位に即き眞臘即ち柬埔寨(Camboja)及び馬來半島の大部分を征服して領土を擴張し、一三五〇年都をメナム(Menam)河畔の猶地亞(Ayuthia)に奠め、次で二傳してプラ・ボロム・ラクサ(Phra Bo-

ron-raksa)王に至り一三七七年明の太祖の封冊を受けたのである。此の後位に即ける諸王は概ね庸主であつて漸く其の權力を維持するに過ぎなかつたが、歐羅巴人が始めて暹羅人と接觸して印度支那の近世史に重大なる影響を及ぼせるは實に此の時代であつた。一五一年プラ・ボロム・マラジャー(Phra Boion-maraja)王は滿刺加(Malacca)の叛徒を征服し、此の時恰も滿刺加の都市及び城寨を占領したる葡萄牙人と接觸して之と通商條約を結んだ。是より先き暹羅の國運は頗る微弱であつたが外敵の侵寇は稀であつたから、人民は國難を知らなかつたが會々緬甸王莽瑞體の來り侵すや、眞臘の人民は此の機に乗じて緬甸軍に投ずるに至り、暹羅人は殊死して防戦したるも一五四四年猶地亞が陥り、暹羅は遂に緬甸の屬領となつたのである。次で一五四七年莽瑞體が再び兵を率ゐて暹羅に侵入するや、時に葡萄牙人の猶地亞にあるものが暹羅軍を援けて防戦に力めたから、莽瑞體は遂に志を得ずして引き還つた。然るに莽瑞體の子莽應裏が立つて緬甸王となるに及び、また猶地亞を陥れ暹羅を併呑して再び其の屬領となしたのである。既にして暹羅の王族プラ・ナレット(Phra Naret)一名アビラージャー・プラメリット(Abhiraja Bramerit)が兵を擧げ、一五六四年遂に緬甸人を驅逐して一五六六年猶地亞を再興し、また北の方老樞の諸部を征服し、一五六九年明の封冊を受けて暹羅王となり、次で明と約して緬甸の東邊を侵略しマルタバン(Martaban)を陥れて舊怨に報ひた。時に眞臘王もまた暹羅と同盟し

て之を援けたが、暹羅軍の緬甸に進むに及び翻つて其の虚を衝き却て撃退されたのである。かくてプラ・ナレットは一五七九年全く緬甸軍を撃破して白古を略するや、鋒を轉じて眞臘を伐ち一五八三年其の國王を擒にして都ラウヱック(Lavak)を破壊した。既にして一五八七年白古及び眞臘に叛徒が蜂起するや、プラ・ナレットは之を討平し更に進んで阿瓦を伐たんとしたが、會々病に罹りて急に死し、是より暹羅の國勢が漸く衰ふるに至つたのである。

日明の交通 日本は將軍足利義滿が使を明に遣はして成祖と好を通じ、令を九州に下して海賊の明を侵すものを捕へしめ、また諸國の守護に命じ商賈をして其の物産を以て明に貿易せしめたから、是より日明の貿易が大に興り、明は浙江に市舶提舉司を設けて之を掌らしめた。然るに其の子義持が將軍となるや明と絶ち、また朝鮮、南蠻等の對馬に來寇せるものを撃退したが、其の死後將軍義教がまた僧道淵を遣はして明に聘するや、宣宗もまた報聘使を發して我が國に來らしめ、且つ海賊の禁絶を請うて勘合印信二百枚を贈つたのである。是より諸國の守護、五山の僧侶、兵庫及び堺等の商賈は皆其の信符を受け往きて貿易を營み、大内氏は幕府の命によりて勘合の授受を掌つた。是に於て大内、少貳、島津等の諸氏は皆外國貿易の要津に據つて富強を致し、九州中國沿海の諸地頭もまた明及び朝鮮に多く商船を通じたのである。次で將軍義政の時には使を明に遣はして銅錢を求め、九州中國

の士民もまた通商の利を獲んとして明に赴くものが多かつたが、應仁の大亂以後我が國は戰國擾亂の世となつたから、四方不逞の徒が恣に海外に航し身を商賈に投じ言を貿易に假りて利を貪るもの多く、遂に再び倭寇の害を生ずるに至つたのである。

倭寇の盛衰 世宗の時一五二三年に將軍義晴の使者瑞佐、宋素卿、大内義興の使者宗設と前後して寧波に至り、互に鬭争して宗設は瑞佐を殺し宋素卿を逐ひ、寧波、紹興を騒がして去つてより明は市舶提舉司を廢したが、後明の奸商等が官吏と結托して我が商民を給き其の物品を購うて直を償はなかつたから、我が商民等は憤怒してまた其の沿海を剽掠するに至つた。是より貿易の商民は變じて沿海の寇盜となり、其の徒多きは一萬に上り少きは數十に過ぎず、海上に泛びて貿易の利を求め、利なければ乃ち州縣を劫掠して人を殺し火を放ち剽掠到らざるなく、明人は畏怖遁竄して之を禦ぐことが出来なかつた。時に倭寇は八幡宮の文字を染めたる旗幟を立て、居たから、明人は之を八幡船と稱し、また其の輕捷勇敢なるを以て之を胡蝶軍とも稱したといふことである。是に於て明の奸民大盜もまた倭服を着て之に投じ、其の援助を得て沿海の地を攻略したから、倭寇の勢は猖獗を極むるに至つた。世宗は都御史朱統に命じて浙江の巡撫を領し兼ねて福建の沿海諸府を統制せしめたるに、朱統が海禁を嚴にしたる結果閩浙の大姓中倭人に通ずるものは利を失ふに至り大に之を怨んだ、既にして巡按御史

周亮の議により朱統の官を奪ひ其の擅殺の罪を劾するに及び朱統は遂に自殺した、時に一五四九年である。是より浙江に巡撫を置かざるもの四年に及び海禁がまた弛んで擾亂が益々滋くなつた。一五五二年倭兵が臺州に寇して大に象山、定海の諸地を掠め浙東の地が騷擾したから、廷議また巡撫を設くるに決し僉都御史王忬を以て之に任じ軍務を提督せしむるや、王忬は浙に至り參將俞大猷、湯克寬に任じて守禦の備をなしたるも、賊は既に蔓延して頓に之を撲滅することができなかつた。一五五三年王忬が大に倭兵を普陀諸島に破るや、倭兵は潰散して更に温臺、海寧、紹興の各地を亂し、湯克寬が兵を率ゐて討伐するに及び移つて蘇州、松江の諸郡を犯し、餘衆はまた嘉定、太倉を圍み過ぐる所を殘掠したが、俞大猷等は邀へ戦つて其の兵を殺し、次で倭兵がまた獨山に敗れて東遁するに及び江南は稍々靜穩になつたが、殘兵數百人が崇明に據り湯克寬の爲めに圍まれて遂に圍を潰し出で、蘇州、松江の各縣を掠めたのである。一五五四年倭兵が太倉より圍を潰して出で民舟を掠め海に入つて江北に赴き大に通州の諸縣を掠め、また青徐の界に漂入せるものがあつて山東が大に震撼したから、世宗は徐州の兵備副使李天寵を以て王忬に代らしめたるも、天寵は其の任に適せず王忬が去つて浙の地はまた騷擾した。既にして倭兵は海鹽より嘉興に赴いて利あらず更に乍浦に入りて海寧の諸縣を侵し、また海に入つて崇明に至りまた蘇州に薄まり嘉興を掠めた。次で蘇州の倭寇は轉じて松江を掠め俞大

猷の爲めに破られたが、嘉興の倭兵は還りて採洶港、拓林等の諸處に屯し參將許國等の軍を破つた。一五五五年拓林の倭兵は舟を奪つて乍浦、海寧を犯し攻めて崇徳を陥れ、轉じて塘西、新市、橫塘、雙林、烏鎮、菱湖等の諸鎮を掠めたるも、李天寵は手を束ねて策の出づるなく唯人を募つて自ら衛るのみであつた。時に江北の倭兵もまた淮揚の諸州を犯したが、大に俞大猷の爲めに王江涇に破られ皆舟に乗じて遁れた、之を倭寇ありてより第一の戦功となすのである。既にして倭兵が海洋より來りて蘇州の各地を犯し、また紹興より南京を衝き其他沿江の諸縣も皆其の侵掠する所となつたのである。是に於て一五五六年世宗は工部尙書趙文華を以て右副都御史を兼ねて福建江蘇の軍務を總督せしめたが、趙文華は貪婪にして功罪を顛倒したから諸軍は益々解體し海寇の勢は益々蔓延するに至つた。後幾許もなく胡宗憲が趙文華に代つて軍務を總督するに及び、計を以て海寇の主領徐海を誅するや浙江江蘇の亂が略々平らぎ、次で舟山の倭兵もまた俞大猷の力によりて平定するを得たのである。是より先き徽州の汪直といふものが肥前の平戸に來り寓して屢々海寇を導き、一五五七年また衆三千人を糾合して寧波、岑港に入り大に四境を掠めたが、胡宗憲が遂に汪直を招降して之を殺したから其の黨大に恨み、一五五八年潮州を侵し福州に寇し尋で臺州を掠めたがまた胡宗憲の爲めに破られた。時に浙江、江蘇の倭患は稍々息んで福建、廣東の倭寇は勢益々猖獗となり、一五六二年同安、長樂、漳州、

泉州の諸處を犯し興化府を陥れて平海衛(福建省興化府莆田縣東)に據り、また倭兵六千餘人が潮州等の地を犯したのである。是に於て一五六三年副總兵戚繼光が江浙の兵を率ゐて福建に至り、兪大猷等と共に倭兵を伐つて平海衛を陥るゝに及び、福州以南の亂は漸く平らいだ。既にして倭兵が仙遊を圍むや戚繼光がまた大に之を破つて悉く閩寇を平らげ、其の逸出して廣東、潮州に至つたものをも殺戮したから、是に至りて倭寇の患が漸く熄んだのである。然るに其の殘黨は尙ほ臺灣に據つて時々南海に出没したが其の勢は甚だ振はなかつたのである。

第十九章 萬曆朝鮮の役 滿洲の興起

明及び朝鮮の疲弊 明は世宗の世南倭北虜の侵寇を被ふりて國力疲弊し、穆宗(世宗の子)の時に及んで倭寇が漸く熄み俺答もまた明の封冊を受けたが、神宗(穆宗の子)の時に至りて一五八三年愛新覺羅(Aisin Gioro)氏の太祖奴兒哈赤(Nurhachin)が赫圖阿拉(Hotokala) (盛京省 興京)より兵を起したから、明はまた東北の邊境に一大強敵を生ずるに至つたのである。然るに明の君臣は未だ愛新覺羅氏の畏るべきを知らず、晏然として意に介せざりしも、一五九二年我が豊臣秀吉が朝鮮を征するに及び、遂に朝鮮の請を容れ之を援けて我が軍と戦ひ、益々國力を消耗するに至つた。是より先き朝鮮は太祖李成桂が明の餘威を籍りて王位に即いたから、之に事ふること甚だ厚く、次で明の成祖が都を北京に遷すに及び國都が相近づきたるを以て兩國の關係は愈々親密を加へ、程朱の儒學また行はれて文化の盛なるは新羅、高麗の二代よりも勝さつたが、燕山君愷(太祖六世の孫)の王位に即くや暴虐にして國內亂れ其の弟中宗憚に至りて虐政を改めしも倭寇の侵掠を受けて州縣疲弊し、中宗の孫宣祖昞の時に及び我が豊臣秀吉の侵伐に遭ひ、遂に京城を棄て、走り援を明に請ふに至つたのである。

第一朝鮮の役 豊臣秀吉は早くより明を征服せんと志し、一五八七年九州を征するや書を對馬の宗

義智に與へ命を朝鮮王宣祖に傳へしめて其の入朝を促し、若し聽かずんば之を征伐すべしと告げしめ、一五八九年秀吉更に義智等を朝鮮に遣はして其の來聘を促がし、翌年其の使者の至るや之を聚樂第に引見し書を宣祖に與へて征明の先驅をなすべしと命じたるに、宣祖は之を見て虚喝となし敢て命に従はなかつたから、一五九一年秀吉遂に征討の令を發し沿海諸國に命じて戰艦數百艘を造らしめ且つ糧米を準備し、關白職を其の姪秀次に譲りて庶政を決せしめ、自ら太閤と稱して軍國の政を聽斷した。かくて一五九二年秀吉は諸軍の部署を定めて九軍を編成し、宇喜多秀家を元帥となし、小西行長加藤清正等を以て先鋒となし、諸軍合せて十五萬八千餘人を率ゐて發せしめ、別に九鬼嘉隆、藤堂高虎等の水軍九千餘があつた、而して秀吉は親ら肥前の名護屋に屯營して諸軍を督し、徳川家康、前田利家、上杉景勝、蒲生氏郷、伊達政宗等は兵十餘萬を以て行營を衛つたのである。是に於て行長は先づ釜山に上陸して慶尙道を徇へ、清正は釜山より進んで慶州を取り行長と一たび忠州に會し、また路を分ちて進んだ。時に朝鮮人は無事に忸れて軍事に長じなかつたから、我が兵の至るに及び敢て拒ぐものなく、宣祖は敗報を得て出奔し平壤に遁れたのである。既にして元帥宇喜多秀家は京城に至りて諸軍皆會し、更に諸軍を部署し分ちて各道に向はしめた。是に於て清正は進んで咸鏡道に至り朝鮮の二王子臨海君及び順和君を虜にし、行長は大同江を渡りて平壤に迫まつた、時に宣祖は平壤にあつた

がまた義州に逃れたから、行長は遂に平壤を取り書を宣祖に送りて我が出師の理由を述べたるに、宣祖は急を明に告げて援を請ふに至り、神宗は遼東の副總兵祖承訓に命じて之を救はしめた。然るに祖承訓は平壤を取らんとして行長と戦ひ大に敗れ、纔に身を以て免かれ歸り明廷は之が爲めに震駭したが、我が水軍は甚だ振はずして朝鮮の將李舜臣の爲めに巨濟洋に於て破られ、陸軍と行動を共にすることができなかつたのである。時に明の兵部尙書石星は策を建て説客を募りて和を日本に請はしめ、日本軍の攻撃を緩にして策を其の間に施さんと議し、無頼の徒沈惟敬を行長の營に送りて和を議せしめた。行長は之を信じて和議を約したが明はもとより平和を求むるの意なく、李如松を以て防海禦倭總兵官となして朝鮮を救はしめ、一五九三年李如松が來りて行長を平壤に攻めて之を破り、行長は京城に退き諸軍もまた守を撤して京城に向ひ明軍は之を追撃したが、小早川隆景が碧蹄館(京畿道礪波の北)に要撃して大に之を破つたのである。是に至りて明は始めて和を講せんと欲し行長もまた秀吉に勸むる所あつたから、秀吉は名護屋に於て明使沈惟敬を引見し和約七條を約した。即ち(一)明帝の女を以て日本の後妃となすこと、(二)日本明兩國の通聘を復すること、(三)兩國の大臣誓詞を交換すること、(四)日本は朝鮮の四道を取りて其の他の四道と國都とを還附すること、(五)朝鮮は王子及び大臣一兩人を日本に質となすこと、(六)生虜の二王子を還附すること、(七)朝鮮の權臣をして誓詞をなさしむ

ること等である。かくて秀吉は二王子を朝鮮に還附し、小西如安をして明使と共に其の國に赴かしめ、また朝鮮出征の諸將を召還し行長等を止めて之を成らしめた、此の役を我が國にては文祿の役といふのである。

第二朝鮮の役 秀吉は明との和議を必ず成立するものと信じたるに、沈惟敬が中間に居りて辭令を變更し、秀吉は明主の冊命を希望して居ると明廷に告げたから、一五九六年明使楊方亨が沈惟敬と共に封冊、金印、冕服を携へて日本に至り秀吉に謁した、蓋し小西行長が沈惟敬と結托せる形跡あり、小西如安も使命を全ふするを得なかつた爲め是に至つたのである。かくて僧承兌が封冊を秀吉の面前に讀み「封爾平秀吉、爲日本國王、賜以金印、加冠服」といふ語があつたから、秀吉は大に怒りて直に明使を逐ひ返し再征の命を下した。一五九七年秀吉はまた外征の師を發して小早川秀秋を元帥となし、毛利秀元、宇喜多秀家を之に副たらしめ、諸軍の部署は概ね前役の時の如くであつた。是に於て加藤清正が先づ進んで機張、梁山、西生浦を降すや、宣祖は懼れて出奔し朝鮮がまた亂れたのである。明の神宗は之を聞きて兵部尙書那玠を薊遼の總督となし、麻貴を備倭大將軍となし、楊鎬を經略となして水陸の兵を率ゐて往援せしめた。此の時我が水軍は頗る優勢であつて朝鮮の將元鈞を破り、開山島を取つたから京西の水道通せざるはなく、我が軍は水陸並び進んで南京に薄まり清正行長

が協力して之を抜き、次で我が軍は全州を占領して全羅道を平げた。時に明兵は退いて京城を守り漢江の險に據つたから、秀家行長等は之に向はんとしたるも冬季に向ひたるを以て諸將は退陣し、清正は蔚山を守り行長は順天を保ち島津義弘は泗川に駐屯した。既にして明軍は蔚山を攻め清正等は城中にありて糧食に窮したるも艱難を嘗めて之を固守し、一五九八年秀秋等の諸將が來り援ふに及び明軍は圍を解いて去り、清正が追撃して大に之を破つた。是に於て神宗は楊鎬を罷め萬世德をして之に代はらしめたが、明年義弘を泗川に攻めてまた大敗したのである。然るに此の年八月秀吉が病んで死し、遺命して外征の師を班へさしめ、石田三成、淺野長政等が朝鮮に赴いて計を傳へたから、諸軍相前後して日本に還つた、我が國にては此の役を慶長の役といふのである。

朝鮮役の結果 豊臣秀吉の朝鮮征伐は直接我が國に何等の得る所がなかつたが、我が日本國民の勇敢なることを外國に示して大に國威を宣揚したることは論ずるまでもない。然かも其の我が國の生産上に及ぼしたる影響の一は陶器製造法の輸入であつて高島燒、上野燒、八代燒、有田燒、萩燒等は皆外征諸將の伴ひ歸れる朝鮮人によりて開かれたるものであつた。而して活版術もまた此の時朝鮮より輸入されたのである。其の他の工業にも當時朝鮮より傳來せるものが少なからざるべく、我が國民の習俗の上にも必ず多少の影響を被つたこと、思はれる。此の時朝鮮は我が國の爲めに全國を蹂躪せ

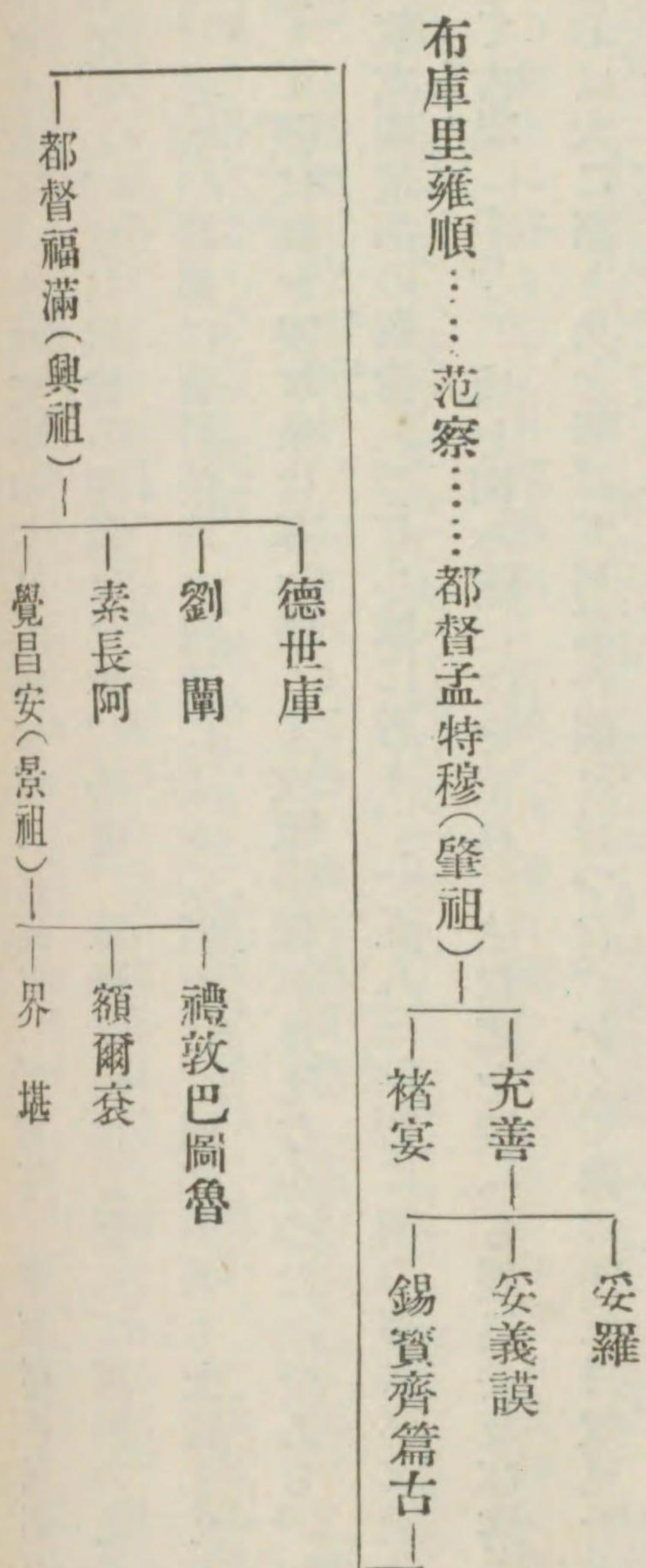
られ、また明軍の徵發殘暴を被ふつて多くの生命と財産を消失し、國力が大に衰ふるに至つたのである。支那の歴史にては此の役を萬曆朝鮮の役（萬曆は神宗の世の年號なり）と稱し、前後七年に明は師を喪ふこと數十萬、餉を糜すること數百萬に上り、是より財用缺乏して國力大に衰へ遂に滅亡の一原因をなすに至つたのである。

清の太祖の興起 金の滅亡以來通古斯族は久しく沈淪してまた聞ゆるものもなかつたが、明の末に當り滿洲より愛新覺羅 (Aisin Gioro) 氏が起つて遂に大業をなすに至つた。愛新覺羅氏は世々朝鮮の北境長白山の北なる寧古塔 (Ninkuta) の西南方約五十餘里、瑚爾哈河の源なる勒富善河の西岸鄂多里 (Otori) に居住したが、明の英宗の領に至り呼蘭哈達 (Hulan Hada) 山下の赫圖阿拉 (Hotokala) 即ち今の興京に移りてより部落漸く蕃殖し、後百數十年を経て神宗の萬曆年間に至り、奴兒哈赤 (Nurha-či) が出づるに及び始めて大に興つたのである。是より先き奴兒哈赤の祖父覺昌安 (Giao-čung-an 景祖) は赫圖阿拉到に居り、六子ありて各々寧古塔貝勒 (Ninkuta Bala) と號し城を築いて分居し、就中第四子塔克世 (Taksi 顯祖) が勇略ありて愛新覺羅氏を襲ぎ、一五五九年奴兒哈を生んだ。奴兒哈赤は長じて武略父よりも過ぎ蓋世の氣があつて聰睿具勒と稱せられた。當時滿洲には別に蘇克素護河、渾河、完顏、棟鄂、哲陳の五部があり、長白山附近には訥殷、鴨綠の二部があつた、之が明の建州衛

の地である。また東海即ち日本海方面には渥集、瓦爾喀、庫爾喀の三部があつた、之が明の野人衛の地である、また屬倫の四部は葉赫、哈達、輝發、烏拉と稱して滿洲の北に當り、明の海西衛の地である。是等の諸部は皆居住地の河流によりて名づけ、城郭があり土着して射獵を事とし、各々一方に割據して強は弱を凌ぎ衆は寡を侵して攻戰爭奪が止まなかつたのである。初め尼堪外蘭 (Nikanwai-lan) が蘇克素護部の圖倫 (Tulun) 城に居り、一五八三年密に明の總兵李成梁を誘うて沙濟城を攻め勢に乗じて古勒 (Gulo) 城を圍み遂に之を陥れ、また之を援へる覺昌安及び塔克世父子を殺したから、奴兒哈赤は大に怒り兵を擧げて尼堪外蘭を討つた。かくて此の年五月奴兒哈赤が父祖の遺甲十五副を以て兵を起し、圖倫城を攻むるや尼堪外蘭は遁れて嘉班城に入りたるも、再び奴兒哈赤の兵を受けて遠く遁れ城を鄂勒歡に築いて之に居つた。是に於て奴兒哈赤は先づ傍近の諸部に向ひ、一五八四年棟鄂部の翁鄂洛城を攻め、一五九五年渾河部の界藩城、棟嘉城、薩爾濟城を攻め、一五八六年蘇克素護河部の爪爾佳城、渾河部の貝渾城、哲陳部の托摩和を攻めて皆之を下し、遂に諸部を越えて尼堪外蘭を其の居城に襲ふたから、尼堪外蘭はまた遁れて撫順に入つたが明人は之を執へて奴兒哈赤に送り、毎年八百兩の輸送を約して和好を通じたのである。奴兒哈赤は一五八七年また哲陳部の二城を取り、一五八八年また完顏部に克ちて悉く滿洲の五部を略取し、次で一五九一年兵を派して長白山の鴨綠部を征す

るに及び、遠近の諸部は益々懼れて奴兒哈赤の志の小ならざるを知り、力を協せて之を圖つた。かくて一五九三年扈倫の四部を初め蒙古の科爾沁、錫伯、卦勒察の三部及び長白山の所屬なる珠舍里、訥殷二部の兵合せて三萬が三路より來り侵すや、奴兒哈赤は之を古塔山に邀へ撃つて其の軍を破り、軍威大に振ひて此の年遂に珠舍里、訥殷二部を滅ぼし、次で一五九九年哈達部を降し、一六〇七年輝發部を平らげ、一六一三年烏拉部を征服し、一六一六年諸貝勒の奉戴によりて汗の位に即き、國號を建て、後金といひ天命と改元した、之が清の太祖である、時に年五十八。

愛新覺羅氏世系



明清の衝突

太祖は更に兵を發して東海の三部及び黑龍江の索倫部を征服し、次で南征して葉赫部に向つたが、葉赫は明の援を恃みて服さず明もまた葉赫を以て北關となしたから、太祖は明兵が後を擣くを恐れ遂に意を決して明を犯し、撫順以下の諸城を下し進んで鴉鶻關より清河城を陥れ、一六一八年葉赫を討つて二十餘寨を陥れたから、明の神宗は楊鎬を經略となし諸將を率ゐて太祖を伐たしめ、朝鮮王光海君もまた兵を出して之を援けた。時に楊鎬は兵二十萬を瀋陽(盛京省奉天府)に集めて四路より進入したが、太祖は一六一九年拒ぎ戦つて之を渾河畔に破り、大に甲仗駝馬等を獲た、此の一戦は實に明清興亡の運命を決せるものであつたのである。次で太祖は開城を抜き鐵嶺城を下した遂に葉赫を滅ぼした、是に至りて其の疆域は西は遼河に及び南は朝鮮に接し、東は日本海に抵り北は黑龍江に達したのである。既にして明軍の敗報北京に達するや神宗は楊鎬を執へて罪に處し、熊廷弼をして之に代はらしめたが、熊廷弼は固く守りて妄に戦はず滿洲兵もまた來り攻めざるもの一年餘に亘つた。然るに一六二〇年神宗が死して光宗が立ち在位僅に一ヶ月にして死し熹宗が嗣いで立つや、熊廷弼を

怠みて之を劾するものあり熊廷弼また罷めんことを請ふに及び、袁應泰を以て之に代へたが袁應泰は吏務に通ずるも將才でなかつたから、明の兵備は益々衰へたのである。一六二一年太祖は大軍を率ゐて瀋陽を攻め總兵賀世賢等を斬りて之を陥れ、且つ遼陽の援兵を破り勢に乗じて遼陽を攻むるや、袁應泰は力を盡くして之を禦いたが城遂に陥り火を城櫓に放ち劍印を佩びて焚死した。是に於て遼東の三河等の五十寨及び河東の大小七十餘城は皆風を望んで降り、太祖は都を遼陽に遷したのである。熹宗は之を聞きて大に驚き再び熊廷弼を起し遼陽を經略せしめ、熊廷弼は三方布置の策を建て廣寧、登萊に巡撫を設け自ら山海關にありて節制した。然るに東寧の巡撫王化貞が熊廷弼の節制に従はなかつたから、太祖は之に乗じて一六二二年遼河を渡り廣寧に入りて王化貞を走らし、錦州、大小凌河、杏山等の四十餘城を下し進んで義州に克ち、一六二五年また都を瀋陽に遷して盛京と號した、今の奉天府が是である。廣寧の守を失ふや明廷は王化貞を逮へ併せて熊廷弼を罷め、王在晉をして遼東を經略せしめたが、既にして兵部尙書兼東閣大學士孫承宗を以て王在晉に代へた。孫承宗は力を兵備に致し袁崇煥をして寧遠城を築かしめ且つ諸將に命じて錦州、大小凌河等の諸城を守らしめ、殆んど遼河以西の舊地を復したるも、太監魏忠賢が其の功を嫉んで之を排し高第を以て孫承宗に代はらしめ、高第は悉く諸城の守備を撤して退守を事としたが、獨り袁崇煥は寧遠にありて其の命を奉じなかつたのである。

ある。是に於て太祖は一六二六年大舉して遼河を渡り寧遠に至りて袁宗煥を攻めたるも、袁宗煥が固く守りて抜く能はず、太祖は重傷を負ひ遂に圍を解いて瀋陽に還つた。太祖は始めて兵を起してより以來、戦へば勝たざることなく攻むれば取らざることなかつたが、獨り寧遠城を下すことができなかつたから甚だ憚ばず、此の歳八月傷痍を病んで遂に死んだのである、時に年六十八、第四子皇太極が嗣いで立つた、之が太宗である。

第二十章 東林の黨議 明の衰微

東林の黨議の起原 明は一五七三年穆宗が死して其の子神宗(名は翊鈞)が立ち、其の初年は大學士張居正が政を執りて頗る治蹟の見るべきものありしも、張居正の死後幾許もなく朋黨の争が起つて朝政はまた紊るゝに至つた。明は太祖以來力めて言路を開き自由に時事を論ずるを待せしめ、百官布衣を問はず皆上書して國事を可否するを許したから、英宗以後宦官の專横、權臣の跋扈甚しくして朝政大に紊るゝや其の得失を論ずるものが頗る多かつたが、殊に神宗の時に至り胡居仁、陳獻章、王守仁等の感化を受けて宋儒の義理の學を崇奉する學者は盛に時事を論辯し、互に黨を樹て、相排擠するに至つた、之を東林の黨議といふのである。時に神宗の皇后王氏に子がなかつた爲め、帝は貴妃鄭氏を寵して其の生める所の福王常洵を立てんと欲し、久しく太子を定めなかつたから其の非なるを論ずるもの多く、吏部郎中顧憲成もまた上疏して之を諫め其の職を罷められた、時に一五九四年である。顧憲成は剛直にして學識があつたから郷里無錫に歸り、宋の楊時の建てたる東林書院を修めて弟允成及び同志高攀龍等と共に學を其の中に講じた。時に士大夫の用ひられずして林野にあるものが其の風を聞いて之に響附し、往々時政を諷議し人物を裁量するに至り、朝士の之を慕ふものがまた遙に相應和し

たから、是より東林の名が大に著はれたるもまた之を忌むものも多かつた。次で鄒元標等が京師に首善書院を起して學を講じ、趙南星もまた考功郎中を罷めて郷里に還り同志を集めて學を講ずるや、天下の清流の士は多く之に従ひ自ら氣を負うて政府と頡抗するに至つた、之を東林の黨議の始となすのである。

黨派の争 顧憲成はまた巡撫鳳陽都御史李三才と親交があつたから、後内閣に缺員があつて李三才を薦めたるものありしに、之を忌むものが頗る多くして議論數月に亘るや、顧憲成は書を宰相葉向高に貽りて盛に李三才の廉直を稱し、また書を吏部尙書孫丕揚に貽りて李三才を薦めたから議者が益々譁しくなつた。是より先き給事中王元翰が劾せられて朝を去つたが論者は尙ほ息まなかつたから、王元翰を助けたるものは往々李三才を扶くるに至り、黨勢が日に盛になつたのである。時に國子祭酒湯賓尹が諭德、顧天峻等と各々朋徒を收召して時政に干預し宣崑黨(湯賓尹は宣城の人、顧天峻は崑山人なり、故に此の名あり)といはれたが、また开詩教、周永春等の率ゐる齊黨、官應震、吳良嗣等の魁たる楚黨、姚宗文、劉廷元等の操縦する浙黨があり、力めて己等に異なるものを排斥するを事として喬應申、劉國縉等と共に李三才、王元翰を攻め、顧憲成を併せて東林黨と稱して之を排斥した。是に於て葉向高は群情を調停せんと謀り却て其の黨魁と稱せらるゝに至つたが、神宗は一も問ふ所なく

して之を放置したから益々黨を樹て、相反目し、朝廷は関然として黨争の府となつた、既にして孫丕楊が主となりて大に京官を淘汰し、年例を以て喬應申等を外に出し劉國縉等を貶したから失意者は相繼で孫丕楊等を攻めた。孫丕楊は賢を薦めて國に報せんと欲し顧憲成、趙南星、鄒元標、高攀龍等を薦めたるも用ひられず、黨人は東林を指して黨となし争うて顧憲成を以て口實となし、或は顧憲成を効するものあり、或は東林の爲めに辯護するものありて論争が益々甚だしくなつたのである（一六一一年）。時に葉向高は其の志の行はれざるを以て病と稱して出せず、また孫丕楊が死んだから閣中に人なく、六卿は刑部尙書趙煥のみであつたが尋で吏部尙書を兼ねるに及び東林を攻むるものは趙煥が東林と善からざるに乗じて之を助け、黨人の勢益々盛にして賢士は皆朝を去つたが神宗は之を顧みずして荒怠益々甚だしく、二十餘年間未だ嘗て一たびも大臣を引見せることなく、中外に缺官あるも多くは補任しなかつたから諸政停滯して言ふに堪へざる有様となつた（一六一三年）。かくて葉向高は宿望を以て相位に居り忠誠を盡くすも雖も、黨人の爲めに効せられて罷め（一六一四年）、次で方從哲が相となれるも黨人事を用ひて朝に正人なく、群少狎進して綱紀全く紊亂するに至り、次で挺擊、紅丸、移宮の三案の紛議を生ずるに及び黨争が益々激烈となつたのである。

挺擊の案 初め神宗は鄭貴妃を寵して其の生む所の福王常洵を立てんと欲して儲位を定めなかつた

が、朝臣が之を諫めて庶長子常洛（恭妃王氏の出）を立てんことを請ふに及び、一六〇一年遂に常洛を立て、太子となし、次で一六一四年福王をして國に就かしたるに、翌年薊州の張差といふものが棗木挺を持つて太子の居る慈慶宮に入り、守門内侍を撃傷し殿前檐下に至りて執へられた。時に神宗は太子を遇すること薄く、中外太子の爲めに憂ふる際であつたから、舉朝震駭し挺擊者を訊問したるも要領を得ず、尋で獄中に就て糺し始めて劉威、龐保、馬三道、李守才等の使嗾せるものなることを知るに至り、劉威及び龐保は鄭貴妃の宮に仕ふるものであつたから、人は多く貴妃の意を受け太子を弑して福王の地をなさんとするものなるを疑ひ、貴妃は哀を太子に請うて他意なきを明かにしたが、非東林黨は其の辭貴妃に連なるを以て不問に附せんとし、東林黨は事太子に關するを以て糺彈を盡くすべしと主張して議論が二派に分かれたのである。是に於て太子は神宗に請うて之を救解し、神宗また太子の確立を保證して廷議の紛紜を戒め、張差を磔殺し劉威、龐保を斬り馬三道、李守才を流して事漸く已むを得た、之を挺擊の案といふのであつて時に一六一五年である。

紅丸の案 神宗は在位四十八年にして一六二〇年死し、太子常洛が位に即いた、之が光宗であつて方從哲が政を執り葉向高がまた召されて入閣した。然るに光宗は即位の後數日にして病に罹り太醫の藥を服したるも効なく、鴻臚寺丞李可灼の仙方あるを聞き之を召して其の進む所の紅丸を服し、稍

と快暢になつたから日晡また命じて一丸を服したるに明日味爽に至りて遂に死んだのである。時に寵姫李選侍が帝の疾に侍して乾清宮に居り宦者魏忠賢と圖つて皇子由校を挟み權を握らんとしたが、御史楊漣が急に内閣諸臣と入臨し選侍に白して由校を出し、文華殿に至りて太子の位を正し尋で慈慶宮に入りて位に即かした、之が熹宗である。既にして刑部主事王之寀が挺撃の案を追理して争端を開くに至り、次で禮部尙書孫慎行がまた李可灼の太醫にあらずして藥を進めたるを以て閣臣方從哲等の罪となし、遂に方從哲を劾するに及んで論争また起り、東林黨は李可灼の毒弑を疑ひて其の罪を斷せんと請ひ、非東林黨は李可灼の忠愛より出でたるを認め且つ光宗が紅丸によりて死せるにあらざるを稱し、其の罪なきを論じて不問に附せんと主張したが、後遂に李可灼を貶謫した、之を紅丸の案といふのである。

移宮の案 熹宗の位に即くや閣臣劉一燝等は李選侍が帝と同居して國政に干涉するを恐れ、相謀りて李選侍を出して之を熾鸞宮に移すに及びまた物議を惹起すに至つた。時に楊漣が御史左光斗と心を協せて綱紀の振肅を圖り秩序を正したが、既にして先朝の妃嬪を冷遇したりと流言するものあり、御史賈繼春が上書して李選侍を安んせんことを請ふや、帝は怒りて賈繼春を斥けたるも後再び起用するに及んで移宮の案がまた起り、非東林黨は妃嬪を冷遇するを咎め、東林黨は執政の權略を稱揚したのであ

る。かくて挺撃、紅丸、移宮の三案は東林非東林の兩黨争論の根本となり、東林黨は理を以て進み非東林黨は情を以て推し、互に相排撃して論争が永く續いたが、葉向高のまた相となりて劉一燝と謀り高攀龍、楊漣、左光斗等の東林黨を起用し趙南星を吏部尙書となすに及び趙南星は主として遺佚を擧げ悉く非東林黨を排斥したから、非東林黨は宦者魏忠賢と結托して之に對抗するに至つたのである。

魏忠賢の横暴 魏忠賢は初めの名を進忠といひ河間肅寧の人にして黠慧無頼であつたが熹宗の微時に歡心を得、遂に入りて光宗の生母王才人の典膳となり深く司禮太監王安に結んだ。時に熹宗は尙ほ太孫であつたが魏忠賢は其の乳母客氏と通じ志を同じくして私をなしたから、熹宗の立つに及び王安が諸大臣と政を輔け魏忠賢の侵權を見て重く之を懲らんとしたるに、魏忠賢は客氏と謀つて王安を殺し遂に權を振ふに至つた(一六二一年)。是より魏忠賢は益々憚かる所なく、自ら東廠を掌ざりて内操を設け兵十萬人に甲を衷にして出入せしめ、また帝を引いて日に倡優、聲伎、狗馬、射獵をなした。會々光宗の選侍趙氏が客氏及び魏忠賢と相協はなかつたから旨を矯めて死を賜ひ、裕妃張氏を幽死せしめ、また皇后張氏が屢々客氏及び魏忠賢の過失を指斥したから客氏は大に怒り、其の娘むや計を以て之を墮胎せしめ、次で帝の郊祀の日に其の寵する所の馮貴人を殺して暴疾を以て聞し、また李成二妃を幽するに至つたのである(一六二三年)。是に於て左副都御史楊漣が抗疏して魏忠賢の大罪二十四を論

するや、魏忠賢は大に懼れ泣いて帝に訴へ且つ東廠を辭したが、客氏が傍より之を調停するに及び帝は惘然として辨せず、遂に楊漣の疏を下して切責したから廷臣益々憤り相次で上疏するもの七十餘人に及んだが、帝は皆聽かずして其の籍を削るに至つた。是より魏忠賢の驕横益々甚だしく、出づる毎に車馬儀衛の盛を乘輿に僭擬し、また腹心を任用して多く士大夫の罪を羅織したから、葉向高は時事の日に非なるを見て職を去り趙南星、高攀龍等は罷められ、陳于廷、楊漣、左光斗等は籍を削らるゝに至り、天下の大權は全く魏忠賢に歸したのである（一六二四年）。時に大學士魏廣微が摺紳便覽を作り葉向高、趙南星、楊漣、左光斗等百餘人を目して邪黨となし、黃克纘、王永光、徐大化、賈繼春、霍維華等を以て正人となし、之を魏忠賢に進め之に據りて黜陟をなさしめ、盛に群小を薦めて善類を一掃したから五虎、五彪、十狗、十孩兒、四十孫等の佞輩を出すに至つた。魏忠賢は尙ほ是を以て満足せず、東林黨を怨める崔呈秀を御史となし注文言の疑獄によりて趙南星、楊漣、左光斗等を獄に下し、遂に楊漣及び左光斗を獄死せしめ、天下の講學書院を毀ち、東林黨人の姓名を榜して天下に示し（一六二五年）、三朝要典を作り東林黨を詆譏して其の罪を暴揚し、また高攀龍等を捕殺する等其の暴虐殘忍實に言ふに堪へざるものあり、次で皇極殿の成るに當り魏忠賢は上公となりて黨與は皆官を進め其の勢が益々盛になつたのである。會々浙江の巡撫潘汝楨が西湖に魏忠賢の生祠を建て、より之に倣ふものが到る處

に起り、或は祠に入りて禮拜せざるに坐して殺さるゝものがあるに至つた。是に於て魏忠賢は遂に非望を覬覦し、先づ兵賦の實權を收めんと謀り其の黨與を用ひて各地の關係漕運を督したが、後幾許もなく帝は在位八年にして一六二七年死し、其の弟信王由檢が立ちて毅宗（莊烈帝）となるに及び遂に貶謫せられたのである。時に魏忠賢の黨與が朝廷に林立して敢て其の奸を發くものなかりしも、毅宗はもと魏忠賢の姦惡を知つて居たから、位に即くに及んで専ら其の抑制に力の、次で御史楊維垣が首として崔呈秀を劾し、更に主事陸澄源等が上疏して魏忠賢の十大罪を劾するに至り、帝は魏忠賢を召して之を示し、遂に貶して鳳陽に安置し其の罪を天下に榜示したから、魏忠賢は行いて阜陽に至り自ら縊れて死し、崔呈秀も之を聞いてまた自殺した。帝は之を聞き命じて其の屍を磔し、客氏以下の姦黨を戮して三朝要典を毀ち諸臣の冤に陥れるものを赦して其の家族を釋し、悉く前朝の弊を一掃したから黨人跋扈の勢が漸く止みたるも、此の時に當りて外は滿洲の勢が益々強く内は流賊が各地に起り、明室滅亡の期は漸く近づくに至つたのである。

第二十一章 流賊の蜂起 明の滅亡

礦稅の害と流賊の蜂起 初め神宗は朝鮮を援けて日本と戦つた爲め國用の窮乏を招き、頻に富國の策を講じて礦山を開き鹽、茶、船舶等の稅を増徴し、皆宦官をして之を領せしむるに至り礦監、稅監が各省に遍く、奸吏が勢に乗じて重斂厚賦を事として士民の困弊を顧みなかつたから、天下遂に亂を懷ふに至つた、之を礦稅の害といふのである。後神宗の死するや光宗は遺詔によりて礦稅を罷めたるも、害毒は既に天下に瀰漫し士民の怨望して叛くものが相續いで起つた。是より先き一五九七年播州の宣慰使楊應龍が叛き、諸苗を糾合して貴州の郡縣を掠め寢る湖廣に及んで勢熾であつたから、神宗は李化龍に命じ川湖貴州の軍勢を都督して之を討平せしめたが、一六二二年に至りて山東の白蓮賊徐鴻儒が亂を作し、自ら中興福壽帝と號し紅巾を用ひて讖となし、遂に鄆城を陥れて其の勢猖獗となり熹宗は七ヶ月にして漸く之を平定したのである。然るに一六二二年四川永寧の土司奢崇明が反し、全蜀を震動して成都を圍み大梁國と僞稱して丞相以下の官を設け、布政使朱燮元の爲めに討平されたが、翌年に至りて故の貴州水西の安撫使安堯臣の族子安邦彦が堯臣の遺子位を挾んで叛き、奢崇名の聲援をなして自ら羅甸大王と稱し其の勢また盛であつた。時に奢崇明父子は澶州にあり朱燮元の爲めに

に破られて蘭州城に奔り、また參將羅乾象に追窮されたが安邦彦の援兵を得て官軍に抗し、尋で朱燮元に破られて平らぎ安邦彦もまた遠く通れたが、後幾許もなくして賊勢がまた振ふに至つたのである。既にして一六二八年に至り陝西大に饑ゆるや流賊がまた起つた。是より先き宦者喬應甲が陝西の巡撫となり、朱童蒙が延綏の巡撫となり共に貪黷にして人民を虐げたから白水の王二、府谷の王嘉允、宜川の王左掛等が並び起りて城堡を攻め官吏を殺し、安塞の馬賊高迎祥は自ら闖王と稱し、饑民の首領王大梁は自ら大梁王と稱して衆を聚めて之に應じ、三邊の饑軍がまた群起して盜をなし、其の勢次第に長じて延安、榆林の間には流賊が盛に横行した。此の間朱燮元は兵部尙書となり、また雲貴川湖廣西軍務總督となり、五省の軍事を督して一六二九年安邦彦、奢崇明を擊殺し、九年の間跳梁したる巨寇を漸く平ぐるを得たのである。

張獻忠李自成の蜂起 然るに陝西の流賊は勢益々猖獗にして一六三〇年延安の張獻忠がまた起り、衆を聚めて十八寨に據り八大王と稱し、翌年に至りて混世王、高迎祥等と山西に聚まり上天龍、過天星等がまた來り會し、三十六營を建て、衆二十餘萬を得、米脂の李自成がまた往いて之に依り闖將と稱して張獻忠等と合した、李自成は高迎祥の甥である。時に毅宗は兵食の足らざるを以て田賦を増すに至り人民大に愁怨し、且つ内官が命を銜みて四出し暴掠を逞うしたから益々人心を失つたが、總兵

官曹文詔、總督洪承疇がよく戦ひて連りに賊を平涼、慶陽に破り、一六三二年略々關中の巨寇を滅盡し進んで山西に向つた。然るに其の將帥が多く和協しなかつたから高迎祥、羅汝才、張獻忠等が道を分ちて四出し、大寧、澤州、壽陽の諸州縣を陥れ進んで濟源、清化鎮を掠め、摩天嶺より武安に抵り河北の三府所屬縣を焚却し、一六三三年遂に黄河を渡りて滎地、伊陽、盧の諸縣を陥れ、南陽、汝寧を分掠して湖廣に入り、李自成はまた別に一軍を擁して勢を振つたのである。既にして一六三四陳奇瑜が河南山陝川湖の軍を總督して流賊を討ち大に功を奏したから、張獻忠は商雒に奔り高迎祥、李自成は興安州の車箱峽に遁れ食盡くるに及んで伴り降るや、陳奇瑜は賊を輕んじて其の死を宥したから高迎祥、李自成はまた背き去りて鞏昌、平涼、臨洮、鳳翔等の諸府數十州を蹂躪し、隴州を圍み洪承疇に破られて東し靈寶、汜水、滎陽を陥れ進んで鳳陽を屠りたるも、洪承疇の勢盛なるを以て退いて陝西に還つた。一六三五年張獻忠がまた來りて高迎祥、李自成と鳳翔に會し、陝西總兵官曹文詔を殺して流賊の勢益々盛になつたから、毅宗は盧象昇を總理江北河南山東湖廣四川軍務となして關外を討たしめ、洪承疇をして關中を督せしめたのである。時に高迎祥、李自成はまた兵を分ちて進み高迎祥は武功、扶風以西を略し李自成は富平、三原以東を略したが、洪承疇が李自成を渭南の臨潼に破つたから李自成は高迎祥と共に走りて張獻忠に投じ、共に陝州を陥れ洛陽を攻めて大に敗れ張獻忠は嵩

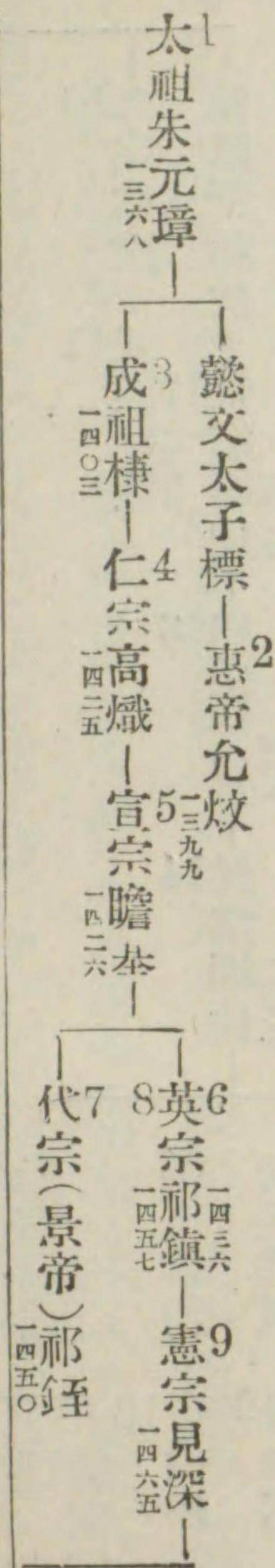
縣に走り高迎祥、李自成は偃師、鞏縣に走つて幾許もなく其の勢を恢復したが、一六三六年陝西巡撫孫傳庭が高迎祥を整屋に執へ、京師に送つて之を磔殺したから賊黨は共に李自成を推して闖王となした。一六三七年張獻忠は襄陽より東して江北の賊と合し安慶を犯し尋で敗れて太湖山中に潛み遁れて湖廣より江北に入り、また敗れ南走して總兵左良玉に破られ、僞つて總理南畿河南山西陝西湖廣四川軍務熊文燦の軍門に降つた。此の間李自成は河南を攻掠し朱仙鎮に敗れて西走し、また陝西に入りて延安、涇陽に寇し遂に三道より四川に入りて成都に逼り、洪承疇と潼關に戦ひ大に敗れて妻子と失し殘兵を率ゐて商雒に遁れ其の勢が頽れたのである。然るに當時滿洲軍の入寇甚しき爲め一六三九年洪承疇等が召されて入衛したから賊勢また振ひ、尋で張獻忠がまた叛き西走して房縣を下し、李自成もまた出で、之に依りたるも張獻忠が之を圖らんとしたから遁れ去つた。既にして官軍が大に李自成を函谷關に破り、李自成は遁れて鄖陽より河内に入り饑民數萬を率ゐて勢また振ひ、尋で永寧を陥れ宜陽を下し一六四一年遂に河南府を陥れて福王常洵を殺したのである。是より先き張獻忠は左良玉に破られて阜山に走つたが、羅汝才と合して大昌を陥れ劍州を下し轉戦して四川に入り、また左良玉の軍を破り遂に襄陽を陥れて襄王翊銘及び貴陽王常法を殺した。既にして左良玉が大に張獻忠を信陽に破り張獻忠はまた走りて李自成に依つたが、李自成は羅汝才と合して河蕪に寇し遂に張獻忠を殺さん

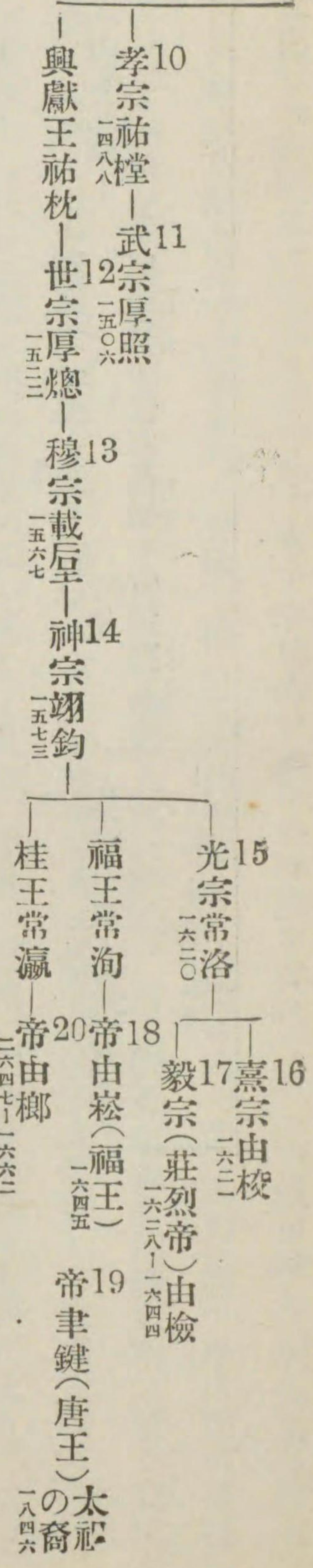
としたから、張獻忠は霍山に走つた。尋で李自成は進んで南陽を陥れて唐王聿鎮を殺し、翌年遂に河水を決して開封を陥れ次で汝寧を取り襄陽を陥れて荊州を侵したのである。此の時に當り李自成の勢甚だ盛にして河内を席卷し荆襄を連陥して部下の衆數百萬に達し、自ら奉天倡義大元帥と稱し尋で羅汝才を殺して其の衆を合せ、襄陽に據り襄王の宮殿を修めて之に居り新順王と僭號して官屬を設けた。此の間張獻忠は既に太湖を陥れ湖廣の兵を撤して黃梅、廣濟、雒州、雒水を陥れて黃州に入り、次で漢陽を屠り武昌を陥れて楚王華奎を殺し楚王の第に據りて西王と僭號し、諸官を偽設し楚邸の金を發して饑民を賑はし、尋で四川に入りて成都を陥れたのである。

明の滅亡 此の時に當りて諸大賊或は降り或は死して殆ど盡きたるも獨り李自成及び張獻忠の二大賊尙ほ存して猖獗を極め、李自成は襄陽より出で、潼關を破り華陰、渭南を陥れ華商、臨潼を破り、西安を降して秦王存福を執へ西安城を修築して馳道を開き、兵を渭橋に閱して鉦鼓天地を震動せしめ、益々西進して延安、西寧、甘肅を陥れ、一六四四年名を自晟と改めて王號を僭し、國を大順と稱し西夏の李繼遷を太祖となし西安に都して大に功臣を封じ、尋で自ら黄河を渡りて太原を陥れ別將を遣はして畿南を犯し眞定を陥れた。是に於て毅宗は己を罪する詔を下し帑金五千を發して守具を治め、天下に詔して勤王の兵を徵したるも効なく、左都御史李邦華が帝の南遷及び太子の出で、軍を江南

に撫せんことを請へるも報せず、李自成が進んで寧武關を陥れ大同を下すに及び、大學士李建泰が保定より上疏して南遷を請へるも、毅宗は聽かずして城守の計をなしたのである。既にして李自成は居庸關を犯し明の十二陵を焚きて京師に迫まり、官軍連りに敗れて賊軍遂に闕を犯すに至り、毅宗は煤山に登りて自ら縊れて死し大學士范景文以下殉死するもの數十人に及び、明は遂に亡びて李自成が帝位に上つた、時に一六四四年三月である。明は太祖より是に至るまで十七代二百七十七年にして亡びた、然れども此の後明の宗室福王、唐王、桂王が相次で帝統を傳ふること三代十八年に及んで居るが、徒らに明室の名を守りたるに過ぎなかつた、故に明の天下は既に毅宗の時に亡びたりといふべきである。

明の帝系





清の太宗の経略

滿洲は一六二六年太祖が死して其の子太宗皇太極が立ち、曩に朝鮮が明に應じて兵を出せる讐を報ひんと欲し貝勒阿敏を遣はして之を伐たしめ、平壤を陥れて京城に迫まつたから、朝鮮王仁祖は戦敗れて江華島に遁れ遂に和を請ふた。是に於て一六二七年太宗親ら兵を督して明を攻め大凌河城を取り進んで錦州を圍むや、太監紀用、總兵趙率教が使を遣はして和を請ひたるも許さず、別に兵を分ちて寧遠城を攻めたるに袁宗煥がよく防ぎて陥らず、遂に圍を解きまた兵を増して錦州を攻めたが暑氣甚だしきを以て克つ能はず、大小凌河二城を毀ちて還つた。既にして袁宗煥は兵部尙書に進み師を薊燕に督して太宗と塗河堡に戦ひ互に勝敗あり、和を議して其の間に故疆を修理せんとしたが、會く毅宗が反間を信じ一六二七年袁宗煥を逮へて獄に下し、もこの督帥孫承宗を以て之に代へるに至りて軍氣大に沮喪し、一六三二年孫承宗が大兵を率る進みて關内の四城を復したる

も、翌年太宗が明軍と大凌河に戦つて大に之を破つたから明の諸將は前後降るものが多かつたのである。初め淹答の勢を漠南に振ふや韃靼可汗の勢が衰へて纔に察哈爾部を保つて居たが、ト赤汗より四傳して林丹汗 (Jingtan Khan) に至り胡士胡圖可汗 (Khutuktu Khaikan) と稱し、稍く勢を恢復して遼東を犯したまた喀喇沁 (Karachin) 其の他の諸部を攻破し、勢に乗じて宣府、大同を犯し到る處掠奪を恣にしたから、明は重幣厚賂を以て之を誘ひ滿洲を禦がしめた。是より林丹は遼東を犯したまた科爾沁 (Kiorchin) 部を攻め鄂爾多斯 (Ordos)、土默特 (Tumed) 等の諸部を壓迫したから、諸部は其の凌虐に苦しみ滿洲に歸服して援を請ふに至つたのである。是に於て太宗は一六三四年蒙古諸部の兵を合せ察哈爾を征して大に之を破るや、林丹は西走して遂に青海の大草原に至りて死し、滿洲の大軍が歸化城に至り其の部落數萬を收めて還り、翌年林丹の子孔果爾汗 (Kongor Khan) が傳國璽を奉じて來り降つたから、一三三六年太宗は更に國號を清と改め改元して崇徳といふた。時に朝鮮は一たび滿洲と和したるも國初より明と關係が深かつたから、太宗の蒙古を伐つに乗じてまた明と通するに至り、太宗は蒙古を平定して還るや親ら兵十萬を率ゐて朝鮮を征したから、仁祖は援を明に求めたが明は國內に流賊の勢盛なるを以て兵を出す能はず、太宗が遂に京城を陥るに至り仁祖は明と絶ちて清の封冊を受けた、實に一六三七年である。此の間貝勒多爾袞は朔州より寧武關を破つて代忻應惇の四

州を略し、尋で武英郡王阿濟格は獨石口より居庸關に入り、昌平を抜きて北京に迫り十二城を取つた。既にして一六三八年多爾兇がまた兩路より進んで盧象升を保定及び鉅鹿に破り、更に眞定を略し深入して濟南を破り遂に徳王由樞を執へた。時に太宗は多爾兇の退軍を易からしめんとして錦州を攻め、錦州が急を明廷に告げたから洪承疇が薊遼の總督となり、總兵吳三桂等と大兵を率ゐて寧遠に集まつたが、一六四一年太宗親ら赴き伐つに及で吳三桂等は杏山に奔り洪承疇は松山に入つた。翌年太宗が松山を下して洪承疇を虜にし遂に錦州を下し杏山、塔山も皆降つたから、明廷大に震動し使を遣はして和を議せんとしたるも太宗は報せず、尋で明は再び使を遣はしたるも宮中に尙ほ和議を悦ばぬものがあつて講和が遂に行はれなかつたから、太宗は貝勒阿巴泰に命じて明を伐たしめ、左翼は界山より進み右翼は雁門より入りて薊州に會し、次で山東に進んで兗州に至り十八州を下して還つたのである。此の時に當り明は流賊が猖獗を極めて滅亡旦夕に迫まつて居たから、清の諸將は一舉して北京を取らんことを請へるも太宗は許さずして天時を待つたが、此の年八月太宗遂に死して其の子世祖福臨が立つた、時に一六四三年である。

世祖の侵略と李自成の滅亡 世祖は年甫めて六歳にして位に即き濟爾哈、多爾兇の二人をして國政を理めしめ、翌一六四四年多爾兇に命じ兵を率ゐて明の關外の地を收め且つ中原を經略せしめた。是よ

り先き明は李自成が連戦各地を陥れて遂に北京に迫つたから、毅宗は悉く關外の四城を撤し、寧遠の總兵吳三桂を召して關に入り之に備へしめんとし、吳三桂は寧遠の兵民五十萬を率ゐ西して豊潤に至るや、李自成が既に北京を陥れて毅宗の死せるを聞き、敢て進まず縞素を着けて喪を發したが、李自成が兵二萬を派し東して欒州を攻め山海關に向ふや、吳三桂は兵を回して之を撃ち其の衆八千を降し、急に使を遣はして援を清に請ふたのである。時に多爾兇は未だ寧遠に至らなかつたが吳三桂の書を得て即日兵を進め、寧遠を踰えて山海關に至つたから李自成は之を聞いて大に驚き、自ら精兵二十萬に將として東に來りまた別將をして兵二萬を以て關外に出でしめ吳三桂を夾撃せんとした。既にして吳三桂は多爾兇を迎へ兵を合して李自成の軍と關内に戦つて大に之を破つたから、清は吳三桂の爵を進めて西平王となし滿洲兵一萬を附して北京に向ひ李自成を追撃せしめた。李自成は永平より使を吳三桂に遣はして和を議せしも應ぜざるを見るや、北京に入りて吳三桂の家族を屠り明の諸王を殺し宮殿を焼き輜重を載せて西走したのである。是に於て多爾兇は北京に入りて帝禮を以て毅宗を葬り次で世祖は遷都の議を決して北京に都を奠めた、時に一六四四年十月一日である。此の間吳三桂は清兵と共に李自成を追撃してまた大に之を破り、李自成は遂に山西に走り尋で陝西に走りて西安に入つたが、既にして清軍が山西を定めて關外の地を取り潼關に入りて自李成を破り、李自成は遂に湖廣に

東洋大學
教授

田中治吾平先生著

定價貳圓五拾錢(送料十二錢)
菊版クロス上製 三百余頁

天照大神々格論

新刊

國土神に筆を起して皇祖大神の御神格を宣明し、神道に於ける一神教思想の發達を論述したる堂々一千有余枚の大論文。本書は、東洋大學教授田中治吾平先生がその該博なる識見と多年蓄積せる深奥なる蘊蓄とを傾け盡したる卓説にして現下動搖せる思想界に一味の清涼劑を投じたるものと云ふ可く、神官、宗敎家は勿論、教育者、國文學研究者等必備必讀の名著也。

發行所

東京神田區今川路
小川二丁目七

雄

山

閣

